330
a
484

始

法學博士 福田德三 著

經濟學全集
第一集

經濟學講義

第二分冊

廉刷版

330
484

1325

sto mehr ist er in jedem Schritt, den er tut, von dem Urteil seiner Umgebung abhängig. Der Mensch isst und trinkt, er kleidet sich und richtet seine Wohnung so ein, wie es seine Freunde, seine Standesgenossen für passend halten. Jeder fürchtet sich in erster Linie vor dem, was man von ihm sagen werde; er fürchtet die Sticheleien, er fürchtet, sich lächerlich zu machen. Viele geben Feste über ihre Mittel, weil sie fürchten, sonst getadelt zu werden. Die arme Witwe ruiniert sich und ihre Kinder, um dem Mann ein anständiges Begräbnis zu verschaffen, d. h. ein solches, wie sie glaubt, dass es die Nachbarn erwarten. —Schmoller, Grundriss. I. 1919. S. 30.

人として一定の範圍の同類の認識を得ずして生活し得る者はあらず。其文化の程度低き程其爲す所の一擧一動皆周圍の人々の判斷に依賴するものなり。人は其食其飲其衣其住皆其の朋友・同胞が適當と認むる樣に爲すものなり。人は皆他人の外聞なるものを第一に憚る。人は他人より笑はれんことを最も怖る。多くの者は其資力不相當の饗宴を張りても他人の嘲を招かざらんことを勉む。貧しき寡婦も世間の嘲笑を免れんが爲めに其夫の爲めに華麗なる葬式を行ひて己れと己れの子とを零落の淵に沈むるを辭せざることあり。

こと。マ氏が文化の發達に伴ひ聲聞を求むるの念增すこと云ふに比すれば遙かに事の眞を得るに近し。

ブレンタノ先生も亦曰く、

Tatsächlich ist dieses Bedürfnis (nach Anerkennung durch Andere) weit dringlicher und tritt geschichtlich weit früher hervor als andere Bedürfnisse, welche die Betrachtung über das Seinsollende diesem Bedürfnis vorauszustellen pflegt. —Brentano, Versuch einer Theorie der Bedürfnisse. München 1908. S. 19.

事實上に於ては他人の認識を得んとの欲望は、他の欲望よりも、遙かに强く、又歷史上遙かに早く起るものにして、多くの學者が他の欲望を以て先なりとするは、事實に基かず、單に理想的に『斯く在らざる可からず』てふ、架空の構想に基く謬論なり

マ氏亦此謬想に陷れるもの甚だ惜む可し。

次に氏が活動は欲望に先つ所以を論じたるは、甚だ當を得たりと雖も、是れ亦シュモラー等が說く行動の衝動 Thätigkeitstrieb の論に比すれば、論旨幼稚の嫌あるを免れず。マ氏曰く

Speaking broadly therefore, although it is man's wants in the earliest stages of his development that give rise to his activities, yet afterwards each new step upwards is to be regarded as the development of new activities giving rise to new wants, rather than of new wants giving rise to new activities.

故に汎く言ふときは、人類發達の程度低き時に於ては、欲望ありて後活動起るものなれども其以後は、向上の一歩毎に、新欲望が活動を惹き起すよりも、寧ろ新活動が新欲望を招致すること愈發達するものと認む可きなり

シュモラーは曰く

Wir beobachten den Thätigkeitstrieb schon beim Kinde, das mit Bauklätzchen ein Haus baut, das sägen und reimen, pappen und malen will.……

行動の衝動は既に幼童に於て存するを見る、家を作り、木を鋸り、詩を作り、紙細工し、畫を描く、皆行動の衝動の然らしむるに非ざるはなし

文化の進歩は行動の進歩を多樣ならしめ、其目的を複雜高尙ならしめこそすれ、衝動其物は、文明人と野蠻人とを支配するの度合に於て異るものにあらず、マ氏の論は僅かに一班を捉へて全豹となすものなり。

而してマ氏は以上の立論に基て斷案を下して曰く、

It is not true therefore that "the Theory of Consumption is the scientific basis of economics (Banfield)." For much that is of chief interest in the science of wants, is borrowed from the science of efforts and activities. These two supplement each other……But if either, more than the other, may claim to be the interpreter of the history of man, whether on the economic side or any other, it is the science of activities and not that of wants.

以上云ふ所を綜合すれば、バンフキールドが嘗て主張したる「消費論は經濟學の根柢なり」との論は眞ならざるを知る可し。何となれば欲望論に於て重要なる研究は、多く努力及行動に關する學理より借り來るものにして、此兩者は相互に補ふものなり。乍去兩者の內何れか人類歷史を解釋するに於て重しとするかと云はゞ、經濟上に於ても其他の方面に於ても、其は欲望の學理にあらずして行動の學理なればなりと、從て氏は本編に於て論ずる欲望の理論は、單に形式的性質のものに止るものにして、欲望に關する最終の研究は經濟學の始めに來る可きものにあらず、最尾に來る可きものなり、否經濟學の範圍を超越するものなりと云ひて、脚註中にヘルンの『プルートロヂー』に就て數言を費やして本章を結べり。是れ第一章に於て既に示せる如く、マ氏は正統學派の舊套を脫せず、欲望の研究は、經濟學以外に在る可きものなりとの見地を執る當然の結果にして、行動卽ち經濟行爲及其結果のみに重きを置きて、經濟行爲の淵源なる主觀的方面を輕んずるは、マ氏の如く從來の客觀主義を守るものに於ては、敢て異とするに足らず。本編の全部はマ氏の此立場を十分諒解したる後にあらざれば、其眞意を汲み難し。

讀者先づ心を茲に用ゐよ。

右のマ氏の見解に反對するは、主觀學派たる獨墺學者の殆んど全部（ヂーツエルを除く）の執る所の說なり。ブレンタノ曰く、

Ausgang aller Wirtschaft ist das Bedürfnis. Der Mensch empfindet Bedürfnisse. Diese rufen seine

wirtschaftliche Thätigkeit hervor. Ihr Ziel ist die Befriedigung der Bedürfnisse. Mit Recht ist daher zu sagen: die Theorie der Bedürfnisse ist die wissenschaftliche Grundlage der Wirtschaftslehre. (Banfield) S. 1.

凡ての經濟の出立點は欲望なり。人は欲望を感じ、經濟行爲茲に起る。經濟行爲の目的は欲望の充足にあり、故に欲望は經濟學の學理的基礎なりとバンフキールドの云へるは至言と言はざるを得ず

此言は、今日の價格經濟、殊に資本主義經濟に就ては、其儘之れを受入るゝこと能はず、寧ろマーシアルの見解の方當れるを認めざる能はず。其の他方に於て、近來ピグーの唱へ、マーシアルも亦時に暗示したる厚生經濟の見地に立つときは、確かに、一部の眞理を道破したものと云はざるを得ず。但しバンフキールドの如く、欲望の理論を以て直ちに經濟學の基礎なりとするは、今日の研究之れを承認せず、目的論的の解釋の方、寧ろ正鵠を得るに庶幾しとせざる可からず。故にバンフキールドの欲望を改めて、利用とせば、粗ほ當を得たりと爲すを得可し。

第二章　補　論

マ氏は脚註中にヘルマンの欲望の分類を擧げ、如此區別は價値多からずと云ふ。此論予の全く從ふ所なり。ヘルマンは

一、絶對的欲望　相對的欲望。二、高等欲望　劣等欲望。三、急切欲望　延し得可き欲望。四、積極的欲望　消極的欲望。五、直接欲望　間接欲望。六、一般欲望　特殊欲望。七、常住欲望　間歇欲望。八、永久欲望　一時欲望。九、經常欲望　非常欲望。一〇、現在欲望　將來欲望。一一、個人欲望　團體欲望。一二、私的欲望　公共欲望。

の區別を爲せり。經濟學の諸教科書皆其墨に倣ひ、或は精神的欲望肉體的欲望、絶對、相對等の種々の種類を擧ぐるを常とすれども、予はマ氏と同じく全く其說を執らず。之に反

し、シュモラーが衝動より見て立てたる分類論は、予の服する所なり。氏は先づ快不快の感情に論を起し、續て（一）自存衝動（二）性的衝動（三）行動衝動（四）認識衝動（五）競爭衝動（六）營利衝動の別を論ず。而して氏も從來の欲望分類法を非難す、其言に曰く、

Es will mir scheinen, dass mit der blossen Einteilung der Bedürfnisse in einige Kategorieen nicht viel gewonnen sei. S. 23.

予を以て見る、欲望を單に二三の部類に分別するは學理の上に得る所尠し

と。蓋し至言なり。

ブレンタノ先生は欲望の順次を其緊切の度より觀察して左の如くなりと論ず。

一、生命維持の欲望。二、性的欲望。三、聲聞を求むる欲望。四、死後の計に對する欲望（宗教上の欲望）。五、保溫の欲望。六、將來の計に對する欲望。七、療養を求むる欲望。八、清潔を求むる欲望。九、學問技藝に對する欲望。十、創造せんとの欲望（卽ち行動の欲望）　（同上欲望論十一頁至三十五）

欲望の種類を分つこと學者の隨意なれども、其總てを通じてシュモラーが認識（聲聞）を求むる衝動と稱するもの、卽ちブレンタノが第三に置く所のもの、マーシャルが desire for distincnion と云ふものこそ、今日實際生活に於て欲望の限度を定むるものなることは、之を認めざる可からず。ブ氏の所謂最緊切の欲望たる生命維持の欲望も、其最下位に置く學問技藝に對する欲望も、單に生命を維持し、學理を尋求するを以て止るものにあらず、一定の社會團衆の認識を得可き標準ありて、人は皆此標準に達せんと勉むるものなり。單に飢を充し渴を醫すを以て甘んずるものあるなし、必ずや自己の身分に應じ一般の認識を受け得可き食物飲料を一般の認識を受け得可き時、所方法に於て得んと勉むるものなり。此點より云へば、聲聞の欲望こそ今日の經濟生活に於ける欲望の根柢たり、中心たり、又發足點たり、到達點たるものと云ふ可きなれ。而も之と共に常に働きて已まざるものは、シュモラーの行動の衝動と名け、ブレンタノの創造の欲望（左右田博士の「創造者價値」はこれに該當するものか。）と稱するもの是れなり。人は何をも爲さずして一日も過し得るものにあらず。其心は思ひ、其手は動きて何事をか爲し、何物をか作り出さんとして息まざるものなり。無爲の生活

ほゞ人に苦痛を與ふるものはあらず。人は何をも求めず、何をも望まざるとき、猶動き、働かんと欲す。動き働きて後に至りて欲望始めて生ずること屢々あり。マーシアルが行動は寧ろ欲望に先つと云へるは此意に解す可きなり。

*　*　*　*　*　*　*

本章參考書は前文中に掲げたるシュモラー、ブレンタノ兩氏の著書の外、

Banfield, Four lectures on the organization of industry. London 1845.

あり。其他見る可きものは左の如し。

Kraus, Das Bedürfnis. Leipzig 1894.

Cühel, Zur Lehre von den Bedürfnissen. Innsbruck. 1907.

Ehrenfels, System der Wertteorie. Leipzig 1897.

Meinong, Psychologisch-ethische Untersuchungen zur Wertteorie. Graz 1894.

Hermann, Staatswirtchaftliche Untersuchungen. 2. A. 1870. S. 78 ff.

福田德三　企業心理論　經濟學研究七五一頁以下

福田德三　企業倫理論　續經濟學研究五八頁以下

猶マーシアルの引用せる

Hearn, Plutology, or Theory of the efforts to satisfy human wants. London 1864.

Jevons, Theory of political economy. 1871. 4. Ed. 1911.

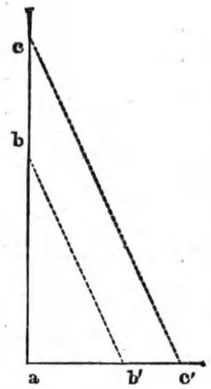
等を見よ。」

第三章　消費者需要增減の理

汎く人生の立場より見るときは、消費は目的にして、生產は手段なり。生產の起るは、消費ある可きを豫定するに依る。從て最終の需要は常に消費者の需要を措て外なく、生產者又は商人の需要は消費者の需要を基とする第二次的需要なり。今日の營利經濟に於て、一物を生產し、一財を買入るゝ生產者商人は常に之より生ず可き貨幣價値稱呼の利益

を目的とす。此利益は投機的見込及其他の原因によりて定めらるゝものなることは、後に說く所の如しと雖も、人間生活の本義より之を見るときは、其凡ては、消費者が其生產物又は商品に對して支拂ふ價に依りて定めらるゝものなることを論を須たず。言ひ換れば、消費者の需要は、總ての階段に於ける需要の根本たるものと云ふ可し。本編は此意味に於て最終需要たる消費者需要に就て論ぜんとするなり。マ氏曰く、消費者の需要は營利的需要（trader's demand）を支配すと。語簡にして盡せり。

消費者の需要は利用となりて顯はる。經濟學に於て云ふ利用は、原則として貨幣價値によりて言表はされ得可きものに限ることは、前編之を論ぜり。即ち今消費者の需要を論ずるに方りては、其貨幣價値に顯はれたる利用より推して之を測定す。元より財の人に與ふる滿足の度合は必ずしも、皆悉く貨幣價値に顯はるゝものと斷ず可からずと雖も、大體に於て物の價格は、其利用と相照應するものと見て差支なし。價高き物利用多く、價低き物利用少し。之を譬へて云へば、猶ほ形と影との如し。影の長さは物の長さにあらず、而も一定時に於て影長きときは、形長く、影短きときは形短し。利用は形なり、價は影なり。今此理を圖解すれば粗ほ左の如くならん。



(一) ab なる利用は ab′ なる價となりて顯はれ
(二) ac なる利用は ac なる價となりて顯はる
(三) ab の長さと ab′ の長さとは同からず
(四) ac の長さと ac′ の長さとは同からず

人の欲望は無限なり、而も亦た有限なり。無限なりと云ふは欲望其物に就て見るときにして、有限なりと云ふは欲望の對象より見たるときなり。欲望其物に就て見るときは、得るに從て多々益々辨じ、所謂隴を得ば蜀を望む、決して限界あることなし。然るに特定の對象に對する、特定の人、特定の時、特定の場所、特定の事情に就て見るときは、欲望は極めて有限的なりと云はざるを得ず。されば欲望無限の原則あり、欲望有限の原則あるは、決して矛盾にあらず。經濟學に於ては從來多く欲望有限の原則を說き、無限の原則に及ばず。然れども經濟上總ての進步の有力なる原因は人類の欲望無限にして、絕へて滿足し終ることなきに依るものなることは、學者の夙に說く所なり。唯夫れ無限に彌る欲望其

物は、寧ろ倫理心理の研究に屬し、之を經濟學に於て說く或は其所ならざるに似たり。之に反し欲望有限の原則は嚴密に經濟學の範圍に屬す。既に前に說ける如く、多くの學者は、抑も經濟なる概念を定むるに有限性、又は稀少性（存在量の限られたる財）を主なる要素と爲すは、畢竟此が爲めと云ふ可し。

欲望有限の原則は、經濟學に於て之を『利用遞減の法則』『欲望飽實の法則』又は『快感遞減の法則』と云ふ。マ氏の Law of diminishing utility 又は Law of satiable wants と稱し獨逸學者の Gesetz des abnehmenden Reizes と稱するもの即ち是なり。マ氏曰く、欲望の種類は限なしと雖も、各箇々の欲望には限界ありと。言盡さずと雖も、意は即ち右述ぶる所に同じ。マ氏は利用遞減の法則を左の如く定義せり。

The *total utility* of a thing to anyone (that is the total pleasure or other benefit it yields him) increases with every increase in his stock of it, but not as fast as his stock increases. If his stock of it increases at a uniform rate the benefit derived from it increases at a diminishing rate. In other words, the additional benefit which a person derives from a given increase of his stock of a thing, diminishes with every increase in the stock that he already has.

特定の人に對する特定財の全部利用（即ち其與ふる快樂其他の便益の總體）は其財の分量の增すに從つて增すと雖も、其比例は同じからず。財の分量一定率に從つて增すときは、之より生ずる便益は遞減率に於て增す。換言すれば、一定財の一定增量より生ずる便益の增加は其財を有する分量多き程遞減するものなり

即ち財の增加は、全部利用を增加すれども、箇々の增量の利用は却て遞に減少し行くものにして、終には增量より得る利用は之を得るが爲に費す費用（價）又は勞働の犧牲を償ふ能はざるに至る。然る場合には、原則としては增量を得んとするの念を絕つ可し。費す所得る所に超過せず、從て猶之を得んと欲する需要の起る最低限を稱して、マ氏は『限界購入分』marginal purchase と云ふ。此點を限界とし其以下の利用の增加にては最早購入の念を絕つ可きが故に斯く名くるなり。而して此『限界購入分』の與ふる利用を稱して『限界利用』marginal utility と云ふ。自己自ら生產する場合に於ては限界利用は限界生產量の利用なり。今此限界利用の語を以て前述の利用遞減の法則を改め言ふときは

特定の人に對し、特定物の與ふる限界利用は、其人の既に有する其物の分量の多きに從ひ減少す。

と爲すを得可し。

但し此法則には一の前提條件あり。即ち其特定人特定物は亦た一定の時間の下に在る可き事是れなり。時を異にするときは、人の嗜好に變化を生じ、從て多々益々辨ずることありて此法則は行れず。マ氏即ち云ふ

It is therefore no exception to the law that the more good music man hears, the stronger is his taste for it likely to become; that avarice and ambition are often insatiable; or that the virtue of cleanliness and the vice of drunkenness alike grow on what they feed upon. For in such cases our observations range over some period of time; and man is not the same at the beginning as at the end of it. If we take a man as he is, without allowing time for any change in his character, the marginal utility of a thing to him diminishes steadily with every increase in his supply of it.

されば右の法則と矛盾するが如き多くの事例も其實矛盾にあらず。例へば音樂を聽くこと彌々屢にして之に對する趣味の益々加はるが如き、貪慾・名譽心の絶えて飽き足るこ

無きが如き、清潔の美性、飲酒の惡癖の多々益々增進して已むなきが如き、是等皆一定時に於ける出來事にあらず、長き時間に渉りて起ることにして、時を經るに從ひ人の性格と其趣向とに變化の生ずるが爲めに外ならず。されば之れを一定時に限りて觀察するときは、音樂を終日聽くものは厭き、飲酒多量に及べば陶然として辨ぜざるに至る可くして、利用遞減の法則必ず行はれ、限界利用は、其得る量の多きに從つて遞減すること疑なきものなり

と。是れ即ち予が前段に欲望無限の法則と有限の法則とは決して撞着するものにあらず、觀察點を異にするに從ひ、或は一或は他の原則支配するものなりと云へるとに言異にして意同じきなり。唯マ氏がこれを一の前提條件なりとし、又單に時間の經過の如何を以て兩者を說明し去らんとするは、聊か服し難し。欲望無限の原則は、有限の原則と相對立する同位原則なり單に一の前提條件たるに止るものにあらず。否欲望無限の原則先づ在りて、有限の原則其意味を成すものなり。欲望其物無限なるにあらざれば利用遞減の法則なるもの殆んど存在の理由なし。無限なる欲望の働きて止まざればこそ、箇々の對

F. I, 29.

象箇々の時箇々の事情の下に於て利用遞減の現象起るものなり。何ごなれば利用遞減ごは、畢竟物自らの性質に變化あるを意味するにあらず、物に對する主觀的欲望の減少を云ふなり。從て嚴密に云ふ時は遞減するものは、物に附着する利用性にあらず、之に對する人の欲望なり。變ずるものは人の心にして、物の性にあらず。何故に人の欲望は得る事彌々多くして彌々減ずるやご云ふに、其が無限にして、一物を得ば更らに他物を得んごし、綿服を得るものは絹衣を欲し、米を食ふものは、魚を欲し、酒を飲むものは肉を望み、從て其既に得たるものを更らに附加せられんよりは、其未だ有せざるものを得んごの念强く、其結果既に有するものに對する欲望遞減して、茲に其特定物に對しては、利用遞減の作用起るものなればなり。故に曰く、欲望無限の原則ありて、欲望有限の原則其働を生ず。縱令時間の經過あらざるも、欲望無限の原則は、有限の原則の根源ごして常に其働きを廢するこごなしご。但し時間の經過あるごきは、無限の法則の働作は表面に顯はれて發動し、容易に人の注意を惹くに至るものなるこごは、マ氏の論ずる處當れり。

利用は經濟上に於ては價によりて言顯はさるゝこご前に說けり。今利用遞減の法則を細說せんには、價の上に表はれたる其働作を見るに若かず。マ氏は之を日常生活必需品の一なる茶に就て例證せり。左に之を示さん。

茶	一斤	此價	二志	此茶に對し需要者が支拂はんごする最高の價	十志
				此茶無料なるごき需要者が得んごする最高量	一ヶ年に　三十斤
				然るに實際需要者が價二志の場合に買ふ分量	一ヶ年に　十斤

ごせよ。此場合に於ては第九斤ご十斤ごより得る滿足の差額は、價に言表はして二志なる可き理なり。之ご同じく第十一斤は二志を支拂ふ可き丈けの利用なき理なり。即ち二志なる價は限界購入分（即ち第十斤）の利用（即ち此場合に於ける限界利用）を言表はすものなり。而して限界購入分に對して支拂はんごする價、換言すれば限界利用を貨幣額にて言表はしたる此二志なる價は、之を『限界需要價』marginal demand price ご稱して可ならん。依て左の定義を得るなり。

人の有する一物の分量多き程彼が更らに加へて得んごする增量に對して支拂はんご

する價格は少し。換言すれば、之に對する需要價格は遞減す。但し此場合に於て他の事情卽ち貨幣の購買力買手の所有する貨幣の額何れも均しきものゝ前提するは勿論なり。

乍去茲に忘る可からざるは、需要が需要として其働きを爲し得るは、此需要價格（卽ち買手が買はんとする價）に於て、賣らんとする賣手あるときに限ることゝ是なり。從て右の法則の行はるゝには、常に貨幣卽ち一般購買力の限界利用に於る變化如何を度外視す可からず。貨幣の限界利用に變化生ずるときは、需要價格は同一金額を以て表はさるゝとも其働きは同じからず。然れども一定の時・一定の所・一定の事情の下に於ては、貨幣の限界利用亦一定なるが故に、貨幣額の多少は直ちに利用の多少に相應ずるものにして、一圓の需要價格あるものゝ、十圓の需要價格あるものゝは、其利用の差亦一と十との關係に在るものゝ推定して差支なし。

貨幣の限界利用は時を異にし、所を異にするによりて、同一人に取りても亦差違を生ずるは、元より言を俟たざる所なれども、茲に特に忘る可からざることは、貨幣の限界利用も亦物の限界利用に均しく、一定人が既に有する分量多きに從ひ、其限界利用少きこゝ是なり。之を名けて『貨幣利用遞減の法則』と爲す或は不可ならじ。マ氏故に曰く、貨幣の限界利用は富者よりも貧者に向て大なりと。百圓の收入ある人と三百圓の收入ある人とは均しく乘るに、前者は一ヶ月二十回乘り、後者は五十回乘るとせよ。前者の二十回の乘車の限界利用後者の第五十回の乘車の限界利用共に四錢なる貨幣額によりて言表はさる。而も前者に取りて四錢なる貨幣額の有する限界利用は、後者に取りて同額の有する限界利用よりも大なり。卽ち人富めば富む程、貨幣の限界利用を減じ、從て一定の利用に對し支拂はんとする價格は增す。之に反し貧き程、貨幣の限界利用多く、從て一定の利用に對して支拂を肯てする價格は減ずと。

されば、利用遞減の法則は、常に兩面より觀察を下すを要するものなり。

一　有する財の量多き程其財の限界利用減ず。

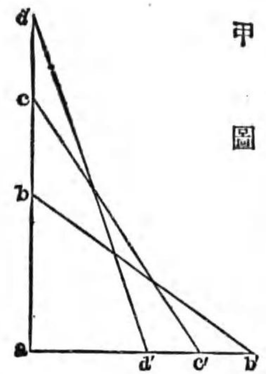
二　有する貨幣の額多き程貨幣の限界利用減ず。

財を有すること多きも、貨幣を有すること少きもの、財を有すること少きも、貨幣を有する

多きもの丶兩者は同一價格の限界利用を表はさず。卽ち財の量と貨幣の額とは遞減の法則の上に於て常に反對の作用を有す。時及所の同一なるときに於ても此兩個の反對作用は利用遞減の法則の働きを支配するものにして、一を取りて他を捨つること能はざるものなり。

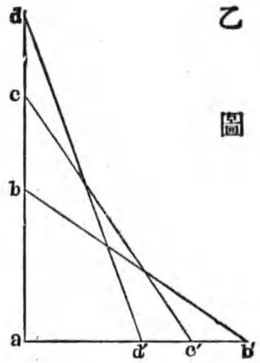
今圖解を下せば左の如し。

甲圖



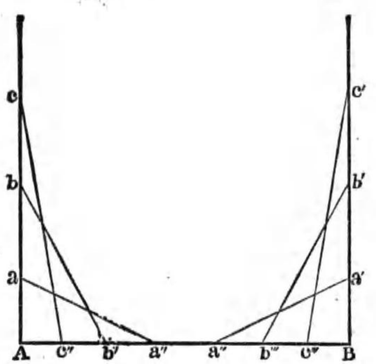
(一) ab量の財を有するものに向ての其財の限界利用はab′なり
(二) ac量の財を有するものに向ての其財の限界利用はac′なり
(三) ad量の財を有するものに向ての其財の限界利用はad′なり

乙圖



(一) ab額の貨幣を有するものゝ貨幣の限界利用はab′なり
(二) ac額の貨幣を有するものゝ貨幣の限界利用はac′なり
(三) ad額の貨幣を有するものゝ貨幣の限界利用はad′なり

丙圖（甲乙兩圖を併せたるもの）



(一) Aa Ab Acは物の所有量にして Aa″ Ab″ Ac″は其各の限界利用を示す
(二) Ba′ Bb′ Bc′は貨幣の所有額にして Ba‴ Bb‴ Bc‴は其各の限界利用を示す
(三) Aa量の物を有し Bc′額の貨幣を有するものは Aa″の限界利用と Bc‴の限界利用とにより其需要價格定められ
(四) Ab量の物を有し Bb′額の貨幣を有するものは Ab″の限界利用と Ab‴の限界利用とにより其需要價格定められ
(五) Ac量の物を有し Ba′額の貨幣を有するものは Ac″の限界利用と Ba‴の限界利用によりて其需要價格定めらる。

其他之に準じて知る可し。

マ氏は以上の理を更らに茶の例に就て細説せり。其大要左の如し。

價格の高低に從ひ、人が其物を買はんと欲する分量異る。今若干の價格を設け、之に對する需要の量を示したる表を名けて『需要定表』Demand Schedule と云はん。引例せる茶に就て左の如く假定するときは之を茶の需要定表と云ふ。

價格	需要量	價格	需要量
五十志なるとき	六斤	四十志なるとき	七斤
三十三志〃	八斤	二十八志〃	九斤
二十四志〃	十斤	二十一志〃	十一斤
十九志〃	十二斤	十七志〃	十三斤

今需要の增加と云ふときは其意

一　價に變動なき場合には買はんとする分量の增加することを意味し

二　價騰貴する場合には從前に同じき分量を買ふことを意味す

即ち右例に於て茶一斤の價十七志にして變動なき場合には、十三斤は增加して十五斤となり、又は茶一斤の價十九志に騰貴するも猶十三斤を買ふを云ふなり。之に反し一定の時價に於て買はんとする分量の增加するのみならず需要定表の全體に渉りて支拂はんとする價の增進して例へば

需要量	支拂價格	需要量	支拂價格
六斤	五十一志	七斤	四十一志
八斤	三十四志	九斤	二十九志
十斤	二十五志	十一斤	二十二志
十二斤	二十志	十三斤	十八志

となるが如き場合は、之を一般的の需要增加と云ふ。

以上は專ら個人の需要に就て立論する所なりと雖も、茶の如き一般的必需品の場合には、一般市場に於ける需要增減の理は、個人の需要より推して論及するを得可し。然れども物によりては必需品なりとも個人需要變動の理は直ちに移して、一般市場需要を說明

するに適せざることあり。況んや必需品ならざるものをや。然れども個人的性癖嗜好特色より起る需要の差違は、一般市場に顯はるゝときは、多くは相殺平均するものにして、此點に於て個人的需要の法則は、一般市場需要の法則と多く異らざるものと認めて差支なし。マ氏は卽ち總てを一貫する需要の法則を定義して左の如く云へり。

The greater the amount to be sold, the smaller must be the price at which it is offered in order that it may find purchasers, or, in other words, the amount demanded increases with a fall in price, and diminishes with a rise in price.

賣る可き分量の多き程、買手を得んが爲めに提供せらるゝ價格は低し。換言すれば、需要の量は、價格の下るに從ひて增加し、昇るに從ひて減ず

但し兩者の比例は必ずしも合致するものにあらず。價一割下落して需要は五分增すことあり、四分の一增すことあり、又は二倍となることあらん。唯分量增すとき價下り、價昇るとき需要減ずるの一事は疑を容れずと云ふのみ。

以上は一定の時、一定の事情の下に於て見るときに限れり。事情異り、時を隔つるときは、右の理適用す可からず。就中競爭品の起るとき（茶に對する珈琲、瓦斯に對する電氣の如き）は、需要の變動は全く右の理を以て說く能はざるものなり。

右紹介せるマ氏の需要增減に關する理論は、畢竟ずるに、後に說く所の『收穫遞減の法則』Law of diminishing return を應用して、墺國學派の限界利用說を布演したるものなり。其特殊の點と認む可きは、利用其ものは直接に秤量するを得ず、貨幣價値に於ける其發現より推及して間接に測定す可きものなりとする是なり。此論は既に屢々說きたる原則を一貫して維持するものにして、予亦之に和するものなり。然れども、今本編は欲望と其充足とを究めんとするものにして、價格論を試むるにあらず。マ氏の說く所は、多くの學者が價値、價格論に於て論ずる所を採り來れるものにして、聊か立論の順序を紊るの嫌なきに非ず、讀者之を商量せよ。

第三章　補論

本章論ずる所の問題は、數學的に取扱ふに甚だ適當し、又斯くするによりて、研究の便を得ること尠からざるものなり。乃ちマ氏は脚註並に附錄に於て之を試みたり。予は總ての經濟現象を數學的に取扱ふ可しとする所謂數學派經濟學者の主張に與する能はざるものなれども、本章の問題に至りては、論者に服するを禁ずる能はず。唯予自ら凡ての數學的素養を缺くが爲に、之を企て得ざるは、深く自ら愧づる所なり。

抑も數學的經濟研究を始めたるは佛國の學者クールノーにして、其著す所に Recherches sur les principes mathematiques de la théorie des richesses 1838 あり。近來に至りては佛國の學者にして永く瑞典の大學に教授たりし Walras 其門弟 Pareto 並に英國の學者 Jevons 最も此種研究を以て顯はる。然れども、予の見る所を以てすれば、數學を應用して經濟現象を論究し、殆んど今古獨歩の功を立てたるものは、獨逸の學者 Hermann Heinrich Gossen なり。マ氏の云ふ如く、ゴッセンの業は世人に忘れられ、其著を讀むもの甚だ尠しと雖も、今日に於て猶寸毫も其價値を減ぜざるものは彼なり。殊にゴッセンは本章論ずる問題に就て甚だ深遠なる研究を遂げたり。其著は

Entwickelung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus fliessenden Regeln für menschliches Handeln.

『人類交通の法則の發展並に是より生ずる人類行爲の原則』

と稱し、千八百五十三年出版せられ、千八百八十九年伯林の書肆ブラーガー版本絶へて久しきを慨き、原版を其儘重刊せるものあり。而も此重刊本亦流布甚だ少く、今に至て學者の顧るもの多からざるは、甚だ惜む可き所なり。予は幸に一本を得て之を讀むこと一次にとゞまらざれども、今に至りて其眞意の究め難きを歎ぜざるを得ず。（ジェヴォンスは此本を入手するに能はざりし事情を其著序文中に詳述せり。當時英國には英國博物館に唯一本ありしのみと云ふ。予が指導の下に、ゴッセンを特に研究したるは、小樽高商の手塚教授なり。其著『ゴッセン研究』は篤學の業として薦むるに足る。）

近來英米國に於る數學派經濟學者皆其思想の源をゴッセンの古き泉に汲む。殊にジェヴォンスに至りては、獨逸文を其儘英文に言改めたるに非ずやと迄認めらるゝ所あり。

マーシアル亦屢々ゴッセンを引用し、近く欲望論を著したるブレンタノ先生もゴッセンの所論より取る所尠からず。源泉深くして汲めども盡きず。思ふに向後「ゴッセンに歸れ」と云ふ者或は出でん。ゴッセンは其序文中に自己の創說を以てコペルニクスに比せり。其抱負の大なる想見す可く、而して言必ずしも自己過信に出づるものにあらず。

今日墺國派の新說として世に知らるゝもの、多くは、ゴッセン既に之を五十年の前に道破せり。本章說く所利用遞減の說の如き慥かに然り。今其證左として左にゴッセンの一節を揭げん。

Darum bleibt als ein allgemein gültiger Satz bestehen: dass die einzelnen Atome eines und desselben Genussmittels linen höchst verschiedenen Werth haben, und dass überhaupt für jeden Menschen nur eine bestimmte Anzahl dieser Atome. d. h. eine bestimmte Masse Werth hat, eine Vermehrung dieser Masse über dieses Mass hinaus aber für diesen Menschen vollkommen werthlos ist, dass aber dieser Punkt der Werthlosigkeit erst erreicht wird, nachdem der Werth nach und nach die verschiedensten Stufen der Grösse durchgegangen……dass mit Vermehrung der Menge der Werth jedes neu hinzukommenden Atoms fortwährend eine Abnahme erleiden müsse bis dahin, dass derselbe auf Null herabgesunken ist. S. 31.

故に次の一般的原則生ず。一定の消費料の箇々の原子は甚だ異れる價値を有し、箇人に取りては此原子の一定數（一定量）のみが價値を有するものにして、此定量以上に增加するときは、其人に向つては全く價値を有せざるに至り、而して此無價値點は、價値が遞次に各種の大さを經過したる後に到達す。……分量を增加するときは、凡ての新たに加はる原子の價値は絕へず減少し、終には絕無に歸するに至る

ジエヴオンスは卽ち之より total utility（全部利用）final utility（最終利用）なる新術語を作り出し、墺國派は Grenznutzen（限界利用）なる熟語を作りしに過ぎず、其內容は全く右に盡きたり。而してゴッセンの茲に原子と稱するものはマ氏の marginal dose（限界部分）と稱するものゝ依て出づる所なり。

次にゴッセンは人類行爲の根本原則として左の數者を論ぜり。

一　消費の按排は、之によりて人間一生の享樂の總量が最大なる可きを期せざる可から

す。

二　人間は其一生の享樂の總量が最大なる可き樣に其行爲を企劃す、

而して

一　同一享樂の大さは絶へず之を繼續するときは、遞次に減少し、終に飽實の點に至て已む。

二　嘗て得たる享樂を繰返すときは、其享樂の大さは同じく遞減す。而して、繰返されたる享樂其ものが減ずるのみならず、之を始むるときの享樂の大さも前よりは少し。又享樂を享樂として感ずる時間の長さも一回よりは二回、二回よりは三回に於て短く、飽實點の到來すること早く、繰返の速なる程、其享樂の大さゝ時間も共に減ず。

而して又次の三原則生ず。

一　享樂繰返の繁閑は、其總量を最大ならしむるを得んことを目的として定められ、從つて箇々の享樂の種類・方法を左右す。最大量を得たる後にありては、其繰返の繁閑を問はず必ず減少す。

二　多くの享樂併存するも時間之を許さゞるときは、其享樂を一部に止め、其各部より得る享樂の均一ならんことを期す。

三　享樂の總量を增すを得るや否やは、新なる享樂を見出すか、既に在る享樂を自己の改進又は外界への作用によりて增進するを得るや否やによりて定まる。

ゴッセンは以上の原則を立證し、說明するに悉く數學の方式を用ゐ、終に至りて、斷言して曰く、

以上論じたる原則を究め、是より人間行爲の根本原則を立てゝ之を守るときは、地球には天上の樂園に存するもの、一として欲く事なきに至らん。人よ先づ思を潛めて、予が言を玩味せよ、汝の前に大なる幸福の福音横れり、取りて、汝自らを幸福ならしめ、亦之を世に施せよ。

と。細字二百七十七頁章節の區分なく、表題なく、目次なし。自ら云ふ、之は二十年間沈思熟考の產物なりと。唯此一卷の書を留めて、自ら喜び、自ら安ず。誠に稀有の事に屬す。ゴッセンを深く研究し、欲望論の通說に一歩を進むること、予は唯だ之を遠き將來に期し

F. I, 30.

得可きのみ。其後獨逸にありてはリーフマン、ゴッセンを研究して、我等を敎ふる所鮮からず。讀者須らく往見して之れを知る可し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

本章の參考書は前章に掲げたるものを見よ。

第四章　需要伸縮の法則

需要の增減は之を充す可き財を有する多少によりて支配せられ、財多きこと、需要減じ、財少きこと需要增すの理は、前章之を明かにしたり。之と同じく、貨幣を有すること多きもの需要多く、少きもの需要少きこと亦之を論ぜり。今次に考究す可きは、此需要の增減に緩急、遲速の差異あること是れなり。或種の需要は著しく增し、若くは減じ、或種の需要は其增すこと、減ずること、共に甚しからず。之を名けて需要の彈力性（伸縮性）と云ふ。即ち增減の著しきものは、彈力性大なりと云ひ、著しからざるものは、小なりと云ふ。然るに茲に直ちに起る問題は、此彈力性は如何にして之を知るを得るや之なり。

凡そ經濟上の現象は、直ちに原因に就て究むること困難にして、多くは顯れたる結果より推及して測るの外なきこと、前章屢々論じたる所なり。今需要の彈力性も多くは、顯はれたる作用より推して其大小を知るの外なきこと、他の經濟現象に異ならず。價昇るも、需要額減ぜざるとき、若くは價變動せずして需要額增すとき、之を需要の增加と云ふ。需要の彈力性は、此二の場合に於て發現す。即ち價の騰落に對して、需要の增減の著しきか、否かによりて其需要の彈力性大なるか小なるかを知り得る如く、價變ぜざるも、需要額の增減著しきか否かによりて、其需要の彈力性の大なるか、小なるかを知り得可き筈なり。然るに、價變ぜずして、需要額增減する場合は、其原因甚だ多く、之に一定の說明を下すこと、殆んど不可能なり。從て此場合に於ける需要の增減に就て其彈力性を究むること困難なり。之に反し、價に變動ありて、需要額增減する場合は、其原因は價の變動てふ一定のものなるが故に、之より推して、其需要の彈力性を知ること難事にあらず。需要の彈力性其ものは、右孰れの場合に於ても存在するものにして、價の變動ありて始めて此性質發生す

るにあらざるは勿論なり。唯價の變動あるとき、此性質は顯著に表面に發動して人の之を知ること容易なるなり。價の變動は需要の彈力性を顯はれしむること、猶ほ熱の物體に於けるが如し。熱度高まりて物體伸び、下りて物體縮む、而も其伸縮の度は物體により て異れり。吾人は其異る伸縮性を知るに、熱の高低を以てす。價が需要の彈力性に於ける亦然り。價の高低により伸縮する度合の異るを見て、吾人は其需要の彈力性の大小を推測す。然れども物體の伸縮は熱度のみによらざるが如く、需要の彈力性も價の高低のみに依るにあらず。今マ氏が本章に於て、需要の彈力性を論ずる所は、偏に價の高低のみを以て、之を測らんとするものに似たり。予は異論なき能はず。

マ氏曰く、財の供給增すに從ひ、之に對する欲望減ず、此欲望減少の度に速なるあり、遲きあり、遲きものにありては、供給著しく增すも、之に對して支拂はんとする價下ること少く、又は價僅かに下るとき、購はんとする分量著しく增す。之に反し其速なるものにありては、價少しく下るのみにては、購はんとする分量增すこと少し。前の場合は、價の下落より來る僅かの刺戟も購はんとする需要を著しく左右す、即ち欲望の彈力性大なるものなり。後の場合は、價の下落より來る刺戟は、購買の念を左右すること僅なり、換言すれば欲望の彈力性小なる者なり。而して價の下落により、伸縮すること大なる需要は、價の騰貴により、伸縮すること亦大なり。此理は個人の需要に就ても、市場に於ける需要に就ても渝ることなし。仍て需要の伸縮に關する一般法則は左の如く定義することを得可し。

一市場に於ける需要は、價に於ける一定の下落に對し、其の增加すること多きもの彈力性大にして、少きもの小なり。價に於ける一定の騰貴の場合亦同じ。

と。即ちマ氏は、供給の多寡と欲望減少の度合との關係を、價に於る下落（並に騰貴）の一現象のみに就て說明せんとするものなり。價に變化なくして需要に增減ある場合は、全く之を度外に置けり。然らば氏は此場合は、毫も之を考究するを要せずやと爲すものなるやと云ふに然らず。氏は右に續て斯くの如き場合を論ずること、稍々詳なること後段紹介する所の如し。而してマ氏の右說明に於て予の取らざる所は、價の高低を先づ前提して、需要の增減を後に置くこと是なり。蓋し需要の彈力性の大小は、其結果を見て始めて知るものなるは前に云へる如くなりと雖も、彈力性其ものは、價に高低ありて始めて生

ずるものにあらず。物體に彈力性あり、唯之に熱を加ふるにより伸ぶること多きものあり、少きものあるが如く、需要は其自らに彈力性を有す、唯價高低するとき、多く增減するあり、少く增減するものあるのみ。マ氏の論ずる所稍々此理を誤解せしむるの嫌なきにあらず。故に予は需要伸縮の法則を左の如く云ひ改めんと欲す。

彈力性大なる需要は、價の騰落に對して、其額著しく增減し、彈力性其の小なる需要は、少しく增減す

並に

彈力性小なる需要にありては、供給增加するも、支拂はんとする價下ること少く、彈力性大なる需要にありては、供給增すときは、支拂はんとする價は、著しく下落す

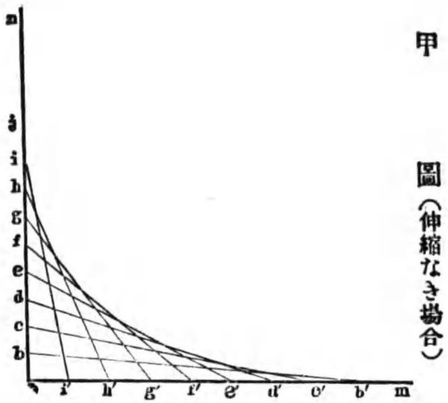
或は又結果より推して原因に到達するの意を言表はさん爲めには、

價の騰落に對し著しく增減する需要は、彈力性大にして、僅かに增減する需要は、彈力性小なり。

供給增加するも、支拂はんとする價格の下落すること少き需要は、彈力性小にして、其下落すること著しき需要は、彈力性大なり。」

今以上の理を試に左に圖解す。

甲　圖（伸縮なき場合）



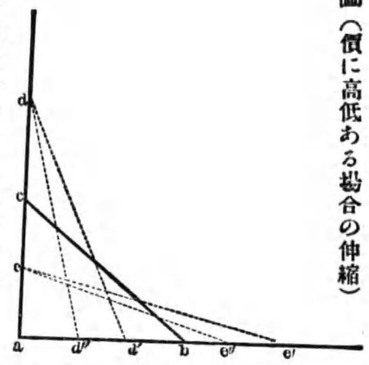
(一) am線上の長さは需要額。an線上の高さは價格を示す

(二) ab ac ad ae af ag ah aiは箇々の財の價格を表はし

(三) ab′ ac′ ad′ ae′ af′ ag′ ah′ ai′は之に應ずる箇々の需要額を表はす

(三) ajは所謂 prohibitive price 禁止的價格を示す、卽ち am線上に於ける需要額は零無となる

乙圖（價に高低ある場合の伸縮）

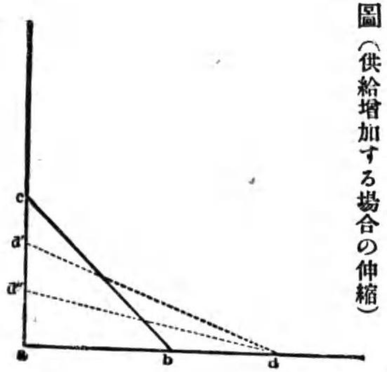


acの價のときabの需要額ある物

(一)其價adとなるとき需要額ad″となるもの其價aeとなるときaéとなるものは彈力性大なり

(二)adとなるときad′となり、aeとなるときae″となるものは、彈力性小なり

丙圖（供給增加する場合の伸縮）



abの供給あるときacの價を支拂はんとするもの其供給增してadとなる場合に支拂はんとする價

(一)ad′となるものは彈力性大なり

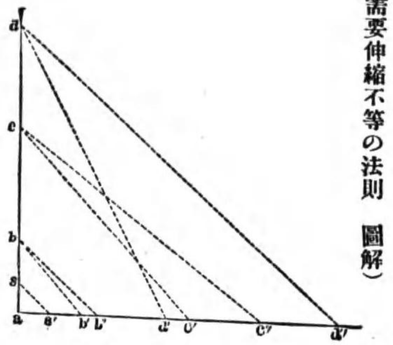
(二)ad″となるものは彈力性小なり

需要伸縮の一般法則は右の如し。然るに此の法則は亦他の法則に支配せらる。即ち高價なるものに對する需要と、廉價なるものに對する需要とは、其の伸縮の度合を同せざること是れなり。同一物にても、其の價高き時に於て、生ずる價格の變動に伴ふ需要の增減は、其價廉き時に於て、生ずる價格の變動に伴ふ需要の增減とは異れり。此の法則は之れを名つけて『需要伸縮不等の法則』と云ふ。マ氏は此の法則の內容を左の如く說明せり。

需要の伸縮は高き價に對しては大なり。之れに次ぐ價に對しては大なるか、又は、少くとも著し。低き價に對しては小なり。其の下落が飽實點に達するときは伸縮なきに至る。

試みに圖解せば、

（需要伸縮不等の法則　圖解）



(一) ad なる高き價に對する需要伸縮の大さは d′d″ なり
(二) ac なる其次の價に對する需要伸縮の大さは c′c″ なり
(三) ab なる低き價に對する需要伸縮の大さは b′b″ なり
(四) as なる飽實價に對する需要は彈力性を有せず、常に as′ なり。

然るに右に云ふ『高き價』『次なる價』『低き價』『飽實的價』は絶對的のものにあらずして、相對的のものなり。即ち

一　人を異にするによりて其意異り

二　物を異にするによりて其意異る

一　人を異にする中最も著しき者は、貧者と富者との別是なり。マーシアル曰く、貧者に取りて殆んど禁止的に高き價も、富者に取りては低き價たる可し。貧者は嘗て葡萄酒を飲まず、富者は殆んど其價の高低如何を問はず飲まんと欲する丈けは飲む。其貧と云ひ富と云ふにも亦幾多の楷段あり。故に此場合價の高低と云ふは、常に一定の社會階級の立場より見たることにして、社會全般に於ける高低を云ふは意味を成さずと。

二　物を異にするとは、主として、其物が容易に飽實せらる可き欲望の對象たるか、飽實の點に達すること遠き欲望の對象たるかの差異を云ふ。マ氏曰く、或貨物は容易に人の欲望を飽實し、或貨物（主として體裁用に供せらるゝもの）に對する欲望は殆んど無限なり、後者に對する需要は、價下ること甚しきも、猶其伸縮すること大なり、前者に對する需要は、價低落するとき殆んど全く其彈力性を失ふと。

マ氏は右の理を説明して次の如く云へり。貧者に對しても、猶ほ價低き物あり、例へば鹽香料廉價なる藥劑の如き是なり。是等の物其價下落するも、其消費高を增すこと多からず。即ち其價低きが故に、需要の伸縮殆んど之れなきなり。肉、乳、牛酪、羊毛、煙草、外國產果實、又は普通の醫療の如きは、其價の騰落に從ひ、勞働階級及中等階級の下部の消費高增減すること著しと雖も、富者は此等の物の價如何に下落するも、之に對する消費高を增すこ

こと多からず。即ち此等の物の價は前者に取りては、稍々高き價なるが故に、之に對する需要の伸縮著しく、富者に取りては、低き價なるが故に伸縮なきこと、貧者に於ける鹽に均しきなり。乍併世に富者の數は少く貧者の數は多し、故に貧者富者均しく消費する價低き物にありては、貧者の消費額は無論富者の消費額よりも大なり。從て此種の物に對する需要は、一般に見るときは、彈力性甚大なり、近き頃迄英國に於ける砂糖は此種に屬し、其價社會大多數に取りては稍々高き價なりしが故に、全體に於て砂糖に對する需要は著しく彈力性を有せり。然るに現今に於ては、砂糖の價大に低落して、大多數人民に取りても低き價となりしにより、其需要は伸縮することなきに至れり。但此場合競爭品代用品の有無並に其價の變動如何によりて、右說く所は著しく、影響せらるゝものなるを忘る可からず。其物のみにて見るときは、伸縮甚大なるが如きも、其實は代用品の爲めに地位を奪はれたるに基くこと屢あり。例へば、珈琲の價騰貴するとき、之に對する需要著しく減ずることなきにせよ、此一事のみを見れば珈琲に對する需要は甚彈力的なるが如くなりと雖も、其實は珈琲の價高まる時は從來飲まざりし茶を購て之に代へたるが爲なる事ある可し。牛肉に對する豚肉、麥酒に對する酒、木綿に對する絹、牛酪に對するマルガリン、瓦斯に對する電氣等、類例を擧ぐれば甚多し。

又價稍高き奢侈品（高價なる果實・魚の如き）に對しては、中等階級の需要は甚彈力的にして、價下る時は著しく增加す。然るに上等階級も下等階級も之に對する需要は多く伸縮せず。蓋し上等階級に取りては其價は低き價なるが爲め伸縮せず、下等階級に取りては、其價は高價に過ぎ、價下れば之を購ふの力なきが故、其需要增すことなきが故なり。

次に珍奇なる葡萄酒・季節以外の果實・名醫・又は有名なる辯護士の招聘等は其價甚高くして、富者にあらざれば、之を需要することなし。而して此種需要は時として甚だ著しく伸縮す。高價なる食料品は寧ろ體裁の爲めに求めらるゝものなれば、其需要は殆んど飽實の際限なし。

マ氏は次に生活必需品に對する需要を論ず。曰く、此場合は例外に屬す、小麥の價甚高きときと、甚だ低きときに於ては、需要は伸縮することなし。但し此場合小麥は價如何に高くも、猶食料として最廉のものにして、價甚低くとも食料以外に用らるゝことなしと

前提しての事なり。四切パン一個六片のもの四片に下落したりとて、其需要は殆んど増すことなし。極端なる騰貴の場合は英國に於ては、穀法廢止以後之あるを見ざる故之を例證し難しと雖も、不作の年の經驗を綜合して、供給の減少十分の一・二・三・四・五なるとき、價は、十分の三・八・十六・二十八・四十五の比例にて騰貴するものと見て大過なからん。（是れゲレゴリ！・キングの創見にかゝる所と認めらるゝ所にして、通例、此理を稱して、キング法則と云ふ。然れども、キングの著中、之を見出さず、却つて載せてダヴナンの著にあり。Davenant works. II. 1171. p. 224.）而して之よりも大なる價の變動起ることも亦稀ならず。然れども價格の變動之よりも猶大なるは、必要品ならずとも、其性質上容易く用に堪へざるに至るものにして、之に對する需要彈力的ならざる物に於て見る可し、例ば魚の如し。今日甚價高きも二三日の後は、殆んど價なきに至る其價格の變動甚だ大なり。

高低とも種々の異れる價に於て觀察し得ることゝ水の如きは少し。非常に高き價あり、全く價無きことあり。而して相應の價に於ては、水に對する需要は著しく伸縮す。然れども水に對する需要は極めて有限にして、一定時に於ては、全く飽實の點に達するものなり、從て其價無料に近づくに從ひ、需要は全く彈力性を失ふ。鹽も亦水に似ることゝ多し。

英國に於ては、鹽の價甚廉なるが爲、食用としての需要は、殆んど伸縮することなし。反之印度の如き其價高き所にありては、其需要は比較的に彈力的なり。

住居の價は著しく下落する場合は、不景氣其他の事情により其土地を去る人多き時を除ては、殆んど之を見ず。社會の狀態健全にして、進歩を妨ぐる事情なき所にありては、住居に對する需要は、常に大なる彈力性を有す。

衣服に就ては、榮耀の爲めにするものにあらずして、實用に供するものにありては、需要は飽實す。即ち其價低き時は、需要は殆んど彈力性を有せず。

必要品ならずして、品質精良なるものに對する需要は、人の感情によりて左右せらるゝこと甚大なり。人を異にするにより其嗜好異り、同一人にても、時を異にし、所を異にし、包圍の狀態を異にすれば、其趣味同じからず。是れ多くは、感情の作用に依るなり。

終りにマ氏の論ずるは、使用の種類多きに少きに從ひ、需要伸縮の作用亦た異ることゝ是なり。曰く、一般に云へば、多くの異りたる使用に供せられ得るもの、彈力性亦大なり。例へば、水は、先づ飲用に供し、次に割烹用に供し、洗濯の用に供す。水の供給乏しからず、而

も一々分量を量りて買入るゝ場合にありて、貧者も猶且其欲する丈け飲用するに差支を見ざる程其價低しとも、割烹用には、同一の水を二回使用し、洗濯用には大に節約を加ふることあらん。中等階級は割烹用に二回使用せざるも、洗濯用には稍々使用量を節す可し。然るに水管にて水を供給し、メートルにて極めて低價を徴するに過ぎざるときは、洗濯用にも惜氣なく使用するに至らん。一ヶ年些少の定額を課するときは、水は總ての使用に向て飽實點まで使用せらるべし。以上と反對に、

一　絶對的必要品

二　富者の奢侈品にして富者に取りては其價甚しく負擔を感ぜしめざるもの

に就ては、一般に云へば、需要は彈力性を有すること甚だ少し。

以上說く所は何れも皆時間の上に經過なしとの前提の上に立論せるものにして、時間の經過あるときは、需要伸縮の法則は、甚だ異りたる作用を有す。何となれば他の事情同一なりとの前提は、時を異にするときは到底之を維持するを得ず。人に於ても、物に於ても、皆其狀態を變ずるが故に、同一需要も異りたる伸縮を爲し、同一物に對する彈力性の發現亦區々たり。今其重なるものを擧れば、

一　時間經過するに從ひ、貨幣の購買力變動す

二　景氣の好否異り、從て社會全體の總購買力變動す

三　一國の人口及富力異動す

四　習慣流行、趣味に變遷を生ず

五　新なる代用品及競爭品起る

六　短き時間なれば一時見合し得可き欲望も、長き時間に涉るときは然るを得ず、衣服其他長時に涉りて使用せらる可き物に於て殊に然り。

而して以上に加へて需要額及需要價格に關し精確の統計を得るの困難なるが爲め（多くは殆んど不可能なるが爲）伸縮作用を的確に知悉すること容易ならず。又販賣の爲めの需要の增加と、直接消費の爲めの需要の增加（卽ち傳來的需要の增加と第一次的需要の增加）とを判別すること困難なり。蓋し統計に表はるゝものは多くは傳來的需要の增減なり。然るに第一次需要の增減は必ずしも此と合致せず、否關稅增徴に際しての

見越輸入、消費税新設に際しての見越購入は、多くの場合には、營利的需要を增進せしむるも、第一次的需要は却て減少するを常とす。而して又品質の變ずるが爲め眞相を誤ることあり、分量は減ずるも、より良き品質の物需要せらるゝに至るときは、數字の上にては、其需要は減ずるが如く見ゆれども、其實增進せることゝ屢々之あり。弱き支那茶の需要廢れて强き印度茶の之に代るが如き是なり。

以上マ氏の說く所克く要を得て、增減の要を見ず。セリグマンは需要彈力性極めて小なるものに

一　之れに對する需要の不變的性質を有するもの、卽ち鹽の如き、

二　元來利用少きも、價甚だ廉なる爲め需要せらるゝものにして、價少く騰るときは全く需要なきもの、卽ちマルガリンの如き、

の二種ありと云へり。マ氏の所論と對照するに益あり。詳しくは同氏原論（第三版二三七頁以下）を見よ。

第四章　補　論

本章說く所需要伸縮の法則は、說明法と用語とこそ異れ、其內容に至ては、ゴッセン既に之を五十年の前に詳論せり。マーシアルに新案と見る可きは、彈力性（Elasticity）なる語を創めたること是れなり。ゴッセンの論は其書百三十三頁下段以降にあり。

ゴッセン曰く

『以上の點より見て享樂 Genüsse を分て

一　欲望 Bedürfnisse

二　狹義の享樂 Genüsse im engeren Sinne

の二と爲すの必要生ず。而して、各個人の欲望の範圍は、其所得增進するに從ひ、益々擴張する現象を說明するを要す。富人は日々飽實の點まで肉を食する事を欲望の一に

數へ、貧者は祭日に炙肉一片を得ば喜ぶ。其理由は他なし。一物の價の變動はE（所得）が最高點又は最低點に達する限界の前後に於ける變動にP（勞働）が先ち、此變動によりて其限界を超越せざるによりて生ずる作用と正反對なり。Pが此限界より大なるときは、購入に充てらるゝ額に變動起るとき、價騰貴する物に就ては其額は小となり、其他の物に就ては大となる。Pが其變動以前に於て限界を示す數より小なるときは、其作用反對なり。欲望とは價の騰貴に際し他の享樂物の消費の減少を强制する力ある享樂を云ひ、其反對なるものを狹き意義にて享樂と云ふ。

前者の場合には、其充足は或點までは絶對に要求せられ、人の意志は爲めに束縛せられ、後者の場合には、價の騰貴は使用の節約を意味し又貨幣の節約を要するなり。』

ゴッセンの所論を普通の語に言ひ改め之に實例を加ふるときは、卽ちマーシアルの論となる。

*　*　*　*　*　*　*　*

本章參考書は

伊國學者パレト及パンタレオニ兩氏の著あり、殊にパンタレオニはゴッセンを祖述して稍々要を得たり。

Pareto, Manuale di economia politica. 1904.——Cours d'économie politique. 1897.

Pantaleoni, Principi di economia pura. 1889. (Eng. translation: Pure economics. 1898.)

次では

Jevons, Theory of political economy. 1888 p. 45. p. 71.

Auspitz und Lieben, Untersuchungen über die Theorie des Preises. 1889.

Brentano, Entwickelung der Wertlehre. 1908 S. 46. f.

を見る可し。

*　*　*　*　*　*　*　*

猶マ氏は本章附錄として消費統計論を載せたり。今略す。

第五章　限界利用均等の法則

物の限界利用は供給の増すに従ひ遞減するものなることは既に説けり。然るに茲に續て考究す可きは、物の使用法唯一途にあらずして、種々なる場合に於ける限界利用の問題是れなり。例へば米は之を以て

一　食用に充つ可く　二　酒を造る可く　三　菓子を作る可く　四　家畜を飼養するを得可し。今　一　食用に充つる場合に

供給	其限界利用	供給	其限界利用	供給	其限界利用
一石　なるとき	十	二石　なるとき	九	四石　〃	七
三石　〃	八	四石　〃	七	六石　〃	五
五石　〃	六	六石　〃	五		
七石　〃	四	八石　〃	三		
九石　〃	二	十石　〃	一		
十一石　〃	〇				

の割合に遞減し、二　造酒用に充つるとき

供給	其限界利用	供給	其限界利用	供給	其限界利用
一石　なるとき	七	二石　なるとき	六	四石　〃	四
三石　〃	五	四石　〃	四	六石　〃	二
五石　〃	三	六石　〃	二	八石　〃	〇
七石　〃	一	八石　〃	〇		

の割合に遞減し、三　菓子を作るとき

供給	其限界利用	供給	其限界利用
一石　なるとき	五	二石　なるとき	四
三石　〃	三	四石　〃	二
五石　〃	一	六石　〃	〇

の割合に遞減し、四家畜を飼養するとき

供給	其限界利用	供給	其限界利用
一石　なるとき	三	二石　なるとき	二
三石　〃	一	四石　〃	〇

の割合に遞減するものと假定す。

此場合米五石あり其全部を食用に充つるときは、限界利用は下りて六となる可しと雖も、四石を食用に充て、殘る一石を酒造用に充つるときは、其限界利用は上りて、七となる可し。米十石あり、其の全部を食用に充つるときは、利用は下りて一となり、造酒用に充つるときは零となる可きも、六石丈けは食用に、三石を造酒用に、一石を菓子用に充つるときは、其利用は昇りて五となる可し。米十七石あり、全部を食用に充つるも、造酒用に充つるも菓子用に充つるも、限界利用は共に零なる可けれども、食用に八石、造酒用に五石、菓子用に三石、家畜用に一石を充當するときは、其限界利用は均しく三となる可し。

斯くの如く用途種々ある物に就ては、使用法の異るに從ひ、其限界利用異ること、實際上多く見る所なり。而して利用遞減の法則に支配せらるゝ物にありては、供給の增加する結果として漸次利用の遞減するに從ひ、新なる使用法を喚起し、又與へられたる供給の分量に就ては之を各種の使用法に按排配當して、全體に就て、最大の限界利用を生ぜしめんと勉むるは、他に妨ぐる事情無き限り（尤も其事情は甚多く且屢々起る）原則としては、人の有意無意に期する所なり。之に背くものは物の使用法の選擇を誤れる浪費者冗費者たるの謗あるを免れず。マ氏は之を名けて『同一物の異れる使用法の選擇の理』と云ふ。即ち以上の假例に於て十七石の米を悉く食用に供するか、又は食用と造酒用とに折半して充當する者の如きは、經濟の道を失するものにして、四個の使用に分當して其全體の上に於て最大の限界利用三を得るものは、其道を得たるものと云ふ。

言を換へて云へば、幾種の異なれる使用法ある物に就ては、原則としては、人は皆其充當する各部分が均等なる限界使用を生ずるやう勉むるものなり。之を『限界利用均等の法則』と名けて差支なからん。マーシアルは此法則を定義して左の如く言へり。

『幾多の使用法に充つるを得る物を有する人は、凡てに於て同一の限界利用を有す可き

樣に配當す。一の使用法が他の使用法より大なる限界利用を有するときは、其少き用法より移して、大なる用法に充つるを利とす可ければなり』

と。此理はマ氏の創說に屬せず、墺國學派之を詳に說き、墺派の前ジエヴオンス之を論ぜり。而して墺派にもジエヴオンスにも先つ久しき以前、ゴツセン之を說て殆んど餘蘊なし。創案の名は確かにゴツセンに歸す可きものにして、他は皆之を祖述し、之を布演するのみ。卽ちゴツセンは

『人は一生の享樂の合計が最大なる樣に、其行爲を定むるものなり』（前揭書第三頁）

と云ふを以て、根本原則と爲せることは既に述べたるが如くにして、而て彼は、此の根本原則より論及して、斷案を下して曰く、

Wenn seine Kräfte nicht ausreichen, alle möglichen Genussmittel sich vollaus zu verschaffen, muss der Mensch sich ein jedes so weit verschaffen, dass die letzten Atome bei einem jeden noch für ihn gleichen Werth behalten. S. 33.…… Es folgt daraus: dass ihre Beschaffung in einem solchen Masse vorzunehmen ist, als die Production der nach dem Obigen als vernünftig erscheinenden Quantität der Genussmittel es wünschenswerth erscheinen lässt. S. 34.

人は凡てのある限りの享樂資料を得るの力なきときは、其各箇の最終の原子が彼に向て均しき價値を保持する限りの點まで、各資料を得るを勉めざる可からず

……從て生ずる原則は、享樂資料の獲得は以上云ふ所に準じて合理的と認めらる可き分量を生產することを期する程度に於て行はる可きものなり

と。ゴツセンは更らに此理を布演して、各種の所得に就て、數學的に細論せり。其最終の原子と云ふは、今日の通說に於て限界分と稱せらるゝものにして、最終原子の價値と云ふは、卽ち限界利用の事なり。限界利用均等の法則は、疑もなくゴツセンの認むる所なることを以て知る可し。

予は米の例を以て之を說明せり。マ氏は婦女が羊毛を以て衣を作り、靴下を作る例を用ゐたり。然れども此例は Domestic production（家內の生產）の例にして、Domestic consumption（家內消費）の例に非ざること、マ氏自ら脚註中に辯疏するが如し。吾人は茲に問題とするは、言ふ迄もなく、需要消費の問題にして、生產の問題にあらず。然れども限界利用均等の

法則は、同じ前提の下には、生産にも行はる。ゴッセンは享樂資料に就て云ふのみならず、生産に就ても云ふこと、右第二段引照句の示す所の如し。マ氏に惜む可きは、引例の稍〻妥當ならざるの點是れなり。利用均等を得可く、物の各種異れる使用間に選擇を行ひ得ること、流通經濟の發達し、貨幣經濟の普及せる現今の經濟生活に於て、又最も發達せり。自足經濟時代に於ては、自らの經濟内にて生産せる物のみに就いて選擇し得可きのみ、其數は限られ其範圍は甚だ狹し。交換聊か起るに及んで、此範圍は稍擴張し、今日の世となりては、殆んど無限となれり。故に自足經濟時代に於ては、ゴッセンの所謂人間一生の享樂を最大にし、今日の語にて所謂最大の限界利用を按排收得すること能はず、人間欲望の充足は甚だ限局せられあり。今日に於ては、自足時代と同一の所得を有する者が按排配當より得る限界利用の合計は甚だ大なり。即ち一定の欲望に對し一定の物を充つるにしても、數多の使用間に選擇の餘地多く、又一欲望を充足するに數多の異れる物あるにより、按排の行はれ得る範圍大なり。是れ軈て經濟生活進歩發展の最も大なる賜と云ふ可し。而して貨幣は、此選擇・按排を最も正確に、最も合理的に行はれしむるに不可缺要具たり。蓋し限界利用は之を貨幣價値にて言表はすにより、始めて眞に比較・秤量を爲し得るものにして、貨幣なくしては其選擇は、人の趣向により、時の狀態により、甚だ複雜困難にして、或は全く不能なること、なきに限らず。貨幣經濟存在の理由は、先づ此點に於て、有力なる根據を有するものと云はざるを得ず。貨幣經濟の世にありては、數多の物と物との間の選擇は勿論、同一物の一の使用と他の使用との間の選擇、亦皆一定の貨幣額の充當に對する限界利用の秤量となりて實現せらる。即ち米十七石を何々の使用に按排す可きやの問題よりも、寧ろ貨幣（十七石の價を假定して）八百五十圓の配當の問題となる。八百五十圓中、例へば四百圓を食用に、二百五十圓を造酒用に、百五十圓を菓子用に、五十圓を家畜用に充當するとき、其限界利用凡てに均等ならんを勉む。而して物と物との間の選擇も斯くするによりて、貨幣なる同一物の異なれる使用間の選擇に變形するに至る。即ち米麥豆の三者を如何に按排せば、其凡てより最大の限界利用を收得し得可きやの問題は、與へられたる貨幣額、例へば百圓を使用するに、何圓を米に、何圓を麥に、何圓を豆を買ふに充つるを以て、百圓の最大限界利用を收め得るかの問題となりて現はる。米に費した

る五十圓は三の限界利用を有し、麥に費したる三十圓は三の限界利用を有し、豆に費したる二十圓は三の限界利用を有するとき、百圓の按排は、其當を得たるものと認めらる。換言すれば、各支出が他の支出によりて得可き限界利用より少き限界利用を生ぜんとする點に於て、其支出を轉じて他の支出に移すこと、經濟の要に合ふものとせらる。他により多き限界利用を生ず可き用法あるに、猶同一の支出を繼續して改めざるものは、理財に拙なるものなり。絶へざる注意と巧なる選擇により、其費す一錢一厘も猶且つ與へられたる時と所と事情の下に於て、凡て同一の限界利用を生ずる樣爲すものは、理財の道に達せるものなり。人の世に處し家に居る、其經濟上の行動は、他に妨ぐる事情なき限り、常に其費す所の限界利用の合計が最小にして、得る所の限界利用が最大なるを期す可きものなり。家計の要財政の妙此を措て望む可からず。ゴッセンは、之を以て人類處世の倫理上の法則の根柢たる可き常理なりと云へり。貯蓄（資本形成）の原理は、限界利用均等の法則より出で來る。家計豫算家計簿記は人が此法則に從はんが爲めの補助者たり、助言者たり、指導者たるものなり。リーフマンは本書舊版刊行以後數年、初めて此の理を力說して學者の注意を惹けり。Robert Liefmann, Theorie des Sparerus und Kapitalbildung. Schmoller Jahrbuch Jahrg. 36. (1912) SS. 1565 ff.

限界利用均等は、右說くが如く　一物と物との間の選擇、按排　二同一物の異れる使用法に就ての選擇、按排の外猶　三其充用の時の上に就ての配當ありて、其作用を全くするものなり。時の上に就ての配當を、マ氏は卽時の使用と、繰延られたる使用との間の選擇と名く。卽ち現在に於て使用するより生ずる限界利用が、將來に於て使用するより生ずる限界利用よりも、大なりや、小なりや、將亦同一なりやは、決して一定せず、故に其間適當の按排によりて、時を異にする使用に就て、合計の限界利用最大にして、其各時に充當せられたる欲望充足が、凡てに於て均等なる限界利用を有す可き樣に配分するは、經濟の本則の要求する所なり。然るに將來の使用の與ふる限界利用とは、將來の一定時に於ける限界利用を云ふにあらず。時を異にすれば、限界利用の秤量異るが故に、嚴密に云へば、其使用の時に於ける現在の限界利用あるのみ、將來の使用の限界利用を現在の使用の限界利用と比較する標準なし、故に兩者の比較は不可能なる可き理なり。從て茲に云ふは、將來の

使用の其將來の一定時に於ける限界利用にあらず、將來の一定時に於ける使用が、現在に於て其人に對して有する限界利用の意ならざる可からず。換言すれば、現在の使用と將來の使用との選擇とは、現在其物を使用するより生ずる限界利用と、將來に於て其物を使用するが爲め之を保藏確保することより生ずる限界利用とは、何れが大なるやの問題に就て、選擇するの意に外ならず。百圓を有するもの其五十圓を以て卽時に飲食の費に充つるとき、其限界利用は十なり、其以上費すときは、利用は五に下ると假定せよ。殘の五十圓を貯蓄して老後の安全を圖るに充つるとき其限界利用十なりとせよ。此の五十圓を直ちに使用するものは限界利用を得ること少きを以て滿足せざる可からず。合計に於て最大の限界利用を得んには、殘る五十圓は將來の用の爲めに積立て、其積立金の與ふる限界利用が現時の使用の與ふる限界利用と均しきを期す可きなり。然るに斯く將來の使用を現在の使用と比較秤量するには、二箇の條件の存するを記せざる可からずとは、マ氏の說く所なり。二箇の條件とは

一　客觀的性質に基くものにして、人によりて異ることなきもの、卽ち將來の使用の現在の使用に比して不確實なること

二　主觀的性質に基くものにして、人を異にするによりて其性格其事情の如何により異るもの、卽ち將來の使用と現在の使用との各人に對する價値の差違

を云ふ。

將來の使用を與ふる利益が、現在に於ける同一の利益に均しき限界利用を有するものならば、物の按排は凡ての時に涉りて均一に行る可き筈なり。然るに事實に於ては、原則として將來の使用の與ふる便益が現在に於て有する價値は、現在の使用の與ふる便益の價値よりも少きを常とす。卽ち將來の使用は現在の利用として秤量するには割引せらるゝを例とするものなり。此割引は現在を隔つる時の長きに從ひ增すものなり。而して其割引の割合は、人によりて同じからず、思慮深く將來に具ふるの念强き人は少く割引し、忍耐力乏しく先見の明なき者は多く割引す。『宵越の錢を使はぬ』と云ふ人は、殆んど全額を割引するものにして、身を奉ずる極めて薄く只管貯蓄を樂むものは、殆んど割引せざるものと見る可し。同一人に在りても時所事情を異にするによりて、其割引の割合同

じからず。或時は多く割引し或時は少く割引す。但し此割引より控除す可きものあり、他なし、他日の使用を待つ樂の與ふる利用是れなり。又必ずしも他日の使用を期するに非ずして、保藏其事、貯蓄其物を樂み、之より多くの限界利用を受くる事あり。所謂『溜る程汚く』單に貯ふるのみにて、一生中之を使用するの望を持たず、又其機會無きに猶現在の使用を極度まで切詰めて自ら喜ぶものは必ずしも將來の樂しみを大なりとするものにあらず、現在に於ける保藏其ものが與ふる滿足を甚大と秤量するものなり。此點左右田博士の論文「貨幣概念を中心として」に於ける貨幣限界利用非認說に根本的の誤解あるが如し。反之、阪西教授の「價格生活の理論」に於ける評論は、少くとも經濟理論としては正鵠を得たり。又唯に所持に依つて大なる滿足を購ひ得るものあり、土地の如きは、地主たるが爲に、社會上の名譽多く、殊に選擧權の資格條件となせらるゝ場合に於ては、之を使用するより生ずる以上の限界利用ありとせらる。利廻の點より云へば他に勝るものあるに拘はらず、利率低き事業の株券を購入するが如き、其限界利用は、所持の與ふる餘分の限界利用あるが爲めと知る可し。一生中殆んど使用する機會なき家具書籍の類を蒐めて喜ぶもの、前後唯一回着用するに過ぎざるウエヂング・ドレスに數百金を費して、惜まざるものゝ如き、畢竟之を所有すとの安心が其人に與ふる滿足に多大の限界利用を見出すが爲なり。虛榮心强く、世間體をのみ顧慮する小人婦女の如きは、此種の滿足に大なる限界利用を見出すこと、到底物の實質をのみ見る男子の諒解し難き點にまで及ぶものなり。是れ所謂聲聞の欲望の最も强く働くが爲めにして、聲聞の慾寡なき者が、之を見て、無下に浪費なり冗費なりと斷ずるは、己あるを知て、他あるを知らざるものと稱す可きのみ。之を fictive value『架空の價値』と稱するも中らず。架空なるものと、然らざるものとの區別は、其標準を何處に求む可きや。されば限界利用均等の法則は、根本原則としては之を論ずる困難ならずと雖も、實際生活に於て一々其の作用を立證せんこと容易の業に非るを知る可し。

將來の使用と現在の使用とを比較して、其取捨選擇を決定するに方りては、更らに猶一の困難なる事情あるを思はざる可からず。他なし。異れる時に於て享有する利益は、之を數量的に比較すること能はざること是なり。前例に於て限界利用を示すに數量を以てしたるは假設に過ぎず、實際生活に於ては、如此事は到底成し得られず。蓋し卽時の消費を繰延ぶるは其の實享樂其ものを繰延ぶるにあらず、現在の享樂を捨てゝ將來の享樂

を以て之に代ふるを云ふなり。換言すれば、繰延と言ふは實は中らず、將來を以て現在に換ふる一の轉置、代位なり。將來の享樂其ものは、今廢する所の現在の享樂より必ずしも大なりと斷ず可からず。又小なりと斷ず可からず。此點は墺國派の泰斗ボエム・バヴエルクの利子論の大なる缺點とす可き所なり。蓋し氏は資本の利子を生ずるは、現在の使用より將來の使用の方常に價値少きが故に、其差違を補塡す可く、元資に加ふるに利子を支拂ふを要するが爲なりと說く。例ば今百圓の金を貸付けて、一ケ年後に其返濟を受くる場合ありとせよ。今直下に百圓を自己の消費に供するに代へて、一ケ年の後此百圓を用ゆるときは其額は同じ百圓なれども、直下に用ゆる時より、將來に用ゆる方價値少し。故に別に利子を添へて、一ケ年を延したるが爲め減じたる百圓の價値を補ふを要すと說けり。是れ眞理の半面のみ、現在の使用よりも、將來の使用の方利用大なること屢々あり。僅に文字を解する者が、高尙なる書籍を讀たりとて何の益なし、數年を經て、學進み智加はりて、之を讀む時は益すること大なり。年壯に收入多き時の百圓は、一ケ月の生計の一小部に過ぎざるに、年老け收入少き時まで之を貯蓄し置きて後始めて之を使用する時は、或は數ケ月の生活を支ふるを得可し。（其反對の場合も亦必ず之れあり、年少收入少きときに生命保險に加入するもの、其掛金の爲めに忍ぶ苦痛は大なり。然るに收入多く、又物價騰貴せる老年に入りて、保險金の支拂を受くるは大なる限界利用を捨てゝ小なる限界利用を取るものに等しかる可し。）將來の享樂其ものが現在の享樂より小なるにあらず、將來の享樂が現在に於て有する限界利用が小なるなり。此二者同じきが如くにして其實甚異れり。（其他猶考ふ可きことに、貨幣價値の變動あり、貨幣價値低き時、百圓の使用を繰延べて貯蓄し置き、其價値高まるとき、之を用ふる場合には將來の限界利用の方遙かに大なる可し。）

されば將來に享く可き利益を割引すと云ふも、其利益の數量的大さを確定したる上にあらざれば、其割引の歩合は、之を知ること能はず。マ氏は此點に於て二の推定を爲すにより此歩合を略定するを得可しと云ふ。二の推定とは、

一　其人が其將來に於ても現在と富有の度同一なりとすること

二　一定の貨幣額にて表はさるゝ利益より得る其人の享樂の力變ぜざるものとすること（箇々の點に於ては增減ありとも妨げなし）

此二つの推定を許容し置きて、今一磅を貯蓄し置きて一ケ年の後に一磅一志を得んと欲する人ありとせよ。此人の將來を割引する歩合は（其將來は、人間常命の上に於て確

を以て之に代ふるを云ふなり。換言すれば、繰延と言ふは實は中らず、將來を以て現在に換ふる一の轉置、代位なり。將來の享樂其ものは、今廢する所の現在の享樂より必ずしも大なりと斷ず可からず。又小なりと斷ず可からず。此點は墺國派の泰斗ボエム・バヴエルクの利子論の大なる缺點とす可き所なり。蓋し氏は資本の利子を生ずるは、現在の使用より將來の使用の方常に價値少きが故に、其差違を補塡す可く、元資に加ふるに利子を支拂ふを要するが爲なりと說く。例ば今百圓の金を貸付けて、一ヶ年後に其返濟を受くる場合ありとせよ。今直下に百圓を自己の消費に供するに代へて、一ヶ年の後此百圓を用ゆるときは其額は同じ百圓なれども、直下に用ゆる時より、將來に用ゆる方價値少し。故に別に利子を添へて、一ヶ年を延したるが爲め減じたる百圓の價値を補ふを要すと說けり。是れ眞理の半面のみ、現在の使用よりも、將來の使用の方利用大なること屢々あり。僅に文字を解する者が、高尙なる書籍を讀たりとて何の益なし、數年を經て、學進み智加はりて、之を讀む時は益すること大なり。年壯に收入多き時の百圓は、一ヶ月の生計の一小部に過ぎざるに、年老け收入少き時まで之を貯蓄し置きて後始めて之を使用する時は、或は數ヶ月の生活を支ふるを得可し。（其反對の場合も亦必ず之れあり、年少收入少きときに生命保險に加入するもの、其掛金の爲めに忍ぶ苦痛は大なり。然るに收入多く、又物價騰貴せる老年に入りて、保險金の支拂を受くるは大なる限界利用を捨てゝ小なる限界利用を取るものに等しかる可し。）將來の享樂其ものが現在の享樂より小なるにあらず、將來の享樂が現在に於て有する限界利用が小なるなり。此二者同じきが如くにして其實甚異れり。（其他猶考ふ可きことに、貨幣價値の變動あり、貨幣價値低き時、百圓の使用を繰延べて貯蓄し置き、其價値高まるとき、之を用ふる場合には將來の限界利用の方遙かに大なる可し。）

されば將來に享く可き利益を割引すと云ふも、其利益の數量的大さを確定したる上にあらざれば、其割引の歩合は、之を知ること能はず。マ氏は此點に於て二の推定を爲すにより此歩合を略定するを得可しと云ふ。二の推定とは、

一　其人が其將來に於ても現在と富有の度同一なりとすること

二　一定の貨幣額にて表はさるゝ利益より得る其人の享樂の力變ぜざるものとすること（箇々の點に於ては增減ありとも妨げなし）

此二つの推定を許容し置きて、今一磅を貯蓄し置きて一ヶ年の後に一磅一志を得んと欲する人ありとせよ。此人の將來を割引する歩合は（其將來は、人間常命の上に於て確

實なるものと推定して、一ヶ年五分なりと云ふを得可し。是れ彼が將來を割引する歩合にして、而して金融市場に於ける割引歩合亦之によりて定まるものなり。

以上は一時限り使用せらるゝものに就てのみ説明したれども、長期に渉りて使用せらるゝものに就ても其理異ならず。即ち各箇々の使用の合計が、其物の存在する限りの全體の利用となるものにして、以上の理は、箇々の使用に就て正しきが如く、其合計に就ても亦正し。

マ氏が右論ずる所亦ゴッセンの夙に唱導せる所なり。ゴッセン曰く

Die Gegenstände der zweiten Klasse haben nur Werth, insofern sie in der bestimmten Vereinigung wie Genussmittel wirken, in ihrer Gesammtheit findet daher das über die Werthbestimmung der Genussmittel Gesagte unmittelbar Anwendung. S. 32.

第二類の物（長期使用せらるゝもの）は、一定の結合に於て享樂資料と同一の作用を有するによりて價値を有するのみ。故に其全體に就ても、箇々の享樂財に就て云へる理直ちに適用せらる。

こと。

猶時を隔てたる使用は、其時を隔つるにより利用遞減の法則の作用に異動を生ずることを注意するを要す。即時に使用するとき一定の遞減の率を有する二物を、或時期の後使用するときは、其利用遞減の割合同じからざるに至ることあり、又其時期の長短に從ひ此割合に大小の差違を生ずることあり。

以上各種の異同作用ありて、法則の發動を妨碍すること、甚多きが如くなりと雖も、人・時・所・事情を同ふするときは、原則として、人の欲望充足は常に均等なる限界利用を總ての部分に於て得んことに趨向すること、水の水平を求むるが如くなることなし。限界利用均等の法則は、自然傾向の體現なると共に、また目的論的立場より見たる一の倫理法則なること、誠にゴッセンの言の如くなり。

第五章　補論

近來我邦に勤儉貯蓄論流行し、之を倫理學的に立論せんとするもの少しとせず。而も經濟學の立場より、學術的に之を講究するものは稀なり。故に本章は稍々贅言を此點に就て費したり。讀者之を諒せよ。

ブレンタノ先生曰く

Kapital ansammeln ist ein mittelbares, aber kein zukünftiges Bedürfnis. Kapital anzusammeln wird in der Gegenwart als Bedürfnis empfunden um eines Vorteils willen, der allerdings erst in der Zukunft zur Reife gelangt, dessen Sicherung für die Zukunft aber in der Gegenwart bereits Lust bereitet. S. 10.

資本を蓄積するは間接的の欲望たるには、相違なけれども、之を目して將來の欲望とするは中らず。資本を蓄積するより生ずる利益は無論將來に於て圓熟するものなれども、之を將來に向つて確保する事其自らが、現在に於て人に快感を與ふるが爲め、現在に於て一の欲望として感ぜらるゝものなり（欲望論第十頁）

即ち嚴密に云ふときは、限界利用の比較選擇には、將來と云ふことなし、常に與へられたる人に對し、與へられたる物の與へられたる使用が、與へられたる一定時に於て有する限界利用が對照せられ得るのみ。故に時間の差違は、欲望充足の方法に關する第二次的條件のみ。其問題となる第一次的の欲望は皆現在に於けるものならざる可からず。ボエム・バヴェルクが單に時間の差のみを以て資本を說明し、利子存在の理由を論證せんとするは、此點よりのみ見ても、到底服從し難き議論なり。

時の差違を以て重大なる要件として、欲望充足に別を立つる以上は、其他の差違即ち人を異にし、事情を異にし、購買力を異にし、所を異にするより起る總ての差違は、亦皆之を要件として、細目を立つるを要す。而も斯くするは、議論を錯綜せしむるのみにて、利する所少し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

時の差違を以て、價値の差違を說かんと試みたるは、ボエム・バヴェルクに始れるにあら

ず。彼以前既に幾多の學者之を論ずるものあり殊に『スコラ』哲學の泰斗トマス・ダキノ之を論じて甚精到なることは予之を『トマス・ダキノの經濟學說』に於て示したり。（經濟學研究五七一頁至七一一頁を見よ。）　ボエム・バヴエルクが『現在の財は原則として同種同數の將來の財より價値多し。此原則は予が利子論の極意にして中心點たるものなり』と言へるは、本文云へる如く謬說たるのみならず、亦た以つて前人の功業を沒するの嫌ひあり。バヴエルクは前人中獨りアダム・スミスが『現在の享樂と將來の利益』present enjoyment and future profit を論ずる條を引用せり。此句バ氏引用の國富論第二卷第一章になし。其の章に於てはアダム・スミスは流通固定兩資本の別を論じ流通資本は財を作り、又たは買ひて賣るに用ゆる資本にして、所有主の手に存し又は形を變ぜざるときは利益を生ぜざるものなりと云ひ固定資本は其の形を變ぜずして利益を生ずるものを云ふと說けるのみ。而して

No fixed capital can yield any revenue but by means of a circulating capital (Edition Cannan I. p. 266).

固定資本は流通資本の助あるにあらざれば利益を生ぜず

と云ひて、マルクスの不變資本は價値を增さず、可變資本あるによりて餘剩價値を生ずと云へる思想の先驅を爲せる一節を載せたり。バ氏の云ふ所は此章に見當らず。恐らく引照に誤あるならん。

其は扨置き、時間論を試みしもの、バ氏の前にジエヴオンスあり、シーニオアあり、ミルあり、否ミルの引照せるレーあり。（ミル曰く、資本蓄積の問題に付ては、予自らの論を述べんより、既に先人之を論じて餘蘊なきものあり。卽ち餘り世に知られざるドクトル・レーの經濟學新論是なり。蓄積は凡て、將來の利益の爲めに現在の利益を捨つることを云ふ。而して將來を現在と比較秤量するに方り、最重要の要素は其不確實なること是なり。然るに不確實の度は決して均一ならず云々。（原論一卷十一章二節の始）

バ氏と時を同ふするものにザツクスあり、メンガーあり、唯時間を以て利子を立論する唯一の根據とせるは獨りバ氏あるのみ。而して此は眞理の全部にあらざるのみならず將來の財なる概念は全然誤謬なり。バ氏に殘る所甚だ多からずと云ふ可し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

本章參考書は既に揭げたるゴッセン、ジエヴオンス、ブレンタノの外

Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins 2. A. Innsbruck. 1900. 1902. 3. A. 1909. 4. A. 1921.

Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. Wien. 1871. 2. A. Leipzig 1923.

Patten, Theory of dynamic economics. Philadelphia. 1892.

Rae, Sociological Theory of Capital, being a complete reprint of "the new principles of political economy, 1834." Edited by Mixter. New York 1905.

Sax, Grundlegung der theoretsichen Staatwirtschaft. 1887.

Launhardt, Mathematische Begründung der Volkswirtschaftslehre. 1885.

等に散見する所を參考す可し。

第六章　價格と利用

物を生產し購入する何れも之によりて利用を增進せんが爲めなり、卽ち物を生產するは、之が爲に費す總ての勞費卽ち生產費よりも、生產の結果たる生產物の方利用多きが爲なる如く、物を購入するは、代價として支拂ふ所よりも、購入して得る物の方利用多きが爲なり。而して多くの場合に於ては、物の價格は、其最高利用の點まで達することなく、已むを得ざる場合には此點までは支拂ふを辭せずと認むる價を支拂ふ場合は稀にして、大抵は其以下の價格を以て購ひ得るものなり。今支拂はんとする最高の價格と、實際支拂ふ價格との差額を稱してマーシアルは『消費者餘剩』と名く。氏曰く、消費者餘剩は購買によりて得る『餘分の滿足』を代表するものなりと。

此の餘剩の高は物によりて同一ならず。或物は支拂はんとする最高價格に比し、實際

支拂ふ價格甚低く從て其與ふる消費者餘剩甚大なり。例へば燐寸・鹽・新聞紙・郵便切手の如きは、之なければ不便を感ずること甚しきが故其供給少き場合には、餘程の高價を支拂ひても猶ほ買はんと欲す可き物なれども實際賣買せらるゝ其價格は甚だ低きが故購買者は之を購ふにより甚だ大なる消費者餘剩を得るものなり。

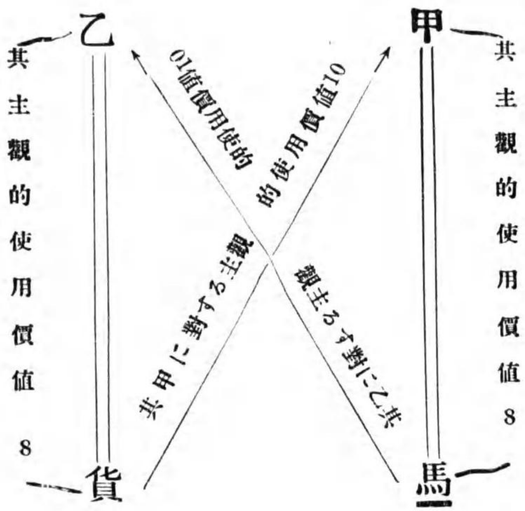
マ氏は本章に於て此『消費者餘剩』なる概念を鎖鑰として價格と利用との關係を解明す可しと爲せり。然れども予は氏の『消費者餘剩』論に服し能はざること既に久しく、思索を重ぬる數年、今日に至て猶其說を改む可き所以を見ず。消費者に餘分の滿足あれば、生產者にも亦是ある可き理なり。而して是は交換論に於て詳說す可き性質のものにして、今需要欲望を論ずる編中に入る可き者にあらず。然れども マ氏既に此論を茲に試むる以上、予も亦一應自說を陳述するの要あるを感ず。

生產も交換も賣買も皆餘剩價値の發生を目的とす、之によりて價値の新たに發生し、若くは既存價値の增進することなくんば、生產も交換も賣買も行はるゝものにあらず。十の生產費を費して十二の新生產物を得、十の物を與へて十二の物を交換し得ればこそ、生產も交換も成立するなれ。而して其兩者の比較は客觀的交換價値に基くものにあらずして、主觀的なる使用價値に基くものなり。今圖を以て此理を說かんに、

甲は己に對し8の主觀的使用價値を有する馬を乙に與へ、己に對して10の主觀的使用價値を有する牛を得るが故に、此交換によりて2の餘剩價値を得。

乙は己に對し8の主觀的使用價値を有する牛を甲に與へ、己に對して10の主觀的使用價値を有する馬を得るが故に、此交換によりて2の餘剩價値を得るなり。即ち甲乙兩者共に主觀的使用價値の少き者を與へて、其多き者を得るが故に、此交換は成立するなり。

今此物々交換の例を代へて、賣買の例とするも其理異るとなし。次圖を以て說明せん。



百圓を以つて馬一頭を賣るものは、其の時其の所其の場合に於いては、百圓の貨幣の方其の馬一頭より價値（マ氏の利用）多しとするが故にして、之れを買ふものは支拂ふ百圓の貨幣よりも其の一頭の馬の方の價値（マ氏の利用）多しとするが故のみ。即ち餘分の滿足を得るものは獨り買手のみならず、賣手も亦た同じく餘剩の價値を得るものなり。されば、若し『消費者餘剩』なるものありとせば、『生產者餘剩』なるものも亦たなかる可からざる理なり。然るに、マ氏は其の一方のみを說て、他方に及ばず、理然る可からず。

何故にマ氏は此睹易き道理を看過せしや、其故他なし、氏は此編に於て需要即ち消費者を論ずるのみにして、生產論を爲さず。故に『消費者餘剩』のみを說くなり。されば氏が立論の結構は妥當を缺くものにして、此種問題は之を一括して價値論下に說く可きを、僅かに其半面を茲に捉へ來れるが故に、其論不備たるを免れざるなり。然らば、何故氏は斯くの如き早計に陷れりやと云ふに、前に述べたる如く、氏は先づ價格を前提し、之れに對向して需要の現象を說くに止め、直ちに需要其の物に肉薄して論究するを爲さゞるが爲

F. I, 33.

なり。

換言すれば、結果たる價格を却て原因の地位に置くものなり。予は斷じて此法を取る能はず。然れども氏に於て斯く構論する以上暫く氏に從て以下其論ずる所を尋ねざる可からず。

需要の强弱は、支拂價格によりて數的に言表はさる。百圓を支拂ふこと十圓を支拂ふことは、其の支拂者の需要に百と十との比例差違あるが爲めなりとは、マ氏の常に推定する所なり。

然るに實際支拂ふ價格は、此意味に於て需要者需要の强弱に比例せず。或物に對して百の需要力あり乍ら、僅かに十の價を拂ふて足ることあり、或物に對しては五十の需要力あるに止るに二十の價を拂ふを要することあり。即ち支拂價格と最高需要價格との關係は常に一定せずして、種々異る比例に立つものなり。故にマ氏の前提は破壞せられざる能はず、即ち特に此一章を設けて、其比例差違の理を究めて前提の維持を圖らんとするが氏の眞意なり。

氏は此理を尋究するに先づ假例を設けて其大要を述べたり。

茶一斤價二十志なるときは一ヶ年一斤を買はんとす　茶一斤價十四志なるときは一ヶ年二斤を買はんとす
茶一斤價十　志なるときは一ヶ年三斤を買はんとす　茶一斤價六　志なるときは一ヶ年四斤を買はんとす
茶一斤價四　志なるときは一ヶ年五斤を買はんとす　茶一斤價三　志なるときは一ヶ年六斤を買はんとす
茶一斤價二　志なる現在に於て一ヶ年七斤を買ふ

ものと假定せよ。此場合に於て生ずる餘剩は幾干なりや。

一斤二十志なるときに於て一斤を買ふてふ事實は、其一斤の與ふる滿足は、他物を買ふに費す二十志が與ふる滿足と全然同一なることを明示す。而して

價　十四志に下落するに猶一斤のみを購ふに止むるときは、二十志拂はんとするものを十四志にて購ひ得るものなるが故、其得る餘剩は

20 — 14 = 6

六志に相當するものなり。即ち此場合の餘剩價値は貨幣額六志を以て言表はされ得るものなり。

然るに右の假例により

價　十四志に下落するときは二斤を買ふ

ものなるが故此第二斤は少くとも十四志の利用ありと認めらるゝものならざる可からず。卽ち十四志なる貨幣價値は第一斤に附加して買入るゝ第二斤が彼に與ふる餘分の利用を顯はすものなり。卽ち

第一斤の利用　第二斤の利用

20 ＋ 14 ＝ 34

合計二斤の茶は彼に對して合計三十四志てふ貨幣價値を以て言表はさるゝ利用を有すと認めらるゝものなり。然るに其支拂ふ價は毎斤十四志なるにより

14 × 2 ＝ 28

二斤に對し二十八志に止る。依て得る餘剩は前と同じく少くとも、

34 － 28 ＝ 6

六志なるべし。

次に價十志に下落する場合には、十四志の場合の如く二斤丈けを買ふに止むるを得可し。然るときは、十志の二倍の價

10 × 2 ＝ 20

二十志を以て、少くとも三十四志の利用ありと認むる茶二斤を買ひ得るものなるが故に

34 － 20 ＝ 14

十四志の餘剩を生ず。然るに右例にては價十志の時は三斤を買ふ。依て

第一斤の利用　第二斤の利用　第三斤の利用

20 ＋ 14 ＋ 10 ＝ 44

三斤合計にて少くとも四十四志の利用あるものを

10 × 3 ＝ 30

三十志にて購ひ得るが故

44 － 30 ＝ 14

少くとも十四志の餘剩を得ること第二の場合に異ならず。以下凡て之に準ず。

一斤の價下落して二志となりたるときは、合計七斤を買ふものなれば、其七斤全體の利用は

第一斤　第二斤　第三斤　第四斤、第五斤　第六斤　第七斤

20 ＋ 14 ＋ 10 ＋ 6 ＋ 4 ＋ 3 ＋ [illegible]

五十九志なり、而して支拂ふ價は、

2 × 7 ＝ 14

七斤に對し十四志なり。依て

59 － 14 ＝ 45

餘剩の總計四十五志となる。此四十五志は茶一斤の價二志てふ市場の事情の爲に購買者（需要者）が享得する所の餘分の滿足なり。他物を購ふ可きか茶を購ふ可きかを決定する標準は此の餘剩を得ること何れの場合多きかに存す。マ氏は之を名けて『市場事情 Conjuncture より享くる消費者の利益』と稱す。

以上は個人の需要に就て觀察する所なれども、更らに進んで市場需要に就て見るも、其理異ることなし。但し此場合貨幣の限界利用の人によりて異ることを度外に置くを要す。然らざれば多くの異なる人より成る市場に於ける價格は、又甚だ異りたる作用を生じて、到底一貫の說明を下し能はざればなり。其外、人々の趣向の差違貧富の差違等も亦其作用を複雜ならしむる原因なり。然れども汎く一市場又は一都會を見るときは、大抵は如此個々の小異は大同の爲めに包含せられ、區々の差違は相殺して、原則としては同一の變動は同一の作用を生じ、一人の享くる餘剩は他の凡ての人の享くる餘剩と大略均等なるものと見て差支へなく、從て此問題を一般市場に就て研究するは、學理上甚だ有益にして、趣味深き事たるなり。

但し茲に注意す可きは、二物の總利用は其二物別々の總利用の合計に同じからざることなり。茶と鹽とを合せて一圓丈け買ふ場合の總利用は、茶七十錢のみを買ひ鹽三十錢のみを買ふ二の場合の總利用を合計したるものに同じからざるが如き是なり。

次に特言を要するは、或人が物を買ひて貨幣を費すこと愈々多きに從ひ、其人の購買力は愈々減じ從て貨幣の限界利用愈々大となるの理と右說く所の餘剩との關係是なり。

此理は常に働きて其作用を已むることなしと雖も、大體に就て見るときは、此は凡ての場合に同樣に働くものなるが故に、價格と利用との差額たる餘剩價値は購買力の增減並に貨幣の限界利用の多少の爲めに、左右せらるゝことなしと見て大過なく、常に同一比例を保つものと推定するを得。但し此にも例外の場合なきに非ず。即ちギッフェンの說きたる如く、パンの價の騰貴は時として却て其需要を增加せしむるの力あること是なり。パンは必要品にして、其價騰貴するときは、他の食料品に費やす可き餘裕減ず。然るに價如何に高くとも、パンは食料として最廉價品なり。故に他の食料を買ふ能はざるときは、パンをより多く食して其不足を補ふの要あり。即ちパンに對する需要は、其價の騰貴によりて却て增進するなり。然れども如斯は稀有の事に屬するが故、原則としては、之を度外に置きて差支なきなり。

統計學者ベルヌーキは、所得より享くる滿足は、生活を支ふるに足る丈けを得るときより始まり、以上所得を增す每に遞增し、以下之を減ずる每に遞減するものと見る可しと論ぜり。

以下マ氏が四・五・六の三節に於て論ずる所は、本章の主題に直接の關係なき消費論に關する常識談にして、何等純理上の價値あるを見ず。依て省略す。

右マ氏の論ずる餘剩論は慥かに眞理の一面を傳へたるものにして、マルクスの餘剩價値論と對照して之を察するときは興味深き種々の問題を暗示す。然れどもマ氏の論じたる所丈けにては論旨寧ろ淺膚に失し、ニコルソンをして『百磅の所得の利用は千磅なりと云ふ何の益かある』（同氏原論第二版（一九〇二年刊）五十八頁）と評せしむるに至れり。茶一斤二志なるに若し一斤百磅にて買はんとする人ありとせば、其の餘剩は莫大なる可しと雖も、如此は實際に寸益なき空談に外ならず、故にマ氏は如此設例は實際市價と餘り懸隔せざる假定價格に就てのみ意味を有し、之れを離るゝこと遠ければ、全く架空的 conjectural たるに過ぎずと自白せり。即ち此の問題は需要消費の側より研究するよりも、實際生活に起る賣買に就いて、其の市價と價値との關係を研究するところに於いて精査するを要するものなり。

第六章　補　論

本章の問題は本文に述べたる如く流通經濟論に於いて詳論するを要するものなり。故に今補論せず。

9. VIII. 24

第四編　生産の働因（供給論）

土地・勞働・資本及企業

第一章　緒　論

第三編に於て需要論の問題として欲望及其充足を論じて從來經濟學に於て『消費論』と稱するものに該當する研究を終りたり。されば之に續て供給論を試む可き筈なり。マーシアルは第一・二版に於ては、第四編を名けて『供給論卽ち生産論』となし、第一章緒論に於て供給に關する總論を載せたり。然るに第五版以降に於ては、第四編は、『生産働因卽土地・勞働・資本及組織』と改題し、第一章に於ける研究總論の順序を變更せり。是予が前編首章に於て指摘したる如く、マ氏が年所を經るに從ひ說を改めて、反つて通說の四分法（生産・交換・分配・消費）に跡戻ししたるものにして、予が氏の爲に惜みて措かざる所なり。遮莫第二章より第十三章に至る其内容に就て之を見る時は、氏の變化は寧ろ言辭

の上にのみ止まるものにして、實質に於ては、多くの異動あるを見ず。即ち第一版に於ても、『供給論』なる表題を掲げながら、其專ら考究する所は『生産論』なるこ、第五版以下に於けるこ毫も異る所なし。而して、從來經濟學に於て『生産論』こ稱せらるゝものは、其實生産要素又は生産働因論にして、生産其ものに就ての議論は甚だ尠く、生産の要素こ認めらるゝ、土地・勞働・資本に關する研究其要部を占め、而して其研究は、此等要素の增減を以て中心の問題こ爲せり。故に適切に之を云ふこきは、生産論こ稱するよりも『生産要素增減論』こ稱す可きものなり。即ち土地を論じては、主こして其面積の增減の餘地殆んご之なきを云ひ、經濟上に於ける土地の增減こは、主こして其性質上の增減を云ふものにして、專ら土地の豐否の問題を研究す可しこ爲し、茲に收穫遞減の法則なるものありて、此問題を解答するに最も重要なりこし、之と關連して收穫增減の法則及び收穫不變の法則を論ずるなり。勞働に關しては　一數量上の增減こ　二性質上の增減ありこし、一に就ては、マルサスの人口の法則なるものを主要の問題こして論究し、二に就ては如斯著名なる學說なきが故に、一二實際見聞に基く常識論を以て之に答ふ。資本に就ては、再び專ら其數量上の增減を問題こし、資本は如何にして成立し、又如何にして增殖するやの題目に力を罩め、貯蓄を以て資本增殖及發生の主要因なりこして、其問題を考究す。斯くして生産論の議論完結するものこ見做さる。而して通編未だ嘗て生産其ものに就て何等の法則・何等の學理あるを見ず。生産論の名に重きを置きて、之を學ばんこ欲するものは、必ず失望せざる能はざるなり。而して如斯きは獨り正統學派の學者のみならず、獨逸の新學派たる歷史學派亦皆然らざるはなし。經濟學四分法を排斥する新派の學者も、事實に於ては、また全く此の舊套を襲ふのみ。予輩不平なき能はず。今轉じてマーシアルを見るに、第四編生産働因論十三章の論ずる所、又多く此亞流たるを免れず。即ち氏は本編に表題して、『土地・勞働・資本及組織』こ云ふ。唯氏は此全體を名くるに『生産論』なる稱を以てせず、『生産働因論』なる稱を以てす。是れ內容を正直に標榜するものにして、從來の名實に過ぐるの謗を避くるを得るものなり。而も氏が生産働因論も、亦其內容に於いて生産働因增減論其大部分を占むるは惜む可しこ雖も、氏が第四因こして附け加へたる『組織』即ち企業に關する研究に至ては、獨り狹き增減論の範疇に限局せず、企業の性質・

種類・活動に付て、廣汎該博の研究を試みたるは、甚だ喜ぶ可き所なり。

今第一章に於けるマーシアルの所論を紹介するに先ち、生産なる概念と、所謂生産要素なる概念の成立に就て、大要を叙するの必要あり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

生産及び之と關連して分配なる語の英國經濟學に於て用られたるは、千八百二十一年以後の事なり。經濟學の父と稱せらるゝアダム・スミスは未だ此の分類法を採らず。スミスに先つ九年に公にせられたるスチュアートの經濟學原論 Steuart, Principles of political economy にも亦此說を用ゐあらず。スチュアートの書は

一人口及農業　二貿易及工業　三貨幣及鑄貨　四信用及負債　五租稅及其適用

の五篇に分てり。アダム・スミスは人の知る如く、其書を五篇に分つて、

一生産力の增加及生産物分配の順序。二元資（資本・財産）の性質蓄積・使用、三各國富力進步の差違。四經濟政策の諸派。五國家の收入。

と爲せり。生産的・生産力・生産物の語は『分配さる』なる働詞と共に屢々彼れの用ゆる所なれども、術語の名詞として『生産』なる語は何處にも見當らず。然るに千八百十一年に出版せられたるボアローの經濟書 Boileau, Introduction to the study of political economy, or elementary view of the manner in which the wealth of nations is *produced, increased, distributed,* and *consumed* は働詞として明かに、生産・分配・消費の三項を書名に題したり。其書の分類は左の如し。

一諸國民の富の性質及淵源。二其の增加。三其の分配。四其の消費

卽ち生産なる語は『增加』なる語を以て換へられあり。此に後るゝ六年、卽ち千八百十七年に出でたるリカルドの原論は此點に於ては全く何等の系統なく、秩序なき者にして

一價値。二地代。三自然價・市場價。四勞働。五利潤。六外國貿易。七地代。八地租。九家屋稅。

等の如く得るに任せて章を設けたるものなり。千八百二十年出版のマルサスの原論は、

一富及生産的勞働の定義。二價値の性質及秤量。三地代。四勞銀。五資本の利潤。六富と價値との區別。七富の增進の原因。

の七篇を設くるのみ。卽ちボアローを除きては、四分法は勿論生産論なる特別の部門を

設けたるものすらなきなり。而してボアローは獨逸學者ヤコブの書 Grundsätze der National Oekonomie Halle 1805. に據ることを言明し、ヤコブは佛國の學者ジアン・バチスト・セーを祖述する旨を告白し居れり。故にキアナンが其『英國經濟學に於る生産及分配の諸理論』に於て、恰かもボアローが、三分法の創說者たるかの如く述べ居れるは、考證未だ到らざるものゝ云はざる可からず、三分法の創始者はボアローにあらずセーなり。本書舊版はキアナンの說に同じたりしも、今は其誤なるを認め之を訂正し置くものなり。

千八百十四年刊行のジアン・バチスト・セーの經濟原論第二版 J. B. Say, Traité d'économie politique は篇を分つ三、左の如し。

I. De la Production des richesses.　富の生産
II. De la Distribution des richesses.　富の分配
III. De la Consommation des richesses.　富の消費

交換論を認めざるこゝボアローに同じ。而して右は其書第二版の分類にして、千八百三年に出版せる其第一版は其篇次を斯く形式の上に顯はして三分しあらず、是れキアナン誤解の因て起る所なり。然れども、內容は明かに三分法を執りあり、獨逸のヤコブ之れに倣ひ、更らに英國のボアロー此のヤコブに倣ひたるなり。（國民經濟雜誌四十二年八月第七卷第二號の拙文は此意味に於て訂正を要す。）

然るに千八百二十一年に至りて、明かに四分法を取り、生産論を以て其一部門と爲せる書出でたり。ジョン・スチュアート・ミルの父ジェームス・ミルの經濟要論 James Mill, Elements of political economy 是なり。此書四章より成る。卽ち

I. Production　生産
II. Distribution　分配
III. Interchange　交換
IV. Consumption　消費

是なり。三の交換の名稱後世 Exchange と改められたるのみにして、其他は此分類法と其名稱は全然斯學の定說となりて今日に及べり。

斯く生産論を獨立の一部門と爲したるはジェームス・ミルなりと雖も、其要論の第一版

F. I, 34.

ては、What are the laws which regulate the production of commodities『貨物の生産を支配する法則如何』と題する一章は僅かに四頁に止れり。第二版に至りては聊か紙數を増加し稍々詳論を下したり。之に反し生産論に多くの力を傾注したるはトレンスの『富の生産に就ての考』Torrens, Essay on the production of wealth 1821 にして全篇四百三十頁を擧げて生産論を試む。而して彼を承けて、生産論を獨立の問題として大成せるは、シーニオア及ジョン・スチュアート・ミルなり。

生産の要素なる概念も亦右の變遷に伴へり。其濫觴は亦たアダム・スミスにあり。スミスは曰く、社會の收入に三種あり、Wages of labour (勞働の賃銀) profits of stock (元資・資本の利潤) rent of land (土地の地代) 是なりと。彼は之を分配に預る點より論じたる者にして、生産の要素又は働因として論じたるにあらざれども、生産論に於て二・三又は四要素を論ずるは、事實に於て分配論に於る地代・賃銀・利子・利潤を『アンチシペート』(豫定) するが爲に外ならず。此點學者の注意するもの多からざるは惜む可し。生産要素の概念の成立は分配論に始りて後に生産論に移り及ぼせるものなることは、最近の生産要素論を諒解にも亦た其本質を究むるにも共に忘る可からざる所なり。

而して、生産三要素の語を術語として確定したるは復たジアン・バチスト・セーなり。曰く

> L'industrie, les capitaux et les agents naturels concourent, chacun en ce qui les concerne, à la production; nous avons vu que ces trois éléments de la production sont indispensables pour qu'il y ait des produits créés. J. B. Say, Traité. 2. E. 1814. vol. I. p. 35.
>
> 勞働資本及天然各其分を盡して生産の爲めに共働す、生産物あり得る爲めには、此生産の三要素は不可缺ものなり

ボアローも亦土地勞働資本の共同作用云々を論ぜり。然るにジエームス・ミルは勞働と資本の二要素を認むるのみ。子なるジョン・スチュアート・ミルも二要素のみを認むるも、其は勞働と土地にして、資本は第二次的要件なりと說く。シーニオア亦然り。之に反しトレンスは三要件を認む。曰く

> The land which supplies the primary materials of wealth, the labour by which these materials

are appropriated, prepared, augmented, or transferred, and the capital that aids these several operations, are all instruments of production. —Torrens, Production of Wealth. p. 66.

富の原始材料を供する土地、此材料を占有し準備し、増大し又は移轉する勞働、此等の種々の作業を助くる資本、此等皆生産の要件なり。

然るにトレンスに遙かに遲れて（千八百四十八年）出でたるミルの原論は二要素のみを認むること前云へる如し。三要素論の定說と成れるは極めて新らしきことなることを以て知る可し。而して其後に於ても資本を要素中に算入せざるもの間々あり。

最近時に至りては、生産要素を改めて經濟生活若くは經濟組織の要素を爲すこと稍々流行す。シュモラーは、土地、人民及技術の三を以て國民經濟の三要素 Elemente der Volkswirtschaft なりとし、セリグマン其の流を汲みて天然の包圍と人口とを以て經濟生活の基礎 Foundations of economic life なりと說けり。

經濟行爲中心論より云へば生産又は分配の要件たるもの、經濟組織中心論より見れば、全體の組織又は生活の要素と成るは、理の當然なり。別に新案にあらず又た創說にもあらず。却て附會の跡を掩ひ難く、感服し兼ぬる點尠からず。猶ほ斯學向後の發達を待つ可きものなり。

* * * * * * * * * *

以上生産及生産要素の概念の沿革を略叙し終りたれば、進んで第一章に於けるマーシアルの所論を窺ふ可し。

氏の緒論は二部に分つを得。一は生産要素總論にして、二は供給總論なり。先其一より始めん。マ氏は生産三働因（要素と云ひ、要件と云ひ、働因と云ふ語は異れど、意は概れ同じ。要素は element 要件は requisite 又は instrument 働因は agent（獨語には Faktor と云ふ者多し）の譯なり。但其中 element と agent (Faktor) とは多少意味に差あり。要素は構成部分と云ふ程の義、働因は働作原因又は發動力源と云ふ程の義なり。ブレンタノ先生は生産の働因は唯一勞働卽ち人間のみなりと云ふ。其意は人ありて始めて生産あり人なくんば生産なしと云ふにて、發動力源と云ふことに重きを置きての論なり。然れども通例斯迄重き意味を此語に附するもの殆んど無しと云ふ可きか。は通例土地、勞働、資本より成ると見做さると云ひて、此三者に定義を下せり。

曰く

一　土地とは水・陸・空氣・光線・熱の態に於て天然が自由に人間を助くる爲めに與ふる材料

及力を云ふ。

By Land is meant the material and the forces which Nature gives freely for man's aid, in land, and water, in air and light and heat.

二　勞働とは手又は頭を以てする人の經濟上の働を云ふ。

By Labour is meant the economic work of man, whether with the hand or the head.

三　資本とは物質財の生産及通例所得の一部を成すと認めらるゝ便益を得る爲めの凡ての蓄積せられたる準備資料を云ふ。

By Capital is meant all stored-up provision for the production of material goods, and for the attainment of those benefits which are commonly reckoned as part of income.

（以上の定義予は之を執らざるこゝ既に前編に細論せる所なり就て看る可し）

而して氏は之に加ふるに更に第四の働因として組織（企業）を以てす可しと云ふ。曰く

Capital consists in a great part of knowledge and organization: and of this some part is private property and other part is not. Knowledge is our most powerful engine of production; it enables us to subdue Nature and force her to satisfy our wants. Organization aids knowledge; it has many forms, e. g. that of a single business, that of various businesses in the same trade, that of various trades relatively to one another, that of the state providing security for all and help for many. The distinction between the public and private property in knowledge and organization is of great and growing importance: in some respects of more importance than that between public and private property in material things; and partly for that reason it seems best sometimes to reckon organization as a distinct agent of production.

資本は大部分知識及組織より成る。其中私有財産たるあり、然らざるあり。知識は生産の最有力機關なり。吾人は之に依りて天然を從へ之れを强制して吾人の欲望を滿足せしむ。組織は知識を助く。組織に種々の形態あり。例へば單獨營業、同業中の異れる諸營業、異れる業相互の關係、國家の經營等是也。知識及組織に於ける私有と公有との區別は大に肝要にして其肝要の度亦增しつゝあり。或點に於ては、有形物に對する公有・私有の別よりも肝要なり。而して一部分此理由よりして、或時には、組織を一の獨立なる生産働因と認むるを最も可と認めしむるものあり

即ち氏は公有私有の點を主として、組織を生産の一働因と認めんとするなり。

氏は斯く生産の四要因を認むれども、又た或意味に於ては、生産の働因は天然と人との二あるのみと云ふ可しとて、ミルの舊說を承繼す。而して二者の中又人こそ最中心たる可しとて、ブレンタノ先生と粗々同說を唱ふ。曰く、資本も組織も共に人間の働（天然の助を藉ること勿論なり）の結果にして、人が將來を豫測する力及之に向て具ふる用意によりて左右せらる。而して人共ものは亦包圍の天然によりて形造らるゝものなり。故に何れの點より見るも、生産及消費の中心たるものは人間其ものにして、生産消費の關係より生ずる問題たる交換及分配の研究も亦人を中心とせざる能はずと。

人間は經濟學研究の最終目的にして、其數、健康、體力、知識、技能、性格の富に於ける進歩は其最高の問題なり。故に經濟學に於て此等問題を論ずるは最終篇に於て爲す可きや當然なり。近來獨逸の學者中人口論を經濟原論の最終に置くもの往々之あり。最も著しき例は、ロツシアーなり。フツクス亦之に倣ふ　マ氏曰く、此意に於て、人口の問題に就ては、經濟學は其全部を盡し得るものに非ず、又之を論ずるも、最終部に置く可きものなり。然れども生産論を爲すには必ず人口の問題を度外に置くを得ず、故に通說に從ひ生産の點より見たる人口論を生産論中に置くは便宜の問題に外ならず。然り原則の問題としては、人間を取扱ふに單に生産要素の一としてのみするは甚だ當を得ず。必ず凡ての上に立つものとして、之を論究するを要す。此意味に於ては、シュモラーの如く、經濟學の首部に經濟心理、倫理論を置きて、先づ凡ての經濟現象の唯一働源としての人間を研究するを以て當を得たりとす。又消費論を始めに置き、其處に於て人間論を詳悉するも可なり。唯通說の人口論は主として數の增減に關するものにして、勞働力の供給てふ觀察點より論を立つるものなれば、其意味に於ける人口論は當然生産論に入る可きものなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

以上を以て本章に於けるマ氏論點の第一を終れり。第二の論點は供給に關する總論なり。其大要左の如し。

マ氏は先づ需要と供給との關係を論ず。曰く、需要と供給卽ち消費と生産との關係を詳論するは今其所にあらず、却て或は誤解を惹起する虞なきにしもあらず。然れども價格と利用との關係を前章に論じたるに引續て、價格と非利用との關係を詳論するは必ず

しも無益の業に非ず。非利用(Disutility)とは欲望の對象たる財を得んが爲め打克たざる可からざる困難を云ふ。此は後編に至つて更らに詳論を要するものにして、吾人の茲に論ずるは、單に其一端に過ぎず。

需要は財を得んとの念に基くものなること前に述べたるが如し。今此と對向する供給は、之を得るに要する困難 discommodities を忍ぶを欲せざる念慮によりて制せらる。此困難は分つて二とす。卽ち一勞働　二卽時の消費を繰延ぶる犧牲是なり。勞働には企業の勞務含まれあり。此點予は服せず、後段を見よ。犧牲には生産要具の蓄積に要する忍耐含まれありと雖も、其は今茲に論ぜず。單に普通の勞働に就て見るに、勞働が困難 discommodity と感ぜらるゝは、其が肉體及精神上の疲勞を伴ひ、又は健康を害する狀態の下に於て好ましからざる朋輩と共にし、又は娛樂其他の要務に費すを得可き時間を犧牲とするを要するより起る。困難の形態は斯く千差萬別なれども、其度合は勞働の激しさ及時間の長さの增すに從ひ增すを以て通例とす。但し之等の疲勞は他の爲めの手段としてにあらずして、單に其自らの爲めに之を敢てすることあり。例へば山に登り遊戯に耽り、其他文學技藝學問に從事するが如き皆然り。又他人を利せんが爲め困難なる勞務に服することあり。然れども大多數の場合に於ける勞務は、之によりて物質的利益を自己の爲めに得んとする動機によりて營まるゝものなり。而して此物質的利益は現在の經濟生活に於ては、一定の貨幣額となりて顯はるゝものなること、既に屢々說けるが如し。元より他人に雇れて勞働する時と雖も、其仕事自らに興味を覺え、之れより愉快を得ることなきにあらず。然れども他人の爲めにし又或る他の目的を達す可き手段として營むてふ事實は、原則として苦痛を伴ふものにして、休息の時間の來るを樂み待つは、凡ての人の情なり。職なく業なき時は、却て退屈を感じ、假令報酬を得ざるも猶且働かんと欲することなきにあらずと雖も、而も需要せられざる勞働を提供して、市場を亂さんより、寧ろ其供給を差控ゆること、商人が需要少き場合には、其商品の賣出を見合すと事情殆んど同一なる可し（此點は後編に至り更らに詳論す可し）。今此の供給限界の點を名けて、勞働の『限界非利用』Marginal disutility と稱するを得可し。

既に或職業に從事する者が更らに其力作を增すを欲するや否やを定むる事情は、人間

心理の上に一定の根據を有するものにして、經濟學に於ては、之を既定の事實として認むるものなり、此點に就ては、ジェヴオンスは稍々緻密の論究を試みて其原論の第五章『勞働の理論』に掲げたり。曰く、凡そ事を始むるに方りては、之に取掛かること既に多少の困難を感ぜしむ、愈々事を始むるにも亦多少の抵抗と戰ざる可からず、事漸く進むに及び、此抵抗と困難とは漸次減少し、終には零無となり、愉快反つて之に伴ふ。此愉快は遞次に增進して、一定の最高限に達するときは、再び減少し始め、終には零無に歸し、茲に再び困難を生じ、此困難は亦遞增す。但し精神上の勞務に在りては、業進むに從ひ愉快增進するの一方あるのみにて、必要又は思慮によりて之を止むるにあらざれば、多々益々進みて停まらざることなきにあらず。

蓋し人の心身の力には一定の限度ありて、無限に之を充用するを得ず。力の支出が其收入（休息睡眠等による力の回復）に超過するときは、力源の破壞を來す。勞働者に增賃して時間以外に働かしむること或度以上に及べば、却て生産力の損減を來すことは確定の眞理なり。（此點は後段詳述す可し猶勞働經濟論及國民經濟講話勞働の部を併せ見よ）蓋し人勞役すること愈々多ければ、休息の必要亦愈大となる。一定限以外の過勞は、仕事の增量よりも大なる比例に於て疲勞を惹起す。是れを『疲勞遞增の法則』と名く。

右の事情は之を後章に叙述するに讓りて、大體の原則に就て見るときは、ジェヴオンスの說きたる所克く要を得たり。曰く、勞働者の力作は之に供する報酬の大小に從て、增減すること、貨物の供給が提供せらるゝ價の多寡に伴て增減すると其理異ることなし。一定の貨物に對し買手を誘致する價を名けて『需要價格』と稱せし如く、一貨物の一定量を生産するに要する力作を招致する價は、之を名けて『供給價格』Supply price と云ふを得可し。

And if for the moment we assumed that production depended solely upon the exertions of a certain number of workers, already in existence and trained for their work, we should get a list of supply prices corresponding to the list of demand prices which we have already considered. This list would set forth theoretically in one column of figures various amounts of exertion and therefore of production; and in a parallel column the prices which must be paid to induce the available workers to

put forth these amounts of exertion.

今生産が全く既存成熟の勞働者の一定數のみによりて營まるゝものと推定するときは、既に前編に說きたる需要價格定表に相應する、供給價格表なるものを作るを得可し。此表は、一方に於ては、力作の數種異れる量卽ち生産額の異れる各種を揭げ、之と相對して、此等の量及額を招致するに要する價格を揭ぐる一の理論的定表なり。

と。而して氏は此種定表は之を實際生活に適用するには、種々の困難ある可きを豫想せり。卽ち斯く定表を作るには一定の貨物の生産に從事する勞働者の數一定不動のものと推定するものなれども、實際に於ては、斯くの如き事は到底あり得可からず。極めて短かき時間に就てのみ稍々望み得可きのみ。人口の數は絶えず增減し、從て勞働者の數變動す。元より勞働に對する供給價格たる賃銀の多少は、此變動を左右する有力の一原因たるや疑なしと雖も、此他にも種々の原因ありて、其作用は不規則的なるを常とす。故に賃銀の增減のみを以て、勞働供給の增減を律せんは、實際の事實に遠かるの眞あり。

遮莫種々の職業間に於ける人口の分配は、主として經濟上の原因によりて定めらるゝものなることは原則として之を認めざる可からず。卽ち長き時期に涉りて觀るときは一職業に於ける勞働の供給は大體に於て之に對する需要に伴ふものにして、親が其子を敎育するに力り、常に需要の多き業の準備を與ふるを勉むるは、畢竟此れが爲めなり。乍去勞働の供給と需要の調和は決して絶對完全に行はるゝものにあらず。之を妨ぐる事情は其數多く、又絶えず起り來るものにして、其研究は後編を待たざる可からず。本編は主として、記述的方面に限り、此等の複雜なる問題を交へざるを主眼とすと。以上マ氏の說く供給總論には、予輩の服し難き點一二にして止まらず。

一　供給の考察を單に生産に要する力作卽ち勞働の供給のみに限ること

二　從て供給額を勞働の供給額と殆んど同意義なるが如く說くこと

三　單に需要供給調和の點のみを論じ、抑も供給の本質の何たるやに論及せざること

等は、殊に缺點と見る可し。而して本章に於てマ氏の說く所は、單に問題の一端に過ぎずして、後に至り皆夫々詳論を要するものなり。卽ち氏は、本章元來の問題は之を閑却し、問題外なる準備論を以て之を補ふこと、議論の順序を紊るの嫌ありと云はざる可からず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

生産の唯一最高の働源は人間なること云ふ迄もなし。從て供給の問題も亦人を以て其中心と爲す可きは勿論なりと雖も、消費に對する生産需要に對する供給は、寧ろ物の側に多くの問題を有し、供給論中勞働の供給は、却て他の生産要素の供給と異る特殊の點を有すること多し。故に勞働供給論を以て、供給論の全體を推論し得可しとするは謬れり。予の見る所にては、供給論は、寧ろ物の供給の問題を主として論じ、其の外別に趣を異にするものとして、人の供給卽ち勞働の供給を研究す可きものなり。マ氏が勞働供給論を供給論全體の中心に置くは、全くジェヴオンスの舊衣を襲踏するものなり。ジェヴオンスは『愉快と苦痛』の均衡を以て、經濟學の鎭鑰とするものなるが故、斯くすること多少の理由なきに非ざれども、マ氏の如く汎く一般に涉りて、供給論を試みんとするものに在りては、此の論法は、全然不適當なり。蓋し需要に於いては主觀的要素主として働き、供給に於いては客觀的要素專ら顯はる。經濟現象は人と物との相互作用に成る。人は需要の負擔者、欲望の體現、消費の主體として活動し、物は供給の代表者、欲望充足の對象生産の實現として之に呼應す。斯くてあらゆる經濟現象は、各其宗とする所を得、其研究に一定の秩序あり、體系あり、組織あるを得るなり。

元より供給も亦人の營む所にして、其働源は人の意志の中に存するや論を須たず。一定の供給を誘致する原因は、先づ心理的作用を有するものなり。然れども其の心理的作用は、勞働誘致の作用にあらず、否勞働の誘致者は寧ろ充されんとする欲望なり、應ぜられんとする需要なり。賃銀が人をして力作を肯ぜしむるは、得たる賃銀が何等かの既存又は將來の欲望を充し、消費を營ましむるを得ればなり。賃銀は人より觀れば目的にあらず、手段のみ。供給を誘致する心理的作用は勞働力作の働源たる上に存せず。然らば何に存するや。答へて曰く、企業の働源たる上に存す。人が供給の働因たりと云ふことは、生産を創め、之を掌り、之を完成する企業行動の誘致者としてのみ意味を有す。營利的資本制組織に於ては、此理甚だ顯著にして詳說を要せざれども、自足經濟組織に於ては、稍々明瞭ならざるの感あり。マ氏は卽ち此の點に於て誤謬に陷れるなり。自足經濟に於て、物の生産と云ふときは、直ちに其生産者に於て勞務力作を意味す。マ氏は之を目して勞

F. I, 35.

働と爲せるなり。是れ謬なり。假令自ら勞務力作に從事するも、供給の働因としては此勞務力作其物が問題たるにあらず、此勞務力作を創意し、立案し、計劃し、實現し、完結することが問題となるなり。此等の事業は勞働者として爲すにあらず、企業者として之を爲すものなり。即ち此場合には勞働と企業とは同一人の手に結合せらるゝものなり。現時の經濟生活に於ては、此二者は明かに分界せられあり。而して供給の働源は企業者としての人にして、勞働者としての人にあらざることは、斯學の定理敢て茲に冗論の要なし。マ氏所論の不透徹到底辯護の餘地なし。

故に曰く、供給論は終始一貫企業の立場よりす可きものなり、勞働供給增減の眼點より立論す可きものにあらず。勞働は土地資本と共に企業の手に於て結合せられ、其指導經營の下に、生産の部分的職分を盡すのみ。マ氏の如くするときは、終に全く勞働生産唯一要件論の謬見に陷るの危險あり。生産の立場より見れば、勞働は種々の要件中の一のみ、供給其物の負擔者にあらず、又代表者にもあらず（勞働其物の供給より云へば、勞働者も亦一の企業者なるとは、マルクスの論ずる所不可動眞理なり）。猶本編論歩を進むるに從ひ、此理明瞭なるを得ん。」

第一章　補　論

生産生産要素の語の沿革に就ては

Cannan, Theories of production and distribution. （前に詳掲せり）を讀む可し。

企業が供給の働源なることに就ては

Sombart, Der moderne Kapitalismus. Bd. I. 3. A. München u. Leipzig. 1919.

坂西由藏　企業論

福田德三　經濟學研究　二四一頁以下を見よ。

ジエヴォンスの說は Theory. 4. E. 1911. 一七〇頁以下にあり。就中一八三頁至一八九頁を精讀す可し。

マルクスの說（勞働の供給卽ち賣手としては勞働者も亦企業者なり）は

Das Kapital. I. 4. A. 1890.

の第四百九十七頁以下に在り。

生産論のことは何れの原論の書にも之れを論ぜざるはなし。特に生産のことを取扱ひたる書は第二編第三章補論にあげたる以外の重なるもの左の如し。

Hasbach, Güterverzehrung und Güterhervorbringung.

v. Wiese, Die Lehre von der Produktion und Produktivität. (Entwickelung der deutschen Volkswirtschaftslehre im 19. Jhdt. Teil I. III. 1903.

其他最近刊のヂールの原論第二卷（原名前に出づ）ベッシュ原論第四卷（原名前に出づ）三〇三頁以下を見る可し。

第二章　生産要素としての土地の特質（不變性）

生産要素を二なりとする學者も、三なりとする學者も、將た亦た四なりとする學者も、其一として必ず土地を算入せざるものなし。げに土地と勞働とは殆んど總ての學者が生産の第一次要素と認むる所なり。然るに『土地』なる語の內容如何の問題に就ては必ずしも定說あるにあらず。殊に『資本』と分別して『土地』なる語を用ゆるに方り、兩者の分界を何れに定む可きやは、學者間に論爭の絕へざる所にして、最近の說に於ては、土地と資本とを區別するの必要を疑ふもの少からず。曰く、土地も亦一の資本なり、不動産てふ一の財産なり、事業經營の立場より見れば、投下せられたる資本は、其が土地なると、建物なると、機械なると、原料品なるとに於て、何等の差違を有するものにあらず。此等皆一樣に一定の貨幣價値に見積られたる生産要具なり、其中獨り土地のみを離隔し、之を特殊

なる生産要素として取扱ふこと其意を得ず。唯土地は自由に所在を轉換し得可からざる不動産なることのみを特異の點とす、其他に生産要素として土地のみに特色とす可き所を見ずと。予も亦多くの點に於て此説に贊同するものなり。而も猶土地を資本と分別して、之を一の獨立なる生産要素と認めんとする舊來の通説も、亦存在の理由を有することを否む可からずと信ず。唯通説が土地の特質なりとする所予に於て服し能はず。通説が土地に固有なりと認むる特質は

土地の　一豐度　二地位は

一　自然的要件にして、人間の力によらず

二　不可壞性を有す

と云ふ點にあり。此説はリカルドの説を祖述するに外ならず。リカルドは地代を論じて曰く、

Rent is that portion of the produce of the earth which is paid to the landlord for the use of the original and indestructible powers of the soil.

* * * * * * * *

……for it is found, that the laws which regulate the progress of rent, are widely different from those which regulate the progress of profits, and seldom operate in the same direction.

In the future pages of this work, then, whenever I speak of the rent of land, I wish to be understood as speaking of that compensation, which is paid to the owner of land for the use of its original and indestructible powers. Principles. Works. p. 35.

地代とは土地の本來固有にして不可壞的なる力の使用に對して其所有者に支拂はるゝ土地の生産物の部分を云ふ

地代の進歩を支配する法則は、利潤の進歩を支配する法則とは甚だ異るものにして、同一の方向に働くこと稀なり

故に予は此書に於て土地地代と云ふときは、其固有不可壞の力の使用に對して地主に支拂はるゝ報酬のみを意味するに限らんとす云々

と。卽ちリカルドは土地の分配に於ける特質は

一　本來固有的 original

二　不可壞的　indestructible

の二に存するものゝ爲す。然るに後の學者は分配論を移して生産論ゝ爲すこゝ前章既に說く如くなれば、リカルドが斯く分配論に於て論じたる土地の特質を直ちに生産論に應用し、土地の特色は　一本來固有の力にあり、人間勞働の結果にあらず　二不可壞不可變又增減し得可からざること、他の凡ての生産物ゝ撰を異にすゝ說きて、之を一人間勞働の結果ゝして初めて發生し　二可變可壞、人力を以て增減し得る資本ゝ區別せんゝする なり。然れゞも、分配論に於て、リカルドの說の到底維持し難きが如く（後段詳述するを見よ。）生産論に於ても之を祖述する通說は、應用の道を謬れるものゝ云はざる可からず。

土地の本來固有の力ゝは何ぞや。農業に用ゐるも住地ゝして用ゐるも、現在存在する土地は皆人力の賜に待つこゝ著しきものなり。開墾耕作灌漑疏水は勿論肥料を施して地質を改良し、其缺點を補ひてこそ、土地は收穫を供するなれ。天然其儘にして使用せらるゝ土地なるもの、殆んゞ之あるを見ず。他方に於ては、疑もなく人力の結果ゝして認めらるゝ生産物にして、人力を藉るこゝ甚少きものあり。マ氏の引例せる煉瓦の如きは、土に加工するこゝ僅かにして成るものにして、之に比すれば、菜圃の如きは、遙かに多くの人力を注ぎたるものなり。故に本來固有の力云々ゝ云ふこゝ、到底實際生活の事實ゝ相應せず。市街住地の價高きは、其本來固有の力に待つこゝ甚だ僅かにして、大部分は人文の發達交通の進步の結果なり。故にセリグマン曰く

Without the dykes of Holland and the irrigation works of arid America the land would be worthless. In some garden plots on the European continent the tenant on leaving is permitted to take with him several inches of soil,—the value of the land is as much or as little a product of labor as in the case of other things. It may be contended, however, that the value of urban land at least is not a product of labor. But how about the value of a newspaper, or a banking business? As the country town becomes a prosperous city, the newspaper, like the corner plot, becomes more valuable, even though the editor works no harder than before.—Principles (1907) p. 300.

和蘭の堤防、米國の疏水設備皆之ありて始めて土地の價を生ぜしむるものにあらずや。歐洲大陸の或菜圃に於ては、借地人は其土地を返還するに方りて、上層數吋の土壤を持去るを許さる。土地の價は他の貨物ゝ同じく勞働の結果なること、是を以て知る可し。人

或は云はん、市街の住地の價丈けは少くとも人力の結果にあらずと。然れども新聞紙又は銀行業も其土地の繁昌に從ひ、其價値を增すこと、角の地面と毫も異るなきを思へ云々

ッ。

土地の不可壞力に就ても亦同じ。セリグマン曰く

It is a commonplace that the chemical ingredients of the soil need to be constantly renewed. The best agricultural land may become the worst, and the worst, the best, after a few generations of exploitation or thrift, as the case may be. p. 301.

土地の化學的性分は絶へず更新を要するものなるは人の普く知る所なり。數代に亙りて或は土地を濫耕し或は其利用に方り節約を守るによりて、最豐の地も最貧地となり、最貧地却つて最豐地となることあるものなり

と。之を資本と比較して、土地の方より不可壞的なりと云ふ能はず。又社會的事情の變遷如何によりて、經濟上に於ける土地の價値は容易に破壞せられ得可きものなり。セリグマンは此理を推して土地に不可壞的性質なるもの全く之なしと云ふ。然り　一豐度に就ても　二地位に就ても固有本來及不可壞の特性なるものは、到底之を認むるを得ず。二者共に　一人力に依りて增減せられ　二壞る可く新たに興し得可きこと、他の資本と毫も異る所なきものなり。通說が此點を以て、土地の特質とするは謬れり。

然らば土地は全然他の資本と同一種類に屬す可きものにして、土地のみに特有の性質なるものなきや如何。答へて曰く有り、大に有り。土地は他の資本と異る一大特質を具備し、從て此點より土地を經濟上に於て一の獨立なる生產要素と認めざるを得ざるものなり。其特質とは、卽ち土地は延長（Extension, Ausdehnung 又は surface, Fläche 地面と云ふ）を有するものなること是れなり。此屬性は土地に特有にして、資本に缺く所なり。土壤の物理的、化學的の力は人力を以て左右し得可きこと、他の資本と毫も異ることなし、獨り延長なる特質に至つては、天然に與定せられたる不變不動の屬性にして、人は之を如何ともする能はざるものなり。此特性あればこそ、土地は生產要素として資本と相異りて、獨立の地位を占む可きなれ。而して此特質は誠にリカルドの云へる如く本來固有にして又不可壞的のものなり。セリグマンは

But surely, it will be said, the qualities of extension or location are indestructible. Even here, however, it must be observed that the two things are not identical. The mere extension of land is indeed indestructible, but it gives no value. All land is alike in extension,—the worthless and the valuable. Location is extension plus situation, just as fertility is extension plus chemical ingredients. Location gives value to land, but location is not indestructible as an economic factor. p. 301.

人必ず答へて云はん、延長又は地位なる性質は不可壞なりと。然れども此兩者同一視す可からず。土地の延長の不可壞性を有するは誠に論者の言の如し。然れども延長のみにては、價値は生ぜず。高價の土地も價値なき土地も均しく延長を有す。土地の豐度は延長と化學的成分とより成る如く、土地の地位は延長と位置とより成る。地位は土地に價値を與ふるも其は經濟的働因として決して不可壞のものにあらず

と云ひて、延長を特質とするとに重きを置かず。予を以て見る、此論謬れり。一單に價値發生の點のみより土地の特質を論ずるは、前提に於て既に誤謬なり。二豐度は　化學的成分　より成り、地位は　延長＋位置　より成ること、氏の云ふが如くなれば、土地の延長は常に要因として働く特質なるを否定するは論理上許す可からず。蓋し土地の特質たる延長は、化學的成分と結合しては其豐度となり、地理的人文的の位置と結合しては其地位となるが如く、常に生産要素としての土地の作用を體現するものなり。豐度は一定の延長ありて始めて意味を爲し、地位も亦一定の延長が或位置に在ればこそ經濟的働因となるなれ。延長なくしては、土地の存在も作用も共に意味無きものとなる。一定の延長が或度の化學的成分を體現し、又は或位置にありて、茲に生産要素としての作用起る。此作用は常に延長によりて限定せられ、負擔せられ、保持せらる。是れ土地が他の生産要素と異る所なり。

資本の作用、勞働の效程は土地の豐度又は地位と均しく、人力を以て左右し得る可變的條件なり、而して猶之に加へて資本は其額を增減し、人口は其數を增減す。獨り土地に至りては、其延長は始終一定にして增す能はず、減ずる能はざる不變的要件なり。此不變的性質は資本になく勞働になし、之を土地の特質と目せずして何とか云はん。從來の通說此點を說く充分ならず、セリグマン一派は反對の極端に走りて、全然土地の不變的特質を

否定せんとす。予は其孰れにも與する能はざるものなり。セリグマンは僅かに

While the differences between land and other things that constitute capital are thus differences in degree rather than in kind, it remains none the less true that land may usefully be put into a separate category. This is due to the fact that an increased supply of other things in general involves a duplication of the thing itself (while the increased supply of land involves a difference in location or fertility. p. 302.

資本中土地と其他の物との差は、種類の差よりも寧ろ度合の差に過ぎざること以上説く如しと雖も、猶土地丈けは之を別類とする方適當なるは論なし。其故は、他物の増加は物其自らの増加なるに土地は然らず、地位又は豐度の變化を意味するに外ならざるに依る

と説くのみにして、延長の確定不動なるが爲めに『物自らの増加』 duplication of the thing itself 『同種倍加』 multiplication of the kind なる現象土地に付て起らざる理を説かず。豐度及地位の變動よりのみ土地供給の増減起り得ること、セ氏説く所の如しと雖も、其然る理由は、延長なる特質存するにあるを知らざれば、此現象は其眞相を究め得べきにあらず。

マーシアルは土地の特質を以て其延長にありと爲すこと、全く予が見解に同じ。今左に第二章第一節に於ける氏が所説の梗概を叙して、之を示さん。

マ氏曰く、通説は、人力によりて其要用を得る有形物を資本と名け、然らざるものを土地と稱す。然れども此區別は精確ならず。煉瓦は土に少しく加工せるものゝみ、然るに舊文明國の土地の大部分は、人の力を藉ること甚だ多く、其の現在の形態に於ては、全く人力の結果と云ふ可きものなり。然りと雖も、土地と資本とを區別するは、學理上根據ある原則に基くものなること否定す可からず。蓋し人は物質を創造する能はず、唯之を人生に有用なる形態に變ぜしめて、利用を作り出すを得るのみ。此利用は需要の増すに從ひ、其供給を増すことを得るものにして、供給價格を有す。然るに人力を以て供給を左右し能はざる利用あり。即ち自然的に一定量に於て與へらるゝのみにして、需要に應じて増加する能はず、供給價格を有せざるものあり。經濟學に於て土地と稱するは、是等の増減し能はざる利用の不變永久の淵源を總稱するものにして、必ずしも狹義の土地のみに限らず、河海日光雨風瀑等を兼ね含むものなり。リカルドが『土地の本來固有にして壞る可

からざる力』と云ひ、ブオン・チューネンが Der Boden an sich『土壤其もの』（孤立國家一、一ノ五）と名けたるは、此を指すなり。

今土地と土地の產物たる有形物と相異る點如何と云ふに、土地の根本的屬性は、其延長 extension に在り。一片の土地を使用する權利は、地球表面の一定部分に對する支配を與ふ。然るに地球の面積は確定不動なり。其一部と他の部分との幾何的關係亦確定せり。人は之を左右することを能はず、需要の增減は之に影響することなく、生產費なるもの亦なく、其生產を誘致す可き供給價格あることなし。

人は何事を營むにも、斯く限定せられたる地球表面の一定面積を使用せざる能はず。人は之により其活動の所を得、熱、光、空氣、雨の其面積に與へらるゝものを享受す。他の人、他の所に對する距離と關係とは、亦た是によりて定めらる。マ氏卽ち結論して曰く

We shall find that it is this property of "land," which, though as yet insufficient prominence has been given to it, is the ultimate cause of the distinction which all writers on economics are compelled to make between land and other things. It is the foundation of much that is most interesting and most difficult in economic science.

土地の此の特質（延長を云ふ）は從來餘り重きを置かれざりしも、不知不識の間に學者が土地と他の物との間に施す可く餘儀なくせられたる區別の最終原因なるを知る可し。而して經濟學に於て最も興味あり、而も最も困難なる問題の根蔕茲に在り

と。蓋し至言と云ふ可し。

ブレンタノ先生亦マ氏と粗同樣の論を主張す。唯先生は、土地の特質は其獨占的性質を有する點にありとし、獨占的性質は　一地面 Fläche　二地位 Lage の二に於て存在すと說くこと左の如し。

Als Produktionselement trägt der Boden einen doppelten ökonomischen Charakter.

Er ist einmal ein Produktionselement monopolistischer Art; d. h. er ist nur in beschränkter Menge vorhanden. Diese Menge kann durch menschliche Thätigkeit gar nicht oder nur unerheblich vermehrt werden.

Er hat zweitens aber auch Eigenschaften, welche durch menschliche Thätigkeit produziert werden

F. I, 36.

können.

生産要素として土地は二様の性質を有す。

一　土地は獨占的生産要素なり。換言すれば土地の存する量は有限なり。此量は人の力により全く増すを得ざるか、又は極めて僅かに増し得るのみ。

二　土地は人力によりて生産せられ得可き性質を有す云々

而して、

Der Boden ist ein Monopol in doppelter Hinsicht—als Fläche und nach seiner Lage.

土地は二の點に於て獨占たり。一地面として　二其地位によりて是なり

と云へり。（以上 Agrarpolitik. Stuttgart. 1897. S. 5 に在り）

一の地面と云ふは予が延長と云ひ、マ氏が extension と云ふものに該當し、ブ氏の說く所全く予の服從する所なり。之に反し　二の地位を以て獨占的なりとする師の所論予は從ひ難し。其說に曰く、

Allein nicht jede Fläche, nicht jedes Stück Erde ist in gleichem Masse geeignet, sowohl die Nutzbarmachung der menschlichen Arbeitskraft als auch die Ausnützung der genannten freien Naturgaben zu ermöglichen. Das Mass, in dem die eine wie die andere möglich ist, hängt ab von der geographischen Lage des einzelnen Flächenstücks. S. 6.

然れども唯地面あり、一片の土地ありとて、其は人力及所謂自由なる天然の賜を利用するに均しく適せるものにあらず、其適否の度は各地面の地理的地位によりて定るものなり

而して此地位は　一氣候の關係　二經濟上の關係の二に於て土地の生産効程に重大の關係ありとし結論を下して曰く

Also: der Boden ist ein monopolistisches Produktionsinstrument, einmal insofern er als Flächenstück nur in begrenzter Menge vorhanden ist, und zweitens insofern die geographische Lage des Bodens die Zahl der vorhandenen Flächenstücke, die technisch und wirtschaftlich nutzbar gemacht werden können noch bedeutend verringert. S. 8.

卽ち土地は二様の意に於て獨占的生産要具たり、一土地の面積は有限量に於てのみ存在すること　二土地の地理的地位は技術上經濟上生産用に供せられ得可き土地の數を

更に著しく減少することを是なり

と。然るに地位とはセリグマンの言ふ如く、畢竟するに延長と位置との相合して成るものにして、延長と相對立するものにあらず。豐度と同じく第二次的要件たるものにして、所謂本來固有のものにあらず、又不可壞のものにもあらず。一氣候の關係は地味の豐否と同じく土地に存するとは云へ、其利用は、人の力を以て左右し得る所なり。否人は氣候に順應して、其與へられたる氣候に於て、其力を發揮することを勉む、氣候の影響を受くる人は、選擇の自由を有することと、土地面積選擇の自由を有するに均し。二經濟上の關係に至つては、全然人間的社會的產物にして、本來固有のものにあらず、又不可壞のものにあらざることセリグマンの言の如し、之を以て土地のみに特有なる性質と爲す可き理は之を知るに苦まざるを得ず。所詮獨占的なるものは延長のみ。此延長と結合するものは、皆獨占せらる。土壤の化學的成分は延長と結合して獨占せられたる豐度となり、位置は延長と結合して獨占せられたる地位となるなり。氣候は獨占するを得ず、吾人は一定の氣候を有する土地の面積を獨占し得るのみ。土壤の成分其ものが獨占性を有せざるが如く、地理的位置も亦其自らに於ては、何等の獨占性を帶ぶることなし。ブレンタノ先生が地位を獨占的なりと云へるは、延長ありて始めて獨占せらるゝものなる事實を度外に置くの嫌あり。蓋し師は通說が豐度と地位とを土地の特質なりと說くに影響せられたるものなる可し。師既に獨占的性質と云ふ以上獨占の內容を充たすに舊說の特質を以てするの不可なるを思はざる可からず。予は此點に於て師說に背くの不得已を信ずるものなり。

第二章　補　論

參考書

Brentano, Theoretische Einleitung in die Agrarpolitik. (Agrarpolitik. I. Theil). Stuttgart 1897. SS. 3—14.

von Thünen, Der isolirte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie. 3. Aufl. heausgegeben von Schumacher-Zerchlin. III. Theil Berlin 1875.

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

歷史派の學者は、ブレンタノ先生を除くの外、本章論ずる問題に重きを置かず、殊にシュモラーの如きは、經濟地理的雜話を詳說し乍ら、一向此點に及ばず、予の同じ難き所なり。マ氏及ブ氏が純理を重ずる用意後進の範たる可きものなり。

唯ブレンタノ先生が獨占的てふ意を存在量有限と同義なりとするは、聊か當を得ず。有限なるもの必ずしも獨占せられず、否經濟上にて云ふ生產要具は皆有限なり、土地のみ獨り有限なるにあらず。コーンは克く此意を明かにし、一方に於て、土地が有限なるが如く、他方に於ては勞働も亦極めて有限なることを詳論せり。曰く

Beschränkt gegeben im Vergleiche zu unserm Bedarf—ist aber nicht nur ein Stück der äusseren Natur: diese ist blos das eine Element, in welchem das Wirtschaftliche sich entfaltet. Das andere Element ruht in dem Menschen selber; es ist der, psychologisch zu würdigende, Trieb zur Thätigkeit, welcher, in den anstrengenden Dienst eines vernünftigen Zweckes gespannt, „Arbeit" heisst.

——Cohn, Grundlegung der Nationalökonomie. Stuttgart. 1885. S. 192.

吾人の欲望に比較して有限に與へらるゝものは外界天然の一片たる土地のみにあらず、此は經濟的（卽ち有限性）てふ現象の顯はるゝ一要素のみ。第二の要素は人自らにあり、卽ち心理的に測らる可き行動の衝動にして、一の合理的目的を達する爲めに發動するとき勞働と稱せらるゝもの是なり（經濟原論百九十二頁）

と。予は、有限性を以て直ちに『經濟』の特色とする論を採らざること前に述べたる如くなれども、有限と云ふ以上は、土地のみ獨り然るにあらず、勞働亦然るものなる理を主張するに於て、コーンと全く同說なり。ブ師が之を以て土地の特質を言表はさんとすることの不可なる此を以ても知る可し。況んや師の云ふ意味にては、勞働力も亦勞働者毎に其爲に獨占せらるゝと云はざる可からざるに於てをや。近年に至りリーフマンは、其の鋭き論法を以て、有限性の最も著しきは物質財に非ず、却つて勞働なることを痛論し、亦た予が本書に於て主張したると同じく、有限性を以て經濟の特色とする論を駁擊して餘蘊を

殘さず。予は氏が予の本書に後る事數年にして同一の說を斯くも有力に主張するを見て甚だ會心に堪へざるものなり。同氏原論第一卷第三編以下を見よ。

之を要するに　一有限と無限　二獨占と非獨占、共に土地の特質を示すに足らず、一と二とを同義とするは混雜を增すのみ。土地の特質は唯一延長に在り、此特質こそ土地のみにありて他の要素になきものなり。其他の論辯は多く正鵠を失せり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

マ氏の第二章を二分し、其前半を本章とし、後半は第三章に讓れり。議論の內容正に斯くある可しと信ずるに依る。

第三章　土地の豐度（可變性）

土地は其特質として固有不變の延長性を有すること前章に說きたり。然れども唯延長ありと云ふのみにては生産は起らず、之に加ふるに可變の性質あるを要す。土地が生産要具として有する此可變の性質を總稱して其『豐度』fertility と云ふ。蓋し生産要具としての土地の用は種々ありと雖も、之を耕耘して收穫を收むる農業の用其重要なる者なるが故に、專ら農業に就て用らるゝ豐度なる語を以て汎稱とするに至れるなり。豐度は延長に體現せらる、延長を離れて豐度を論ずること能はず。故に豐度の力を得て農業收穫を得んとする者は、必ず先づ一定の延長を有する土地（卽ち一定の土地面積）を占有するを要す。

土地の豐度は二要素より成る

一　土地の物理的性質

二　土地の化學的性質

是なり。今マーシアルは此二項を說くこと左の如し。

一　物理的性質の重なるもの

(a)　土壤は植物の根を自由に發育せしむる可き程度に於て柔軟ならざる可から

ざること共に、而もまた植物の根を支持するに足る程度に於て緊固なるを要す。

(b) 水の流通自由に過ぐること砂地の如くなる可からず、乾濕過不及しては共に植物を成育する能はず。

(c) 其反對に水の流通困難なること粘土の如くなる可からず、水と空氣の絶へざる供給は植物の成長に缺く可からず。蓋し水及空氣の供給ありて、土中に存する無用有害の鑛物及瓦斯も猶ほ能く植物の養料となるを得るものなり。

新鮮なる空氣、雨霜の作用は、自然的耕耘の用を爲すものにして、人力の加はるなくとも、此の天然の作用のみにて、相應の豐度を保つもの、なり。但し雨又は急流によりて土壤の流さるゝことなく、一度形成せられたる場所に其の土壤の止るを要す。此點より見るときは、土地の物理的性質は天然的の一與件にして人力の成果たらざるものなり。然り、然りと雖も實際に於ては、此の天然的なる物理的性質も農耕の用に供せらるゝには、人力の助を缺く能はず。即ち人は土地を耕耘して土壤が植物の根を緩に而も確と保つを得せしめ、空氣及水の流通を自由ならしめて、此等天然の作用を促進し、補助するを要す。肥料を施すも單に化學的成分を變化せん爲めのみにあらず。土壤の物理的調理亦其の目的とする所なり。例へば粘土は之れを細分してより輕くより寛かならしめ、砂土は之れを緊固ならしめて、植物の根を保持するの力を得せしむる等、何れも肥料の力に待つ所多きものなり。

二　化學的性質とは植物の根が吸收し得可き態に於ける無機物を保有するを云ふ。此化學的性質は人力を以て變化し得ること甚だ大にして、人が其働きにより土地の豐度を增すことを得るは主として此點に在り。一定の土壤中に不足する或化學的成分を加ふるにより、其豐度を著しく增加するを得る場合稀ならず。殊に種々の態に於ける石灰、近世化學の產物たる諸種の化學的人造肥料は此目的に向て用らる。

* * * * * * *

以上の物理的及化學的性質は、人力によりて增減せらるゝ可變的のものにして、此意に於ける土地の豐度は殆んど全く人間勞働の結果と云ふ可し。人は適當の勞力を土地に加ふるによりて著しく其物理的幷に化學的性質を變化し、瘦土を化して膏腴の地となす

を得、土壤を改造して、從來其地に適せざりし種物を繁殖せしむるを得、又輪栽法によりて地力を維持し幷に之を增進せしむるを得、疏水を行ひ、其地に不足する化學的成分を加ふるによりて、土壤の性質を全然變ぜしむるを得るなり。而して此等の方法は過去に於ては未だ十分に行はれたりと云ふ可からず、發達の餘地未だ甚多し。近き將來に於て蒸汽力と機械とを應用する大仕掛の土壤改良法の行はれんこと期して待つ可きなり。然れども今日に於ても既に舊文明國の土壤は大部分人間生産の成果なり。土地の上層は殆んど皆人間勞働の産物にして、此意味に於て、純然たる資本の性質を具備するなり。リカルドが謂へる固有本來にして不可壞の力を有する天然の自由なる賜は、孰れも人力によりて著しく變造せられたるものならざるはなし。故に曰く、今日現在の（少くとも舊文明國に於ける）土地に就ては、土地の豐度は延長てふ不變性に附加せられたる可變性にして人力の結果なりと。

然るに土地が生産の用を爲すには、豐度と相幷んで猶一の不可缺要件あり。氣候の關係是なり。土地の一定の延長は、其上に天然の與ふる熱、光、空氣、雨等を享くることなければ、動植物の生命を維持することを能はず。此の氣候的關係は大體に於て人力を以て左右し能はざる不變條件なり。ブ師曰く、

Allerdings kann der Mensch in gewissem Masse auch die klimatischen Verhältnisse beeinflussen: durch Anbau oder Abholzen der Wälder, durch Entwässerung und Bewässerung. Aber auch in dieser Beziehung ist das, was er zu leisten vermag, gering im Vergleich zu den durch die Natur geschaffenen klimatischen Grundbedingungen, wie sie die geographische Lage mit sich bringt. Von den klimatischen Verhältnissen aber hängt es ab, in welchem Masse Wärme, Licht, Luft und Fruchtbarkeit auf einem einzelnen Flächenstück zur Verfügung stehen, und davon hängt es ab, ob und was auf einem Flächenstück produziert werden kann……Agrarpolitik. S. 6.

……Diese klimatischen Eigenschaften sind ebenso, wie die Ausdehnung und Tragfähigkeit inhärente Eigenschaften der einzelnen Flächenstücke. Der Mensch kann nur wenig daran ändern. Agrarpolitik. S. 7.

尤も人間は或程度までは、森林を新に造り又は既存林を伐採するにより、疏水により、灌漑によりて氣候的關係を左右し得可し。然れども此點に於ても人間の成し得る所は、地理

上の位置に於て天然が與定せる氣候上の根本條件に比するときは、甚だ微々たる者なり。而して斯く專ら天然によりて定められたる氣候的關係は、また一定の面積が享くる所の溫度・光・空氣・及豐度を定め、而し、亦此によりて其一定の土地に栽培す可き種物の種類定めらるゝなり『農政學』第六頁

故に土地の氣候的性質は延長及び負擔能力と共に一定の土地に固着本來の性と云ふ可く、人の之を變じ得ること誠に僅なるものなり。『農政學』第七頁

マ氏も亦曰く、

Every acre has given to in by nature an annual income of heat and light, of air and moisture; and over these man has but little control. He may indeed alter the climate a little by extensive drainage works. or by planting forests, or cutting them down. But, on the whole, the action of the sun and the wind and the rain are an annuity fixed by nature for each plot of land. Ownership of the land gives possession of this annuity: and it also gives the space required for the life and action of vegetables and animals; the value of this space being much affected by its geographical position. 8.E. p. 147

土地の一定面積は必ず天然が之に賦與する熱・光・空氣及濕度の一定量の年分所得を有す。人は之に對して殆んど何等の力を及ぼすこと能はず。尤も人は大仕掛の疏水又は森林の造植若くは伐採によりて、少しくは氣候に變化を起さしむるを得ざるにはあらざるも、大體に就て之を見るときは、太陽・風及雨の作用は、一定地面に對し天然が定めて與ふる一定の年分所得なりと云はざる可からず。土地を所有するものは、同時に此年分所得を享有するを得ること、動植物の生活及行動に要する空間に同じ。而して此空間の價値は其地理的地位に依る年分所得の多少によりて大に左右せらるゝものなり。

誠に然り、土地の氣候的關係は、人力を以てしては殆んど如何ともする能はざる不變的條件なり。此點より見てブレンタノ、マーシアル兩氏が氣候は土地に特殊なる不變性なりと云ふは、不當の論にあらず。然り、然りと雖も、此不變的條件は、延長の如く土地其ものに固有本來の性質にはあらず。唯一定の延長を有する土地が受動的に享受する天然的條件たるのみ。之を延長と同一視して、土地本來固有の特性と云ふは非なり。ブレンタノ師の言此點に於て當を得ず。マ氏の如く一定の面積卽ち延長の土地を有するもの

が、必然的に享受する外來的所得なりと云ふこと遙かに眞相を得たり。氣候は不變的の天然條件なりと云ふは、土地其ものゝ不變性の意にあらず。此點に於て氣候は亦豐度と也異る。豐度は土地其ものゝ收穫力を意味す。氣候は直ちに土地其ものゝ力にあらず。之を譬へて言はゞ、猶海岸に別莊地を買ふものが海上の眺望を享受するを得るが如し。海上の眺望は、其別莊地の性質にあらず、唯之を享受し得る機會が其一片の土地に對して附與せらるゝのみ。兩者決して混同す可からず。マーシアルの此點に關する所論は包括的に過ぎて、此區別を沒するの嫌なきにあらず。曰く、

We may then continue to use the ordinary distinction between the original or inherent properties, which the land derives from nature, and the artificial properties which it owes to human action; provided we remember that the first include the space-relations of the plot in question, and the annuity that nature has given it of sun-light and air and rain; and that in many cases these are the chief of the inherent properties of the soil. It is chiefly from them that the ownership of agricultural land derives its peculiar significance, and the Theory of Rent its special character. 8. E. p. 147.

故に吾人は土地の性を天然より享受する本來固有の性と、人力を以て得たる人爲の性とに分つ通説を襲踏して差支なかる可し。唯だ前者の中には、土地の面積關係（卽ち地理的の地位を云ふ）と、天然の與ふる日光・空氣・雨の年分所得とを含むものにして、土地固有本來の性と普通に云ふときは、專ら此を意味するものなるを記憶するを要す。農業用の土地の所有が特殊の意義を有し、從つて又地代に關する學理が特別の性質を具ふるは、主として此等年分所得存するに依る。

と。此論服し難し。

土地の所有が他物の所有と異る特殊の性質を具へ、從て地代が他の種類の所得と異る原則を有するは直接に此の『年分所得』存在の結果と認む可からず。一定の延長を所有するてふ事實こそ特殊の性質を附與するなり、年分所得は此延長と關連して土地所有者が享受するものゝみ。延長の所有と云ふことの內容は此年分所得にあること、正にマ氏の言ふ如くなれども年分所得其ものが直ちに土地の所有に特殊の意義を附するにはあらず。年分所得は延長に體現せられ、之に內容を與ふるものにして、從て間接には、土地

F. I, 37.

所有に特殊の原則を生ぜしむるものなりと雖も、直接には延長の所有の作用あるのみ。故に年分所得を享受するてふ事實を目して直ちに土地の不變性と云ふは事實に反し又た論理に合はざるものなり。

マ氏が最終節に論ずる問題は此の不變性と可變性、換言すれば、天然の力と人間の力との厚薄大小是なり。曰く、土地の豐度の天然の力によると、人間の力によるとの多少は、必ずしも一樣ならずして、植物の種類によりて異るものなり。或種の植物は人力によりて著しく收穫高を增すを得或ものは人力が收穫高を左右する餘地甚だ尠し。後者の適例は森林の樹木の如き是なり。樫は一度適當に栽培し、十分の空間を與ふるときは、其以上人力を加ふ可き餘地殆んど無く、自然に成長するを待つ可きのみ。土質豐沃にして、疏水宜しきを得たる河床に生長する草の如き、また人力に待つことなくして繁茂す。永久的牧地は之に比すれば豐沃ならざるも亦た人力を藉ることは甚だ少し。然るに耕地に至りては、天然の力に一任することは能はず、人力を要すること大なり。即ち種物の性質に應じて地床を準備し、種を播き、雜草を除くに多大の勞力を要す。就中人力を要する最も多きものは、菓實花卉及種改良用の動植物是なり。人は自己の用に最も適する種を撰みて培養し、發達せしむ。天然に任すときは、天然は其自らに最も適せる種を生存し、發展せしむるも、其は人間の用に對しては必ずしも最適種にあらざること多し。故に人は此間に干渉して、自己の用に供して最も適せる種を育てざる可からず。斯くて人の用に供して最も肝要なる現存の動植物の種類は、殆んど皆人間粒々辛苦の結果として得たるものにして、天然其儘のものは一も存することなし。

土地の豐度に就て、天然の働と人間の力との厚薄多少の差ある斯くの如しと雖も、其何れの場合に於ても、人間は、其働を土地に加ふること無限無終なるものにあらず。其働きを加ふるによりて得る增收彼が勞と資とを償ふに足らざるに至れば、其働を停止して、全然天然の力に一任するに至る。是を稱して收穫遞減の作用と云ふ。請ふ章を改めて之を論ぜん。

第三章　補論

本章參考書

Roscher, System der Volkswirtschaft. I. S, 35.

v. d. Goltz, Handbuch der gesamtem Landwirtschaft. Tübingen 1889. II. S. 3.

Pesch, Lehrbuch der Nationalökonomie. IV. Bd. 1 u. 2. Aufl. 1922. SS. 441.

Schmoller, Grundriss. 11-12 Tausend. 1919. SS. 127 ff.

此書には詳細の參考書目掲げあり、就て看る可し。

*　*　*　*　*　*　*

本章はマ氏原論第二章の二・三・四節に該當す、之を前章と分割せるは、内容の性質上必要と認めたるに依れり。

第四章　收穫遞減の法則

土地の豐度は人力を以て增加し得可き可變條件なること、前章粗々之を明にせり。然るに茲に續て考ふ可きは、此增加も亦無限なる能はず、或程度以上に及ぶときは、人力を加ふる愈々多くして、增加の量愈々減ずるの理是なり。之を收穫遞減の法則と名く。マーシァルは此法則の要旨なりとして曰く

An increase in the capital and labour applied in the cultivation of land causes in *general* a less than proportionate increase in the amount of produce raised, unless it happens to coincide with an improvement in the arts of agriculture.

土地の耕作に用らるゝ資本及勞働の增加は、農業技術の進歩之に伴ふにあらざる限り大體に於て比例以下の生産額增加を惹起す

こと。換言すれば土地に加ふる資本及勞働を增すも、其增したる割合丈けの增收は起らず、總量に於ての增收は、比例の上に於ては却て減收となる傾向を指して土地收穫遞減の傾向と云ふなり。但し此傾向は或程度までは、却て反對の傾向の爲めに打消さるゝことあり、反對の傾向とは收穫遞減に對して『收穫遞增の傾向』と名く可きものにして、土地に加ふる人力の高多きに從ひ、收穫は總量の上に於てのみならず、比例の上に於ても增加するを云ふ。新たに土地を開墾するとき、若しくは粗放耕作より集中耕作に移るときの如きは、一反歩に加ふる資本勞働の量を增すにより、著しく收穫を增すは、收穫遞增の傾向の作用なり。然れども收穫の遞增は或點に至りては必ず停止し、終には反對に收穫遞減の傾向顯はれ來るは、土地に於て免る可からざる現象なり。蓋し地力に限度あり、人力を加ふること如何に多くとも此限度以上の收穫は土地之を生ずるの力なし。故に資本・勞働の增加を絶へず繼續し行くときは、晩かれ早かれ、何時か一度は必ず遞減傾向の働き來るを免かるゝ能はざるものなり。經濟學の通說に於て、此理を說明せんとして、一エーカーの土地を以て英國の全人口を養ふ能はざるは、收穫遞減の働きあるに依ると說くは、此意味を强めんと欲するに過ぎずと雖も、斯く云ふときは、一臺の織機を以て英國民全體の一ヶ年の衣服を織り出す能はざるも、一人の勞働者にて之を縫ひ終り能はざるも、亦た共に收穫遞減の働きに依ると云はざる可からず。斯くの如きは到底無用の冗辯たるを免れず、マーシャルは稍々其嫌ある說明を試みたり。曰く

Were it not for this tendency every farmer could save nearly the whole of his rent by giving up all but a small piece of his land, and bestowing all his capital and labour on that. If all the capital and labour which he would in that case apply to it, gave as good a return in proportion as that which he now applies to it, he would get from that plot as large a produce as he now gets from his whole farm; and he would make a net gain of all his rent save that of the little plot that he retained.

此收穫遞減の傾向だになかりせば、凡の農夫は極小面積の土地を耕し、之に其資本と勞働の全部を傾注することゝし、其餘の土地は之を地主に還附す可ければ、從來支拂ひ來れる地代の殆んど全部を節約するを得可きなり。此場合に於て彼が用ゆる資本・勞働が現在

用ゆる場合と同一比例の收穫を生ずるものとせば、其極少面積より得る收穫高は、現在の耕作面積全部より得る高と同一なる可く、從つて農夫は其極少面積地の地代以外の地代全部を純益として收得するを得む

と。然れども斯く言ふときは、土地のみ然るにあらず、資本に就ても勞働に就ても、吾人は同一言を繰返して例へば

『收穫遞減の傾向だになかりせば、凡ての工場主は極少數の機械のみを使用し、之に原料と勞働との全部を傾注することゝし、其餘の機械は之を賣却す可ければ、從來機械に投下したる資本の利子の殆んど全部を節約するを得可きなり。此場合に於て彼が用ゆる資本、勞働が現在用ゆる場合と同一比例の生産高を見るものとせば、其極少數の機械より得る生産高は、現在使用機械總數より得る高と同一なる可く、從て工場主は、其極少數の機械に對する利子以外の機械投下資本の利子全部を純益として收得するを得む』

と云ひ、又は

『收穫遞減の傾向だになかりせば、凡ての雇主は極少人數の勞働者のみを使役し、其餘の勞働者は之を解雇す可ければ、從來支拂ひたる勞銀の殆んど全部を節約するを得可きなり。此場合に於て彼が使役する勞働の生産高が現在の生産高と同一比例を有するものとせば、其極少人數の勞働者の生産效程は、現在の多人數の效程と同一なる可く、從て雇主は、其極少人數の勞働者に對する勞銀以外の勞銀全部を純益として收得するを得む』

とも云ひ得可き筈なり。而して近時の學者中間々斯くの如き邊まで收穫遞減の法則を擴張せんと欲するものなきにあらず。セリグマンの如き是なり。曰く

The law of diminishing returns is indeed the foundation of the law of rent……In every case he will reach the extensive or intensive margin of the utilization of land. This, however, is not peculiar to the landowner. The capitalist will also reach a point where it will not pay him to buy more machines of a certan kind, or to build another factory devoted to some particular product; and the laborer will reach the point where he cannot profitably work any longer. The law of diminishing re-

turns is universal, and applies to everything that possesses value. If it explains the rent of land, it will equally explain, as we shall see, the interest of capital and the wages of labor.——Principles. §160. 4. Ed. 1909. p. 373.

收穫遞減の法則は疑もなく地代の法則の根柢なり。……何れの場合に於ても彼（地主）は、土地利用の外延的又は内延的限界に到達す可し。然れども此は地主のみに特有なる事柄にあらず。資本家も亦或一種の機械をより多く買ひ若くは或特定の生産品に限られたる工場を増設するに、收支相償はざるを見る點に到達す可し。勞働者も又より多くの機臺を引受くるに不利なる點に達す可し。されば收穫遞減の法則は一般的にして、苟くも價値を有する總てのものに行はる。從つて此法則が土地の地代を説明する以上、亦之と同じく資本の利子及勞働の賃銀をも説明するを得可きものにして、後段之を立證せんと欲す

而して氏は利子及勞銀にも收穫遞減の法則を適用して説明を試みたり。氏に於ては誠に論理一貫するものにして敬服す可き所なり。予も亦嘗てセ氏の著未だ世に出でざる前同樣の考を抱きて、立論したることあり。近くは地代餘剰論に就て、此論法を用ゐて、通説の基礎に一擊を加へんと欲したることあり。

國家學會雜誌二百五十四號「地代は餘剰なりや」今は、續經濟學研究二二―三〇頁に全文を收錄す）

今參考の爲め右論文の末項一節を左に摘記す。

「然らば卽ちリカルドの地代論は破れたるか。曰く未だし。

リカルドが地代のみを以て餘剰なりとしたるに猶一の場合あり。同一地にても耕作の進歩に伴ひ亦餘剰を生ず、此餘剰は卽ち地代なりと説く是れなり。曰く人口增加し未耕地なきに至れば、更らに既耕地に就て穀物の增穫を圖らざる可からず。然るに一定の限度までは、其增穫は增費（資本及勞働の）と比例を維持す可しと雖も、其以上は遞次に其比例を減ず可し。是を收穫遞減の法則と云ふ。收穫遞減の法則は言ひ換れば、生産費遞增の法則なり。生産費遞增とは最高の生産費と稱するものゝ遞增することを言ふなり。（凡ての生産費の遞增にあらず）最高生産費高まれば、此の點に於て定めらるゝ穀價は亦た騰貴す。穀價高まれば最劣等地以外の他の土地の收益之に應じて增加す（收穫は異ならざるも之れを貨幣に換へたる額多きが故）。此の增收益は又た競爭の結果として、他

に事情なき限り、皆土地の所有者卽ち地主の有に歸す。卽ち此場合に於ても地代は亦た餘剩なりと。

然れども同じ前提の下には、勞銀も・利子も・利潤も亦た皆同じく餘剩なり。故に殘る問題は收穫遞減の法則は土地のみに行はれ資本・勞働・企業に及ばざるや否や是れのみ。而して近來の通說は、收穫遞減の法則は、土地のみに行はるゝものにあらずして、與へられたる條件の下には、普く、行はるゝものなるを主張するに於て一致す。而して又收穫遞增の法則なるものも一般に存すと認めらる。土地の收穫はリカルド以後今日まで大體に於ては減少せずして、却て著しく增加したることは誰人も否定するを得ざる現成の事實なり。然らば地代のみが餘剩なりとの主張は、到底之れを維持す可からざるを知る。』

マ氏も亦云ふ

If a manufacturer has, say, three planing machines, there is a certain amount of work which he can get out of them easily. If he wants to get more work from them he must laboriously economize every minute of their time during the ordinary hours, and perhaps work overtime. Thus after they are once well employed, every successive application of effort to them brings him a diminishing return. At last the net return is so small that he finds it cheaper to buy a fourth machine than to force so much work out of his old machines: just as a farmer who has already cultivated his land highly finds it cheaper to take in more land than to force more produce from his present land. Indeed there are points of view from which the income derived from machinery partakes of the nature of rent: as will be shown in Book V. 8. E. p. 168

例へば一製造家が三臺の機械を以て生産に從事する場合に、其生産高を增加せんには勉めて時間を節約し又之を延長す可し。斯くて力を加ふること愈々多きに從ひ、生産の增加は遞減す可く、終には其增加甚少くして、其以上の力を三臺に加ふるより、更らに一臺の機械を增設するを利とす可き點に達すること、農夫が一定の土地に更らに資本勞働を增し加ふるよりは、新たに耕地を附け加ふるを利とする點の至ると其理同一なるを見ん。されば此意味に於て、機械より生ずる所得は、地代の性質を具備すと認むるを得可きなり。

此點は後段第五編に於て詳論す可し

マーシアルの立場は明確を缺くもの多し。氏は唯專ら土地のみに就て、收穫遞減を論ずるに右に揭げたる如き大體論を敢てす。予は之に與する能はず。マ氏の不統一は之れに止まらず。氏は既に需要論に於て『利用遞減の法則』を論述したること、予の示めし

たる所なり。然るに『利用遞減の法則』は畢竟する所、收穫遞減の法則の變態に外ならず。否收穫遞減の法則の働きは『限界利用均等の法則』を根據とするものなることは、マ氏も之を認むるものゝ如し、

氏云ふ、

But if he has made his calculation rightly, he is using just so much ground as will give him the highest return, and he would lose by concentrating his capital and labour on a smaller area.

之に反し彼（農夫）が計算を謬らざるときには、彼は最高の收穫を與ふ可き丈けの土地を耕しつゝある可きなり。されば此場合にはより小なる面積に其資本と勞働とを集中するにより却て損を招く可きなり

『最高の收穫を與ふ可き丈けの土地』とは、『最大の限界利用を有する土地』と同意義なり。農夫は常に其耕す土地に最大の限界利用を求むればこそ、收穫遞減の法則に觸るゝなり。所謂耕作の限界 margin of cultivation（後段を看よ）とは、土地利用の限界を言ふものに外ならず。耕作の限界は農夫に取りての均等的限界利用點なり。利用に遞減なければ、限界利用なるものなきが如く、土地收穫に遞減なければ耕作の限界なるものあることなし。然れば收穫遞減の法則とは、利用遞減の法則の土地に適用せられたるものに外ならざることゝ一點の疑を容るゝ餘地なきを知らん。マーシァルは一面近時の學說たる利用遞減論を採り乍ら、他面には、リカルド一流の傳說を擁護せんとの矛盾的態度を取る結果、如斯透徹せざる論述を爲すの已むなきに至れるものにして、氏の根本的の病予が繰返して遺憾とする所なり（但し氏は後段產業組織論に於て收穫遞減・遞增の兩法則を再論す）。

遞莫近時の新說たる『利用遞減』論は『收穫遞減』論の換骨奪胎のみ。後者は源にして、前者は流れなり。マ氏が重きを源に置き、流を輕く見るは、學說發展の行程に於ては決して不當の處置にあらず。何故一般的原則としての利用遞減の法則が公認の學理となることゝ斯くの如く晩く、却て特殊的應用の一場合たる收穫遞減の法則の早く認められたりや。此問に答ふること容易なり。凡そ社會の複雜なる現象を研究の對象とする學問、其中にても殊に經濟學に於ては眞理は先づ部分の具象的事物に就て見出され、一般的總括現象に就ての定理となること遙かに後るゝを常とするものなり。土地殊に其農耕

的使用の上に於ける利用（收穫）遞減の現象は、最も顯著なる實際上の具象的現象にして、苟くも少しく心を農事に用ゆるものは、之に着眼せざる能はず。マ氏自ら云ふ

……the fundamental idea, which it (law of diminishing return) expresses, has been the common property of every one who has had experience of agriculture whether arable or pastoral, since the world began. What economists did for the law a century ago, was not to discover it; but to give it definiteness, and to deduce inferences from it. — Note on the law of diminishing return. 5. E. p. 170.

收穫遞減の法則の言表はす根本的思想は、世界の始より耕作にせよ、牧畜にせよ、農業に從事したるものゝ普く知悉せる所にして、一世紀前の經濟學者が此法則に關して爲したることは始めて此法則を發見したるにあらず、唯之を精確に言明し、又之より推論を下したる事にありと。誠に然り。農夫が日常の經驗に於て知悉せるもの、チュルゴー、アンダーソン、ウエスト、マルサスを經てリカルドに至りて『收穫遞減の法則』となれるなり。而して利用遞減の傾向の中、今日に於ても猶土地收穫遞減の傾向は人の注意を惹くこと著し。是れ經濟學に於て土地に就て此法則を說くに重きを置く所以にして、其は必ずしも失當と云ふ可きにあらず。

然り而して收穫遞減の法則が十九世紀の初に於て英國學者によりて學問上の公理として建設せられ、爾後各國の學者の祖述する所となりしには、特に學者の注意を要する事情ありて存せり。其は他にあらず、收穫遞減の法則の理論は、十九世紀の初葉に於ける英國の實際上の國情に胚胎して起り、殊に彼の有名なる『人口過剩の問題』と相關連して、經濟學の範圍に入り來れるものにして、單獨に一の純理論として忽如唱道せられたるものにあらざること是なり。此事情を念頭に置かざれば、收穫遞減の理論は興味索然たるものとなる可し。キアナン曰く

If we knew nothing of the previous history of the question we should be at a loss to conceive why Mill should be at the trouble of developing a law which

(1) does not come into operation at a very early date in the history of society:

F. I, 38.

(2) is liable to temporary supersessions; and

(3) has been made head against by an antagonizing principle, namely, the progress of civilisation, throughout the whole known history of England. — Cannan, Theories of production and distribution. 2. E. p. 177.

収穫遞減の法則は

一　社會の歴史の初期に於ては行はるゝことなく

二　（行はれて後も猶ほ）屢々中斷せらるゝことあり

三　英國歴史の全期を通じて其反對の原則卽ち文明の進歩によりて對抗せらるゝものにして（之を一般の學理とする價値なきものなるに）ミル（の如き學者）が其論述に力を惜まず腐心するは、此問題の以前よりの沿革を知らざれば、誠に解し難き所なる可し

と。予は此言を移して更らにミル以後の諸學者就中マーシアルに適用せんと欲す。經濟學正統派の擁護者にして、殊に英國の學者たるマーシアルが收穫遞減の法則に甚しく重きを置きて利用遞減の法則を忘れたるが如き態度を取ること、此問題の歴史、殊に英國に於ける發生當時の事情を知るものは、其解釋に苦まざる可し。然らざれば、マ氏の立場は、餘りに守舊的、餘りに學究的にして、其眞意の存する所を察し難からんなり。今以上の用意を以て以下マ氏の說く所を聽かん。

* * * * * * *

收穫遞減の傾向は、合理的に農業を營む總ての農夫の必ず認めざるを得ざる所なれども、人間に免れざる虛榮心の爲め耕作地面の廣きを誇らんとして、其力に及ぶ以上の面積を耕作する農夫少しとせず。アーサー・ヤング以後農學者が常に此弊を指摘して、農家を警めつゝあるを以て知る可し。耕作面積を狹くせよと警告するは、必ずしも之によりて總收穫高の增すが爲めにあらず。土地を狹くするによりて得る地代の節約が多少の減收を償ひて餘あるとき、卽ち純益高の增す可きときは、面積を減ぜよと云ふなり。例へば

一　收穫高の四分の一を地代として支拂ふ場合に於て

二　面積を減ずるにより一エーカーに付從前の收穫高の四分の三以上の增收あるとき

きは面積減少を利とすると云ふが如きなり。

又耕作法の改良進歩起るときは、資本勞働を增加して、却て遞增的收穫を得るの餘地多く、英國に於ても總ての農民が最上の農民の程度にありたらんには、今日現在の二倍の資本勞働を土地に傾注するも、猶遞增の利益ある可し。然れども此は假想に過ぎず、實際英國今日の狀態に於ては、耕地面積を減じて、より少き面積に資本勞働を集中するときは、收穫遞減の傾向起るを免れざるものと云ふて可なり。

右云ふ收穫とは實物の收穫を指すものにして、貨幣價値の額を云ふにあらず。即ち穀價の變動より起る凡ての作用は、直接には、收穫遞減の法則と關係なきものなり（但し、其の實際上の作用に就ては、大に關係あること勿論なり）。

依て此法則を要言するとき、大體に於てなる制限を加へたるの意を茲に明言するを得可し。收穫遞減の法則は、生産技術の進歩竝に地力の偶發的增進によりて、暫時其働きを中斷せらるゝことある可し。然れども土地の收穫物に對する需要が際限なく增進する以上は、晩かれ早かれ一度は免れざる傾向なり。仍て、此法則の定義は、二部に分つこと、左の如くするを得可し。

一　農業技術の進歩改良は、資本勞働の一定量に對し、土地が一般に與ふる收穫の割合を高むることある可く、或土地に既に用られたる資本と勞働の量從來甚少かりし爲め全地力を出さしむるに足らず、從て其量を增すときは、農業技術に改良進歩起らずとも、比例以上の增收を見ることある可しと雖も、此等の事情は舊國には稀に起る現象なり。されば、此等事情の存せざる所にては、土地に資本と勞働とを加ふること多きに從ひ、（耕作者の熟練增進せざる以上）生産高の增加は比例以下に落つ可し。

二　將來に於て農業技術如何に發達するとも、土地に資本勞働を增加して已まざる時は、終には、一定の資本と勞働の增量によりて得可き增收に減少を招致せざる能はず

さて、ジェームス・ミルが嘗て用ゐたる語を襲踏するときは、土地に充用せらるゝ資本と勞働とは、均一なる繼續的諸『定量分』equal successive doses より成るものと云ふを得可し。

即ち收穫遞減の傾向を此語を用ゐて言表はさんには

初めの若干の定量分に對する收穫は小にして、更らに增し加ふる定量分に對する收

穫は比例以上なるとありて、繼續的定量分に對する收穫は、或は增し或は減ずること
ある可しと雖も、晩かれ早かれ、（無論耕作技術に變化起らざるものと假定するとき
は）其後の增加定量分は從前の定量分に對するより低き比例に於ける收穫のみを
與ふる點に到達す

と云ふを得可し。

而して耕作者に取りて、恰も收支相償ふ點の定量分を稱して『限界定量分』と云ひ、之に對する收穫を『限界收穫』と稱するを得可し。收支相償ふのみにして、地代となる可き餘剩を毫も生ぜざる土地ありて、限界定量分は此土地に加へられたるものと假定するときは、此土地は『耕作の限界』にありて、限界定量分は耕作限界に在る土地に加へられたるものと云ふも亦妨げず。但し事實に於て斯く耕作の限界に在る土地存すとの意にあらず。而して又限界或は最終定量分 marginal, or "last" dose と云ふとも、其は時間の上に於ての最終の意にあらず。適用行程の順序に於ての最終段の意なり。時の上より云へば、最終定量分却て其前の定量分に先つことあり。肥料の最終定量分よりは、刈入に用ゆる資本勞働の定量分の方、時の上に於ては、遙かに後なるが如き是なり。

マ氏は次に限界利用の理論を此定量分に應用して左の如く云へり。

Since the return to the dose on the margin of cultivation just remunerates the cultivator, it follows that he will be just remunerated for the whole of his capital and labour by as many times the marginal return as he has applied doses in all. Whatever he gets in excess of this is the *surplus produce* of land. This surplus is retained by the cultivator if he owns the land himself.

耕作の限界に於ける定量分に對する收穫は、耕作者に取りて、恰も收支相償ふものなるが故に、其結果として、彼が共用ゐたる資本と勞働とに對し、恰も收支相償ふ可き收穫は、限界收穫に乘ずるに、充用したる定量分の總數を以てしたる高に相當す可し。此高以上に彼が得る所は、之を名けて土地の『餘剩收穫』と云ふ。耕作者自ら其土地を所有するときは、彼は此の餘剩收穫の全部を收得す。

更らに、耕作者と地主と人を異にするときには、此餘剩收穫は或條件の下には、地主が地代として收得することある可し。但し地代は之れのみにて成るものと限らずと。

マ氏はリカルドを擁護せんとしてリカルドは專ら英國に就て立論したるものなるが故に最初の定量分に對する收穫を最大と假定し、以下直ちに遞減傾向顯はるゝものと論じたり。蓋し舊國に就ては、開墾の業は既に成し終りたるものと推定するは當然にして、定量分を增すによりて、收穫遞增するが如き程度を脱したるものと見て差支なければ、リカルドが英國の如き舊國に就ては、收穫遞增の作用を全然考慮外に置きたるは至當なりと辯ぜり。此は聊か强辯の嫌なきにあらざれども、一概に不通の論として排す可きにあらず。唯此の論を執て直ちに實際生活に應用せんとするは不可なり。實際に於ては開墾の時代を距つる遠き土地にありても、收穫遞減の傾向行はるゝや否やは、箇々の場合に就て、觀察するを要するものにして、リカルドの謂へるが如き意に於て此法則行はれ居るものと推定するは甚だ謬れり。

マーシアルは次に收穫遞減並に遞增の割合を論ず。曰く天然の力と人の力との生産に於ける割合は、土地の性質、生産物の種類、並に耕作方法によりて同じからず。概して之を云へば、人力の割合は、森林に於て最も少く、牧地之に次ぎ、耕地に至りては大に增加す。」

耕地の中にてもplough landよりspade landの方多し。是れ收穫遞減の作用が森林に於て最も大にして、以下減じ行くが所以なり。

土地の豐度には絶對的の標準なし。生産技術に何等の變化起らざるときと雖も、生産物に對する需要の增加する事情丈けにて、甲乙兩地の豐度を轉倒することなきに非ず。耕耘せざるとき又は僅かに耕耘するとき豐度低かりし土地が、十分耕耘せらるゝに及びて、從前豐度高かりし土地よりも却て豐度高くなることあり。換言すれば、粗放耕作のときと、集中耕作のときと、豐度却て轉倒するとあり。牧地を變じて耕地と爲す場合、或は其反對の場合、水多き沼地に疏水を行ふ場合の如きに於て此事は屢々起る所なり。即ち是より生ずる結論は、收穫遞減の傾向一度起る後と雖も、必ずしも、此傾向のみ續て行はるゝものにあらず。其中斷せらるゝことあり、反對に收穫遞增の傾向起ることありて、收穫は遞減し、遞增し、又遞減するが如く、相交錯することは是れなり。土地は猶連鎖の如し。連鎖の力は其最弱の鎖の力によりて定めらるゝ如く、土地の力は其最貧要素の力によりて定めらる。（此理を農業經營學にては、最小律と稱す。稲垣乙丙博士に『最小律の展開漸減

則の充實』なる有益の研究あり。就て見よ。）然れども餘裕ある人々は、一二の脆弱なる鎖あるも全體は强き連鎖を撰び其脆弱なる鎖を强き鎖と換へて爲めに著しく力强き連鎖を得可しと雖も、修復の期間を待つ能はざるものは、全體の力左迄强からずとも、特に脆弱なる鎖なき連鎖を擇ぶなる可し。土地も亦然り、先づ新國に就きて、土地を開墾するものは、全體の豐度左迄高からずとも、著しき缺點を有せざる土地を擇んで耕す可しと雖も、開拓の業稍々進むときは耕作者に資本と勞働の餘裕あるが故に、著大なる缺點ありとも、此缺點をさへ除却すれば、高き豐度を生ず可き土地を求めて、之を耕耘するに至らん。是れ農業史上屢々多少の改良により突然著しく收穫の增收する場合ある所以なり、米國に於ては殊に如此事例を見ること稀ならず。されば、土地の豐度なるものは、絶對的のものにあらず、時と所とに從ふ相對的のものなるを知る可し。吾人は　一耕作者の熟練能力　二其供し得る資本と勞働の量　三其生産に對する需要の多少等を知るにあらざれば、甲地は乙地より豐度高きか低きかを判定する能はず。特定の時と所に於ける特殊の事情と關連せずしては、豐度なる語は、何等の意味を成さゞるものなり。斯く限定したる上にても、猶豐度なる語の用法一定せりと云ふ可からず、殊に、

一　集中耕作に對し十分の收穫あり、一定面積（例へば一エーカー）の收穫總高多きを豐度高しと云ふと、

二　總收穫高は多からずとも、餘剩生産高卽ち地代額多きを豐度高しと云ふときとの二個の著しく相異る用法あり。英國に就て云へば、耕地の豐度高しと云ふは　一の意味に於て云ふものにして、牧地の豐度高しと云ふは　二の意味に於て云ふものなり。然れども多くの場合に於ては、兩者の別左迄重きを置くに足らず、何れの意にて云ふも同一なりと見て左したる差支なし。

又耕作方法の變遷及び穀物の相對的價格の變動によりても、各種の土地の豐度の高低に變化を生ず。十八世紀の終、コークが地質輕き土地は先づ苜蓿 clover を植へて後、小麥を播くときは、收穫增す可しとの理を發見したるが爲め、從來豐度勝れりとせられたる粘土よりも、輕土の方豐度高くなりしが如きは、耕作方法の變ずるにより、豐度の順序轉倒したる一例なり。又た中央歐羅巴に於て、燃料として、又建築材料として、木材に對する需要

增進したるにより、松山の價格は、他の總ての他種に對して增進したる實例あり。然るに英國に於ては、燃料としては、木の代りに石炭を用ひ、造船用材には鐵を用ひ、又た木材を輸入する便ある爲め、如斯騰貴を見ざりき。又米及黃麻の耕種を始むるときは、他の種物には水分多きに過ぐる土地却て價格騰貴す。英國に於て穀法廢せられてより以後は、肉及乳產物の價は穀物に比して騰貴せり。而して大體に於ては人口の增加して食料に對する需要增加するに從ひ、價格の騰貴すること貧地の方却て富地よりも多し。かくて地價は均一に歸するの傾向あり。蓋し土地に對する需要增すに從ひ、從來缺點多しとして捨て置かれたる土地に改良行はれ、從つて地力を增進するに至るも其理由の一なり。其反對に近來米國の競爭の爲めに英國農業の不況に陷れる結果は、富地よりも貧地の價格を著しく下落せしめたり。殊に資本勞働を多く費すときは相應の收穫あるも、之を減ずるとき、收穫著しく減ずる土地は著しく其價格を減じたり。

以上縷述せる所により土地の豐度には絕對的標準なきことを知る可し。今耕作に就ても然り。耕作の良否と云ふは相對的の語にして、絕對的には意味を成さず。海峽諸島の最豐地の最良耕作とは、一エーカーに對し、非常に多額の資本勞働を費すの謂なり。此等諸島は英國の市場に近く、本土よりは早收を得可き氣候を獨占す。然るに天然のまゝにては其土地は二個の大缺點（燐酸の不足とポタシュの不足）を有する爲、收穫甚だ乏し。然るに人力の助により、殊に海岸の海草を肥料とするときは、此缺點を補ひて、其豐度は非常に高きものとなるを得。かくて一エーカーより『走り』の馬鈴薯價格百磅を收穫するを得るなり。然れども此は走りの馬鈴薯を價高く買ふ英國市場近くに在るが爲め、斯くの如き『良き耕作』を行ふを得るものにして、同一の耕作法を西部米國に行はんか、收支到底償はず、卽ち良き耕作にあらずして、惡き耕作法たらんのみ。耕作方法の良否も畢竟時と所とに應ずる相對的事情によりて、判定す可きものにして、各地各時代を通じて耕作法の良否を論ずることは不可能なり。

マーシアルは以下五、六、七の三節に於てリカルドを擁護し其所論の缺點と認めらるゝものは、解釋の如何によりては、必ずしも缺點たらざること、ゲリーの彼に對する攻擊は多くは誤解に基くこと、ゲリーの所論にも執る可き所あることなどを述べ、續て耕地以外の

他種に行はるゝ收穫遞減の傾向を論じ、海鑛山住居用の土地に就て耕地と趣を異にする點を擧げたりと雖も、今細說の要を見ず、故に省く。章尾の補註亦之に準ず。

第四章　補　論

收穫遞減の法則が經濟學上の定理となりしは佛國との大戰爭中に於ける英國特有の事情に基けるものにして、殊に後章に說く可き人口增加の問題と密接の關係を有するものなることゝ本文に說けり。今此の事情を叙述して最も明確精緻なるはキアナンの論なり。載せて

Theories of Production and Distribution. 2. E. 1903.……（後版異同なし）

百四十七頁以下百八十二頁までにあり。就て見る可し。

キアナン曰く、

It is impossible to read West's pamphlet without seeing that the form in which the "law of diminishing returns" was subsequently taught, and the phraseology in which it was expressed, are far more due to him than is imagined by those who only know him as the subject of a civil reference in Ricardo's preface. But for securing the "law of diminishing returns" the prominent place which it has occupied in English political economy, not West but Malthus and Ricardo are responsible. p. 160.

ウエストの書を讀むものは、「收穫遞減の法則」として後世敎へらるゝ其形式並に此法則を言顯はす用語も共に、リカルドの序文中にある鄭重なる引照の主體としてのみウエストを知る人の想像より以上に彼（ウエスト）の賜なるとを悟らざる能はざる可し。然れども收穫遞減の法則なして英國の經濟學上斯くまで顯著なる地位を得るに至らしめたるはウエストにあらず、マルサス及リカルドの責任に歸す可きものなり

茲に云ふウエストの書とは千八百十五年に公けにしたる左の小册子なり。

Essay on the application of capital to Land, with observations shewing the impolicy of any great restriction of the importation of corn and that the bounty of 1688 did not lower the price of it. By a Fellow of University College, Oxford.

「土地に對する資本の充用に就ての考、附たり、穀物の輸入を甚だしく制限するの不可なる

理由及千六百八十八年制定の奬勵金は穀價を低下せしめざりしことに就ての觀察』、而してキアナンの云ふ鄭重なる引照とはリカルド序文中の左の一句なり。

In 1815, Mr. Malthus, in his "Inquiry into the nature and progress of Rent," and a Fellow of University College, Oxford, in his "Essay on the application of Capital to Land," presented to the world, nearly at the same moment, the true doctrine of rent; without a knowledge of which, it is impossible to understand the effect of the progress of wealth on profits and wages, or to trace satisfactorily the influence of taxation on different classes of the community; particularly when the commodities taxed are the productions immediately derived from the surface of the earth.

千八百十五年にマルサス氏は其著『地代の性質及進歩』に於て、オクスフォードのユニヴァーシテー・コレヂの一校友と署名せる人（ウエスト）は其『土地に對する資本の充用に就ての考』に於て、殆んど時を同じして、地代に關する眞正なる學理を世界に示したり。之を知らざれば富の進歩の利潤及勞銀に於ける作用を了解する能はず、又租稅の社會各階級に及ぼす影響を滿足に究むること能はず、殊に課稅物件が直接に土地の表面より得る生産物なるとき然り。

此書單にオクスフォードの『ユニヴァーシテー・コレヂ』校友とのみ署名し著者の名を顯さず。此書は近頃マルサスの Nature and progress of Rent と同じく米國ジョンス・ホプキンス大學助教授ホランダー A Reprint of Economic Tracts なる叢書中に收めて重刊せるものありて、誰人も容易に一讀し得る便あり。全篇僅かに五十四頁より成る。

抑も土地に收穫遞減の傾向あるを唱へ出したるは、佛國の學者チュルゴーなることは、マーシアルも脚註中に明言する所なり。然れどもキアナンの言ふ如く、是は後世の學說の發展に殆んど何等の影響を及ぼすことなくして已めり。故に右掲げるウエストの小册子こそ收穫遞減の法則を學理として建設したる最初の書と目す可きものなれ。而して此書を出版したるウエストの趣意は、其年の英國議會に於て正さに制定せんとする穀法に過重なる保護的穀價を輸入許可價と定むることなからしめむ爲め、穀價の人爲的引上げの害あるを切論して、議員及輿論の反省を促さんとするにありき。

ウエスト自ら其著の卷頭に云つて曰く、

The chief object of this essay is the publication of a principle in political economy, which occurred

F. I, 39.

to me some years ago; and which appears to me to solve many difficulties in the science, which I am at a loss otherwise to explain.

On reading lately the reports of the Corn Committees ("Report from the Select Committee on petitions relating to the Corn Laws of this Kingdom; together with the Minutes of Evidence, and an Appendix of Accounts. Ordered, by The House of Commons, to be printed, 26 July, 1814"), I found my opinion respecting the existence of this principle confirmed by many of the witnesses, whose evidence is there detailed. This circumstance and the importance of the principle to a correct understanding of many parts of the corn question, have induced me to hazard this publication before the meeting of parliament, though in a much less perfect shape than I think it would have assumed had I been less limited in point of time. I shall first proceed to prove this principle and shall then shew some of the consequences which flow from it. The principle is simply this, that in the progress of the improvement of cultivation the raising of rude produce becomes progressively more expensive, or, in other words, the ratio of the net produce of land to its gross produce is continually diminishing.

By the gross produce I mean, of course, the whole produce without any reference to the expense of production; by the net produce, that which remains of the gross produce after replacing the expense of production.

In the progress of cultivation both the gross produce and the net produce must be constantly increasing; for additional expense or capital would not be laid out on land, unless it would reproduce not only sufficient to replace the capital laid out, but also some increase or profit on that capital, which increase or Profit is the net produce. But the proposition is, that every additional quantity of capital laid out produces a less proportionate return, and consequently, the larger the capital expended, the less the ratio of the profit to that capital. Thus suppose any quantity of land such that 100*l.* capital laid out on it would reproduce 120*l.* that is 20 per cent. profit, I say that a double capital viz. 200*l.* would not reproduce 240*l.* or 20 per cent. profit, but probably 230*l.* or some less sum than 240*l.* The amount of the profit would no doubt be increased, but the ratio of it to the capital would be diminished. pp. 9—10.

此の論文の主たる目的は數年前予が心付きたる經濟學上の一原則を世に公けにせんとするに在り。此原則は予の見る所にては他に説明の道なき經濟學上の多くの難問を解釋するものゝ如し。

近頃穀法準備委員の報告を讀むに、予は此報告中に詳述しある證言の多くによりて此原則の存在に關する予が宿論の確められあるを見出したり。此事情及び穀物問題の多くの部分を正しく諒解するに、此原則の必要なるとにより、予は議會召集前此の出版を敢てするに至れり。但し時間乏しき故其態は予が期する所よりは遙かに不完不備のものたるを免れず。其原則とは他にあらず、耕作改良の進程に於て總生産の收得は累進的に費用多くを要す、換言すれば、土地の純生産の其總生産に對する割合は絶へず遞減し行くものなりてふ事是なり。勿論總生産と茲に言ふは生産費に關係なく全生産を總稱するものにして、純生産とは、總生産より生産費を控除したる殘額を指して云ふものなり。

耕作の進歩するに從ひ、總生産も、純生産も絶へず增加す、支出したる資本を回收するに足るのみならず、猶ほ此資本に對し增加卽ち利益を生ずるにあらざれば、餘分の費用又は資本を土地に注ぐものなかる可き理なり。此增加卽ち利益は純生産額に當るものなり。然るに予の主張するは、支出する資本增すに從ひ、之に對する收穫の比例は減じ、從て資本多ければ多き程、資本に對する利益の割合少くなると云ふこと是れり。例へば、百磅の資本を注ぐとき百二十磅の收穫あり、卽ち利益率二割なるに、其倍額二百磅を注ぐに二百四十磅の收穫はなく、二百三十磅又は二百四十磅よりは少き其他の額の收穫あるのみにて、二割の利益なきが如きを云ふ。換言すれば、利益の額は勿論增加すれども、資本に對する其割合は減ずるなり

是によりて、英國の生産のみに食料を仰がんとする時は、勢ひ此の收穫遞減の原則の働きを早く招致し、穀價を愈々高からしむるの不利益あるを證明し、穀法の保護的傾向を幾分にても防止せんとすること卽ちウエストの眞意なりしなり。初より單純なる一の純理的原則として主張せしものにあらず。此事情は收穫遞減の法則の功過を論ずるに方つて必ず考慮の外に置く可からず。一片の純理論なれば、其理論上の價値のみによりて、直に採否を決定するを得可けむ。實際上の必要に基きて起れるものは、必ずしも然る能はず。簡單なる一の法則の中に複雜重要なる歴史的發展の含まるればなり。蓋し一片の理法として見るときは、收穫遞減の法則は、餘りに常識的、餘りに平々凡々にして、殆んど之を學理論中に收容す可き價値なきが如し。然るに穀價の騰貴は人口の增殖と最も密接なる關係を有し、マルサスの人口論に於ける人口過超の憂は、人爲の輸入制限により收穫遞

減の作用を早からしめ、從て穀價を高からしむるときは、亦必ずしも一片の杞憂たるに止るものにあらず。げに『收穫遞減』『人口過超』『地代の騰貴』てふ正統派經濟學上の三大問題は、皆十九世紀初頭の英國特有の國情、卽ち英佛戰後に於ける英國地主の跋扈、穀物の輸入制限の政策の下に於て發生したるものにして、此事情に照し見て始めて眞の意味を成すものなり。穀法廢止後、自由貿易の世となりては、此事情は全然一變したるに、猶舊き理論を其儘襲踏したればこそ弊害を生じたるなれ、其唱道せられたる當時に於ては此等皆十分に存在の論據を有したるものなること必ず記憶せざる可からず。

マルサスはウエストと殆んど同時に、收穫遞減の作用を公唱せり。卽ちウエストの書と同年なる千八百十五年に公けにしたる

Grounds of an opinion on the policy of restricting the importation of foreign corn, intended as an appendix to "Observations on the Corn Laws."

（此書はプレンタノ、レーザー兩氏主幹の『內外古今經濟論集』第六册に獨逸文に譯したるもの收めあり）

及び同じ年出版の

An inquiry into the nature and progress of rent, and the principle by which it is regulated.

（此書は右論集中に獨譯あり、原文はホランダーの『レプリント』中にも收めあり）

の二書に於て之を見るを得るなり。今後者より左の一節を揭げて之を示さん。

I have no hesitation in stating that, independently of irregularities in the currency of a country, and other temporary and accidental circumstances, the cause of the high comparative money price of corn is its high comparative real price, or the greater quantity of capital and labour which must be employed to produce it: and that the reason why the real price of corn is higher and continually rising in countries which are already rich, and still advancing in prosperity and population, is to be found in the necessity of resorting constantly to poorer land—to machines which require a greater expenditure to work them—and which consequently occasion each fresh addition to the raw produce of the country to be purchased at a greater cost—in short, it is to be found in the important truth that corn, in a *progressive country*, is sold at the price necessary to yield the actual supply; and that, as this supply becomes more and more difficult, the price rises in proportion. Original p. 40—41.

Reprint p. 35—6. Deutsch. S. 63.

予は次の如く言ふを憚からず。一國の幣制の不規律其他一時的・偶發的事情を外にして、穀物の比較的貨幣價格高きは其比較的の實際價格の高きによる。換言すれば之を生産するに用らるゝ資本と勞働の量多きが爲めなり。而して穀物の實際價格が富裕にして、繁榮と人口との增進する國に於て高く、又絶えず騰貴しつゝある所以は、絶へずより、貧しき土地を耕し餘分の費用を要する機械を用ゆるの必要に迫らるゝによる。是によりて國の總生産額の增加は益々高き費用を要するに至る。即ち進歩的國に於ては、穀物は實際の供給を招致するに必要なる價に於て賣らるゝものにして、此の供給が漸次困難を加ふるに從ひ、價格は之に應じて騰貴するなり

リカルドはウエスト、マルサス兩人の右說を繼承し、更らに之を布演したるものなることは、前に引照せる序文の一節に自ら明言する所なり。然るに後世收穫遞減の法則は殆んどリカルドの創說に係るものゝ如く認めらる。リカルドの說に對してケリー其他の學者が種々の議論を試みたる是亦其當時其場合に於ては、相應の理由ありたるものなれども、今日に於て其等詳細の點を繰返へすは理論の上にも、實際の上にも、殆んど寸益なき無用の業と云はざるを得ず。予が本文に於てマ氏のリカルド辯護論、ケリー評論等を悉く省略に附したるは、此理由によるものなり。

*　*　*　*　*　*　*

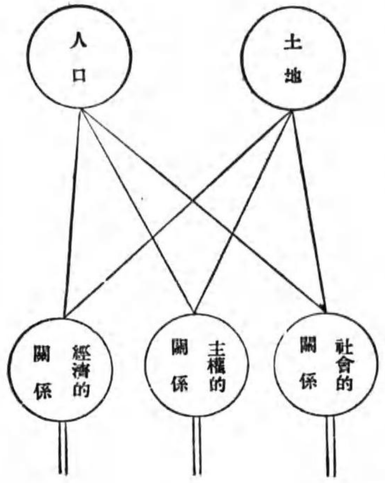
本章參考書は本文補論等に引用したるもの、殊にキアナンの著書を看る可し。

第五章　人口の法則

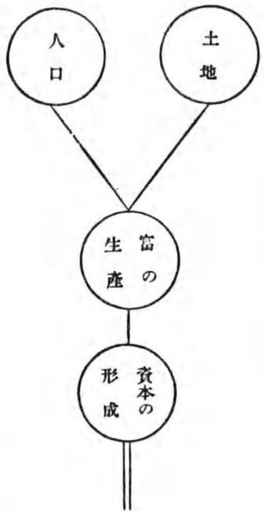
人口の問題は經濟學の書何れも之を論ぜざるはなし。然れども之を論ずるに如何なる觀察點よりす可きや學者の立場甚だ明瞭ならず。近來稍々流行の組織的立場より立論するものにありては、人口は國民經濟の要素の一として考究す可しとすると、粗々異論なきものゝ如し。即ちシュモラーは、土地・人民・技術の三を以て『國民經濟の要素』なり

とし、セリグマンは自然包圍と人口との二を以て『經濟生活の基礎』なりと說く。其他の學者にありては、土地と人口とは必ず之を要素とすること、一般にして、異論の存するは、第三以下の要素に關するのみ。經濟行爲の立場より觀察する舊來の通說に於ては、土地と人口とは、生產の二要素と認められて異議を容るゝことなく、唯第三の要素として、資本を算入す可きや否や、又更らに第四・第五の生產要素を認む可きや否やに關してのみ學者見る所を異にするなり。新派の學者が國民經濟若くは經濟生活の要素と稱するは、舊說の生產要素を言換へたるに過ぎざること前既に述べたり。一は靜態の觀察を主とし、他は動態の觀察を主とするが故に、『要素』の地位に就て斯く異れる名辭を附すと雖も、其趣意の存する所に至つては、多く懸隔する所あるを見ざるなり。然るに國民經濟乃至經濟生活の要素と云ふときは、單に生產增進の原因として土地若くは人口の增殖を論ずること舊說の如くにては、不足不備の感起るを免れず。人口其のものに就て、又た單に動態（增減）のみならず、靜態（分布疎密等）に就いても考究するを要すとするは寧ろ當然なり。茲に於て曩時の人口增減論（主として增殖論なり。マーシャルは其第四章に題して、Growth of population『人口の增殖』と云ふ）は擴張せられて、人口に關する一般的叙述となり、人口統計の大要全部經濟原論中に收容せられんとする傾向起る。セリグマンの新著の如きは著しく此新傾向を代表するものと云ふ可し。然るに斯く人口論の範圍を擴張するときは、經濟學の人口論と、統計學の人口論乃至所謂民勢學（デモクラフキー又はデモロジー）とは、殆んど相分つ所なきに至る。土地に就ても、單に供給の働因、生產の一要素として見るのみならず、汎く一般に土地に就て論究せんとの傾向稍々起りて、地理・地文、若くは土壤論・地質學までをも經濟學に收拾し來らざる可からざるに至れり、シュモラーの原論の如きは、明かに此趨勢に因はれたるものなり。斯くして、經濟學は一定の統一的知識より成る一科獨立の學問たる性質を失ひ、軈て『ポリヒストリー』の班に落ちんとす。抑も國民經濟（若くは經濟生活）の要素として、土地と人口とを擧ぐるは、土地・人口其ものを以て、國民經濟に特有なる要素を成すとの意なる可からず。苟くも人集りて社會を成し、國を建て、一定の秩序的生活を營む以上は、土地と人口との兩者が缺く可からざる要素なることは言を俟たざる所にして、社會國家の概念亦た土地・人民なる二要素

を缺く可きにあらず。唯此二要素を結合す可き第三以下の要素あるありて、茲に始めて土地と人口とは或は社會其もの、要素と認められ、或は國家の要素と認められ、或は國民經濟の要素と認めらるゝなり。直下に土地と人口と其ものに就てのみ之を見るときは、兩者は此等の限定を超越する與定事件なり、其何れかに特占せらる可き部分現象にあらず。今試みに此理を圖解すれば左の如くならん。



茲に謂ふ經濟的關係とは如何なるものなりや、土地と人口とが國民經濟の要素となる可く、之を結合する要素とは何なりや。新說に於ても、舊說に於ても、此點明確なる解釋あるを見ず。唯舊說は新說よりも漠然たること稍々少しと云ふ差あるのみ。蓋し舊說に於ては、土地も人口も共に之れを活動の要因、供給增加の要件卽ち生産の要素として論ずるものにして、組織體の要素なりと云はず。其活動は、富の生産てふ限局せられたる活動なり。今其意を推して云ふときは、舊說は



と觀察するものなり。其說の當否は姑く措き、立論の趣稍々系統あり、憑據ありと認む可し。之に反し、新說に於ては、セリグマンの如く、第三以下の要素を加へず、單に土地と人口とのみを經濟生活の基礎なりと說くものあり、シュモラーの如く、稍々新案を試みて、技術

を以て此兩者を結合する第三の要素と見るものあり、或は組織論の立場に立ち乍ら、資本を以て第三の要素とし、之に國家・文化の如きを第四・第五の要素として附加せんと欲するものあり、諸說紛々定まる所を見ず。是れ畢竟標榜のみ徒らに新しくして、內容は舊說襲踏以外多く改まる所なき、根本的缺陷の致す所なりと云ふ可し。

抑も經濟學に於て土地と人口とを論ずるに至れるは、理論上の必要よりも、實際上の必要に促されたるものならずんばあらず。土地の經濟論は延長論にあらず、豐度論にあらずして、收穫遞減論こそ其眼目なれ、而して此は十九世紀初葉に於ける英國特殊の國情之を促がしたるものなること既に言へる所なり。今人口に就ても亦然り。否土地收穫遞減の法則を考究せしむるに至れると同一の事情こそ、土地の收穫によりて養はる可き人口の問題、殊に其增殖の原則の考究を餘義なくしたるなり（但しマルサスの人口論は收穫遞減論に先つて起れるものなり、而も彼の人口の法則が斯學に重きを爲せるは、彼が後年に於て自らも心付き、又リカルド等によりて更らに完成せられたる收穫遞減論あるが爲なり。兩者其一を離れては、殆んど何等の意味を成さず、此點近來の學者多く之を說かず）。然るに歷史的研究を呼號する新派の學者、却て此の歷史的沿革を無視し、人口論を爲すに、其發生の事情を全く度外に置くは、自家撞着と云はざるを得ず。而して其結果は重大なり。一定の關係に於て說く經濟學上の人口論を此關係より切斷する結果、其論單に漠然たる一般の人口統計論と成り、民勢學と成り、終に何等獨立の價値を有せざる贅辯に化し了る。予は斷じて此新傾向に追從する能はず。世上一派の學者あり、經濟學の社會的科學たる地位に疑を挾みて曰く、經濟學に於て、法則と稱せらるゝものに、全然社會現象の法則たらずして、單に自然界の法則を社會事情に適應して言表はすに過ぎざるものあり、收穫遞減の法則の如き其適例なりと。然り、今の新派の學者の說の如くんば、此の疑は正しき論據の上に立つものなり。然れども前章云へる如く、自然現象の觀察に基きて立論せる收穫遞減の法則は、他に人口增殖の問題ありて、穀價高低の問題の基礎となり、而して當時英國に於て最も重大の政治問題たりし穀法贊否論の出立點として斯學に入り來りたればこそ、斯く重要の理論と看做さるゝに至りたるなれ。此事情を外にして見るときは、抑も收穫遞減の法則の如きは、詮ずる所常識論の範圍を多く出づるものにあらず。